

一般国道9号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5

旭山遺跡・中尾H遺跡(3区)

2016年3月
国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

一般国道9号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 5

旭山遺跡・中尾H遺跡(3区)

2016年3月

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

序

現在、一般国道9号の大田市朝山町～久手町間については、緊急時の代替路線の確保、医療・観光・物流活動の支援を目的として、中国地方整備局松江国道事務所では山陰自動車道の一部である朝山・大田道路を平成19年度に事業化し、整備を進めています。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

この報告書は平成25年度に実施した大田市波根町上川内に所在する旭山遺跡と、同市久手町刺鹿に所在する中尾H遺跡（3区）の発掘調査成果をとりまとめたものです。今回の調査では古代から中世の古道に面した集落や、古代の川跡に残されていた土器群などを検出し、当時の生活の様子を考える上で貴重な資料を得ることができました。本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査および調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

平成28年3月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所 小林 寛

序

本書は、島根県教育委員会が国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて実施した一般国道9号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の内、平成25年度に実施した旭山遺跡、中尾H遺跡（3区）の発掘調査成果をとりまとめたものです。

旭山遺跡は、大田市波根町に所在し、古代から中近世に続く遺跡で、瓦質土器の香炉など優れた遺物を検出しました。また、同市久手町の中尾H遺跡（3区）では、古墳時代から古代にかけて流れていた川跡から大量の土器類を検出しました。大田市東部地域における古墳時代から古代、中近世の人々の活発な活動の様子を垣間見ることができました。本書が地域の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を深める一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査と報告書の作成にあたりご協力いただきました地元住民の皆様を始め、国土交通省中国地方整備局、大田市教育委員会、関係諸機関の皆様方に厚くお礼申し上げます。

平成28年3月

島根県教育委員会

教育長 藤原孝行

例　言

1. 本書は、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が平成25年度に実施した一般国道9号（朝山大田道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものである。
2. 本書で報告する遺跡は次のとおりである。
旭山遺跡（大田市波根町上川内）、中尾H遺跡（3区）（大田市久手町刺鹿町）
3. 調査組織は次の通りである。
調査主体　島根県教育委員会
平成25年度　現地調査
〔事務局〕　廣江耕史（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）
　　熱田貴保（管理課長）
〔調査担当者〕　林 健亮（調査第二課長）、内田律雄（調査第二課嘱託職員）、福田市子（同臨時職員）、飯塚由起（同）
平成27年度　報告書作成
〔事務局〕　廣江耕史（島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長）、渡部宏之（総務課長）
　　池淵俊一（管理課長）
〔調査担当者〕　林 健亮（調査第二課長）、福田市子（調査第二課臨時職員）
4. 現地調査および整理作業において、以下の方々からご指導いただいた。
勝部 昭（島根県文化財保護審議会委員）、長嶺泰典（大田市教育委員会教育部生涯学習課）
5. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、掘削、測量等）については、島根県教育委員会から株式会社堀工務店に委託した。
6. 採図中の北は、測量法による平面直角第III座標系X軸方向を指し、座標系のXY座標は世界測地系による。また、レベル高は海拔高を示す。
7. 本書第2図は、国土地理院発行の1/25,000地図を使用して作成したものである。
8. 本書に掲載した写真は、空中撮影写真を除き林が撮影した。
9. 本書に掲載した遺構・遺物実測図の作成及び浄書は、各調査員のほか阿部賢治（調査第二課臨時職員）、田中玲子（調査第三課臨時職員）が行った。
10. 本書の執筆は、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て林が行った。また、本書の編集は林・福田が行った。編集にあたってはDTP方式を採用し、Adobe社のPhotoshopCS5、IllustratorCS5を用いてトレース等を行い、InDesignCS5で編集作業を行った。
11. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターに保管している。

凡　例

1. 遺物実測図の断面は、土師器・陶磁器を白ヌキ、須恵器を黒塗り、鉄製品、石製品は斜線で示している。木製品については年輪方向を模式的に記入している。

2. 本書で用いた土器の分類及び編年観は下記の論文・報告書に依拠している。

(1) 土師器

『山陰における中世前期の諸様相』山陰中世土器検討会 2006 年

(2) 須恵器

榎原博英「石見の国須恵器生産と出雲産須恵器」『出雲国の形成と国府成立の研究』島根県
古代文化センター 2010 年

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
旭山遺跡	1
中尾H遺跡（3区）	2
第2章 旭山遺跡・中尾H遺跡の位置と歴史的環境	3
第3章 旭山遺跡の発掘調査	8
1. 調査の概要	8
2. 遺構	8
3. 出土遺物	22
4. 古道の発掘調査	32
5. 小結	38
第4章 中尾H遺跡（3区）発掘調査	39
1. 調査の概要	39
2. 遺構	39
3. 出土遺物	45
4. 小結	53
第5章 総括	54

挿図目次

第1図	旭山遺跡・中尾H遺跡の位置	3
第2図	旭山遺跡・中尾H遺跡の位置と周辺の河川	4
第3図	旭山遺跡・中尾H遺跡と周辺の遺跡	6
第4図	旭山遺跡調査区配置図	9
第5図	旭山遺跡グリッド配置図	10
第6図	旭山遺跡遺構配置図	11
第7図	土層堆積状況	12
第8図	須恵器・瓦出土状況	13
第9図	平安時代～中世の遺構・遺物検出状況	14
第10図	加工段1実測図	15
第11図	加工段2実測図	16
第12図	ピット8・30・51実測図	17
第13図	中世末～近世の遺構配置図	18
第14図	礎石建物実測図	19
第15図	SK01実測図	20
第16図	SD01上層堆積状況	21
第17図	SK03・04上層堆積状況	21
第18図	石器実測図	22
第19図	須恵器・瓦実測図	22
第20図	土師器実測図（1）	23
第21図	土師器実測図（2）	24
第22図	白磁・青磁・灰青釉陶器・青花磁器実測図	25
第23図	瓦質土器実測図	26
第24図	陶器実測図	27
第25図	陶磁器実測図（1）	28
第26図	陶磁器実測図（2）	29
第27図	石製品実測図	30
第28図	金属器実測図	31
第29図	古銭実測図	31
第30図	古道トレーンチ配置図	33
第31図	古道トレーンチ1～3配置図	34
第32図	古道トレーンチ4～6配置図	35
第33図	古道トレーンチ1～3土層断面図	36
第34図	古道トレーンチ4～6土層断面図	37
第35図	古道出土遺物実測図	37
第36図	中尾H遺跡調査区配置図	40

第37図 中尾H遺跡(3区) グリッド配置図	41
第38図 中尾H遺跡(3区) 遺構配置図	42
第39図 中尾H遺跡(3区) 土層堆積状況	43
第40図 中尾H遺跡(3区) 遺物出土状況	44
第41図 繩文土器・弥生土器・石器実測図	45
第42図 木製品実測図	45
第43図 土師器実測図(1)	46
第44図 土師器実測図(2)	47
第45図 土師器実測図(3)	48
第46図 土師器実測図(4)	49
第47図 須恵器実測図(1)	50
第48図 須恵器実測図(2)	51
第49図 須恵器実測図(3)	52
第50図 中世の土師器・白磁実測図	52
第51図 染付実測図	53
第52図 古銭実測図	53

表目次

第1表 旭山遺跡出土石器観察表	56
第2表 旭山遺跡出土土器・陶磁器観察表	56
第3表 旭山遺跡出土石製品観察表	60
第4表 旭山遺跡出土金属器観察表	60
第5表 旭山遺跡出土古銭観察表	60
第6表 旭山遺跡(古道)出土陶磁器観察表	60
第7表 中尾H遺跡(3区)出土石器観察表	60
第8表 中尾H遺跡(3区)出土木製品観察表	60
第9表 中尾H遺跡(3区)出土土器・陶磁器観察表	61
第10表 中尾H遺跡(3区)出土古銭観察表	64

写真図版目次

旭山遺跡

- 図版 1 旭山遺跡調査前近景（西から）
旭山遺跡全景（東から）
- 図版 2 旭山遺跡全景（西から）
旭山遺跡完掘状況（南から）
旭山遺跡作業風景（東から）
- 図版 3 旭山遺跡西壁土層堆積状況（東から）
旭山遺跡東壁土層堆積状況（西から）
旭山遺跡東壁土層堆積状況（北西から）
加工段 1 土層堆積状況（南から）
- 図版 4 加工段 1 土層堆積状況・遺物出土状況（南から）
加工段 1 完掘状況（南から）
- 図版 5 加工段 2 完掘状況（北東から）
加工段 2 完掘状況（南東から）
- 図版 6 ピット 8 土層断面（東から）
ピット 30 土層断面（西から）
ピット 51 土層断面（西から）
- 図版 7 磐石建物完掘状況（南から）
磐石建物北東側の状況（東から）
SDO1 土層断面（西から）
- 図版 8 SKO1 検出状況（南東から）
SKO1 完掘状況（南東から）
- 図版 9 SKO3 土層断面（西から）
SKO4 土層断面（西から）
SKO4 完掘状況（西から）
- 図版 10 古道トレチ 1 完掘状況（東から）
古道トレチ 3 完掘状況（西から）
古道トレチ 4 完掘状況（東から）
古道トレチ 5 完掘状況（東から）
- 図版 11 古道トレチ 6 完掘状況（南から）
旭山遺跡西側に続く古道の現状（西から）
古道トレチ 2 付近の水路内の加工（北から）
旭山遺跡西側の古道に接する岩窟（南から）
- 図版 12 旭山遺跡全景（空撮 西から）
旭山遺跡全景（空撮 東から）

- 図版1 3 石器・瓦・須恵器
図版1 4 土師器（1）
図版1 5 土師器（2）
図版1 6 土師器（3）
図版1 7 土師器（4）
図版1 8 白磁・青磁・灰青釉陶器・青花磁器
図版1 9 青花磁器・瓦質土器（1）
図版2 0 瓦質土器（2）
図版2 1 陶器（1）
図版2 2 陶器（2）
図版2 3 陶磁器類（1）
図版2 4 陶磁器類（2）
図版2 5 陶磁器類（3）
図版2 6 陶磁器類（4）
図版2 7 古道出土陶磁器・石製品
図版2 8 金属器・古銭

中尾H遺跡（3区）

- 図版2 9 中尾H遺跡（3区）調査前近景（東から）
中尾H遺跡（3区）調査前遠景（東から）
東壁土層堆積状況（北西から）
西壁土層堆積状況（東から）
図版3 0 西壁土層堆積状況（北東から）
新しい流路の完掘状況（東から）
古代の流路、木製品（42）出土状況（東から）
古代の流路完掘状況（西から）
図版3 1 完掘状況（北西から）
完掘状況（南西から）
図版3 2 中尾H遺跡（3区）全景（空撮 東から）
中尾H遺跡（3区）全景（空撮 西から 鉄塔の右側は市井深田遺跡）
図版3 3 繩文土器・弥生土器・石器
図版3 4 土師器（1）
図版3 5 土師器（2）
図版3 6 土師器（3）
図版3 7 土師器（4）
図版3 8 土師器（5）
図版3 9 土師器（6）
図版4 0 土師器（7）

- 図版 4 1 土師器（8）
- 図版 4 2 須恵器（1）
- 図版 4 3 須恵器（2）
- 図版 4 4 須恵器（3）
- 図版 4 5 須恵器（4）
- 図版 4 6 須恵器（5）
- 図版 4 7 須恵器（6）
- 図版 4 8 須恵器（7）
- 図版 4 9 土師器・須恵器・染付・古鏡
- 図版 5 0 木製品・土師器・白磁

第1章 調査に至る経緯と経過

国道9号は、京都府京都市から山口県下関市に至る総延長約750kmで、山陰地方の諸都市を結ぶ幹線道路である。しかし近年は、都市部を中心にしばしば交通渋滞が発生し、このため都市間の円滑な連携や生活環境の確保が困難な状況となってきており、その様相は島根県下出雲市及び大田市周辺においても例外ではなくなっていた。特に出雲市と大田市の境である仙山峠付近は急カーブが連続するため交通事故が多発するなど交通の難所とされ、平成18年7月には地滑り災害により全面通行止めとなるなど主要幹線道路としての機能に支障をきたしている。このような課題を解決するため、交通混雑を緩和して円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、また、今日的な課題となっている災害時緊急連絡としての機能を発揮させるために国土交通省により朝山大田道路（延長6.3km、大田市朝山町朝倉～大田市久手町刺鹿）の整備・建設が計画されて事業化が図られ、平成18年3月に都市計画決定された。

この計画・事業化に当たり、国土交通省から島根県教育委員会に対して、平成19年度に朝山大田道路建設予定地内の遺跡の有無について照会があった。これを受けて島根県教育委員会では大田市教育委員会の協力の下、平成19年度以降、数次にわたり予定地内における遺跡の分布調査を実施した。その結果、要注意箇所の9か所を含めて全部で22か所の調査対象地を確認し、国土交通省に回答した。

以後、この結果を受けて、国土交通省と島根県教育委員会の間で適時協議が行われ、予定地内の埋蔵文化財調査について、具体的に検討が行われた。協議の経過の中で、平成22年3月12日付け国中整松一官第272号で文化財保護法第94条第1項の規定による通知が文化庁長官あてに提出された。それに対し、平成22年3月12日付け島教文財第2号の74で、島根県教育委員会教育長から13遺跡の記録保存のための発掘調査の実施が勧告された。

その後の協議を経て、島根県教育委員会では平成22年度から予定地内の発掘調査を開始することとなった。平成22年度には中尾H遺跡（1・2区）を、平成23年度に市井深田遺跡、門遺跡、高原遺跡（1区）を、平成24年度には荒槻遺跡、鈴見B遺跡（1区）、高原遺跡（2区）を、平成25年度には中尾H遺跡（3区）、鈴見B遺跡（2区）、旭山遺跡を、平成26年度には中尾H遺跡（4区）、門遺跡、城ヶ谷遺跡、涼見E遺跡、神谷遺跡、大西大師山遺跡の西半部、高原遺跡（3区）について発掘調査を実施した。この間、門遺跡・高原遺跡（1区）・中尾H遺跡（1・2区）、荒槻遺跡・鈴見B遺跡（1区）・市井深田遺跡、鈴見B遺跡（2区）、高原遺跡（2区）の発掘調査報告書を刊行している。また、各年度の後半を中心に、国庫補助を受けて事業地内に含まれる周知の埋蔵文化財包蔵地や要注意箇所の試掘調査を実施し、調査箇所の絞り込みを進めた。平成24年11月から12月には、旭山遺跡前面を通り、朝山へ繋がる古道について、6カ所のトレンチを入れ、土層の堆積状況を確認した。

平成27年度には大西大師山遺跡の東側約3.600mについて発掘調査を行うとともに、本報告書の作成業務及び平成26年度に調査を行った神谷遺跡・涼見E遺跡・城ヶ谷遺跡の遺物整理作業を行った。

旭山遺跡 旭山遺跡は、大田市波根町上川内に位置し、上川内砦跡や旭山城跡と呼ばれる山城跡として古くから知られていた。旭山遺跡として平成25年度に発掘調査を実施した地点は、その麓

部分にあたり、平成 24 年 10 月 30 日から 11 月 29 日まで調査を行った。この間、11 月 8 日には土師器皿が、11 月 9 日には青磁などが出土したことから、約 700m²を全面調査対象地として国土交通省松江国道事務所に報告した。

全面調査は、平成 25 年 9 月 9 日から 12 月 12 日まで実施した。調査中の 10 月 28 日には、調査区東端で土師器類の出土が目立つことから、約 20m²を拡張している。この間、11 月 15 日に島根県文化財保護審議会員勝部昭氏と大田市教育委員会による調査指導を受け、11 月 21 日にはラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

中尾 H 遺跡（3 区） 中尾 H 遺跡は、大田市久手町刺鹿の谷間に位置する水田部である。調査対象と考えられる範囲は、朝山大田道路本線内のほか、その路線内にある送電線鉄塔を移設する必要があり、その移設先も調査範囲となる。本線部分については、平成 22 年に 13 力所の試掘調査を行い、調査範囲を絞った上で、あぜ道で分けられた 2 調査区（1 区・2 区）について発掘調査を実施した。この部分については、平成 24 年度に整理作業を実施し、平成 25 年 3 月に発掘調査報告書を刊行している。1・2 区の調査を実施した時点では、送電線鉄塔を残したままとなっていたが、平成 25 年度に送電線鉄塔移設先を発掘調査し、それを受けて鉄塔を新設。新設後に元の鉄塔を除去し、平成 26 年度に鉄塔跡地（4 区）の発掘調査を行った。

送電線鉄塔移設先の調査対象範囲は約 250m²で、平成 22 年度の調査区設定に続いて 3 区と呼んだ。平成 25 年 5 月 31 日から現地調査を開始し、7 月 25 日にラジコンヘリを使用して空中写真撮影を実施。古代の流跡跡を完掘した 7 月 31 日には大田市教育委員会による調査指導を受け、現地での作業を終えた。

両遺跡とも耕作土の除去はバケットに平爪を装着したバックフォーを使用し、遺物包含層の掘削は、主にスコップを用いて人力で掘り下がたが、遺物が集中する箇所は草削り・移植ゴテで掘り下がった。

平面図は、遺跡調査システム「遺構くん」を用いて測量し、出力後補正を行った。必要に応じて手測りで平面図を作成し、その他報告書掲載が見込まれる遺物は遺跡調査システムで出土位置を記録した上で取り上げた。遺構の写真は、原則として 35mm デジタルカメラで撮影し、必要に応じて記録保存のため 6 × 7 判フィルム及び 35mm フィルムカメラによる撮影も行った。

旭山遺跡・中尾 H 遺跡（3 区）の遺物整理作業は、平成 26 年 2 ～ 3 月に進め、平成 26 年度調査の間の中斷を経て、平成 27 年 4 月から再開した。

平成 27 年 6 月 15・16 日には島根県立松江緑が丘養護学校からの職場体験を受け入れ、高等部 2 年生 2 名が報告書に使用する図面のデジタルトレース作業を行った。第 12・17 図及び第 21 図 16・18 は、この 2 名が作成した図面である。

報告書作成は DTP 方式を採用し、遺物図面は実測図を、遺構図面は平面図・断面図等をレイアウトした下図をデジタルトレースした。デジタルトレースや図の加工などは Adobe 社製 Illustrator CS5・Photoshop CS5 を用いた。遺構・遺物写真はデジタルカメラで撮影した後、Photoshop CS5 を用いてコントラスト調整し EPS データ化した。最終的な原稿執筆、編集作業は Adobe 社製 In Design CS5 を用いて行った。

第2章 旭山遺跡・中尾H遺跡の位置と歴史的環境

大田市の海岸部は中国山地縁辺部の小丘陵を縫うように流れる小河川により形成された谷地形が連続しているが、久手町から波根町の間に広がる旧波根湖は、昭和26年に干陸化されてからは広々とした水田地帯となっている。旧波根湖は、元々は湾入しており、中世以前は潟湖だったことがわかっている。徐々に砂州が発達し、近世頃には完全に日本海と切り離され、淡水湖になったと考えられる。湾入していた中世以前には港湾があったようで、1592年頃に明で成立したと言われる『日本風土記』には「番祢（波根か）」「山子介（刺鹿か）」など港湾と考えられる地名が見える他、現在でも「大津」など港湾を思わせる字が残っている。

旭山遺跡 旭山遺跡は出雲との境である仙山崎近くから波根川に続く小河川が形成した狭い谷に面した斜面に所在している。遺跡前面には、出雲との境である朝山と波根を結ぶ古道が通じており、古くから山陰道のバイパス的な機能を持つ道だったと思われる。遺跡は中世の山城と考えられる旭山城跡の麓にあたり、遺跡の標高は約12mである。谷を挟んだ南西側には高原遺跡が展開しており、古墳時代を中心とした大量の遺物を出土している他、平成26年度に調査を行った高原遺跡（3区）では、16世紀の五輪塔・宝筐印塔が発見されている。

中尾H遺跡 中尾H遺跡は、旧波根湖に注ぐ江谷川の支流が形成した狭い谷間に位置し、この谷は旧波根湖と大田市街地を結ぶ古い交通路となっていた。現在の国道9号線から南に約400m離れており、付近の標高は約18mである。本書で報告する中尾H遺跡の3区は朝山大田道路建設予定地内にあった送電線鉄塔の移転先で、調査区南側の本線内に平成22・26年度に調査を行った中尾H遺跡（1・2・4区）がある。また、中尾H遺跡を見下ろす南側の斜面には、古墳時代の集落跡を中心とする市井深田遺跡が、北側の丘陵上には刺鹿神社が鎮座している。

旧石器・縄文時代 大田市域では旧石器時代の遺跡は知られていないが、平成26年度に行つた中尾H遺跡（4区）^(註1)の調査では、尖頭器が出土しており、縄文時代早期から旧石器時代にさかのぼる可能性がある。大田市域では三瓶山の厚い火山灰層に覆われ、旧石器時代の遺構の検出が困難だと思われてきたが、今後の資料の増加が期待される。その三瓶山北麓では三瓶小豆原埋没林が発見されており、炭化木片について4310±80BPの年代が測定され、この頃に三瓶山の大規模な噴火があったことが推定される。

大田市東部では、縄文時代の遺跡は、三瓶川中流域の夏焼遺跡（大田市大田町野城）など、わずかしか知られていなかったが、近年になって縄文時代遺跡の発見が急増している。旭山遺

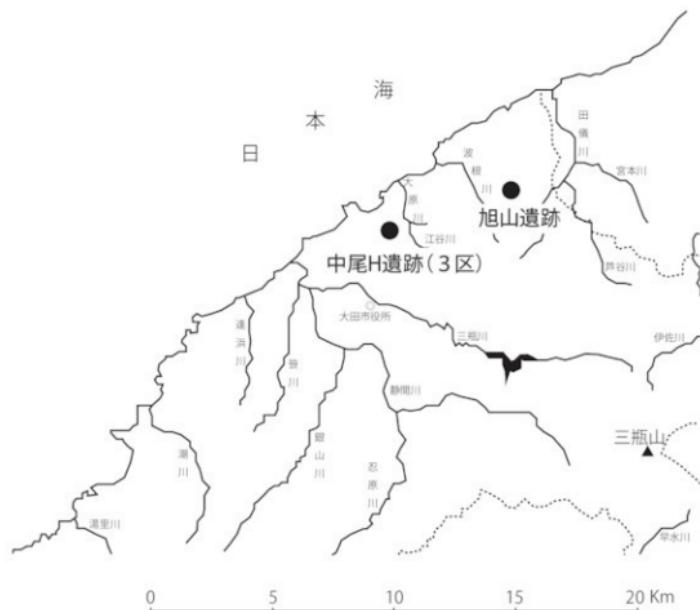


第1図 旭山遺跡・中尾H遺跡の位置

跡に近い波根川遺跡（5）^(註2)では1984年に行われた河川改修工事中に擦消縄文土器が採集されている他、門遺跡（4）や高原遺跡でも縄文土器が出土している。中尾H遺跡（1区・2区）の出土遺物は縄文後期を中心に、縄文前期・中期に遡る土器も含んでおり、年代幅の広い遺物群が確認されている。また、出土遺物には、石に線刻によって絵を描いたと見られるものや、大型石棒なども含まれており、当時の精神世界を伺う可能性もある資料として注目されている。こうした資料の急増から、三瓶山北麓の丘陵地帯から海岸部にかけては、広範囲にわたり縄文時代の人々が活動した様子が想像され、今後も縄文時代の遺跡の発見が増加する可能性が高い。

弥生時代 旧波根湖周辺では弥生時代の遺跡として確認された例は多くはないが、三瓶川や静間川下流域の平野部には、土江遺跡（大田市長久町土江）・八日市遺跡（同静間町八日市）など弥生時代に集落が営まれていたと考えられる遺跡が存在する。また、大田市鳥井町の丘陵部に展開する鳥井南遺跡では、弥生中期から古墳後期にかけての大規模な集落跡が発見された。弥生時代の遺構には、焼失住居が含まれているほか、備後北部で見られる塙町式土器が多数出土し、備後北部と交流が推定される。弥生後期の竪穴建物跡からは鉄製鋤先が出土し、大量に出土した土器とともに重要な資料となっている。

朝山大田道路の発掘調査では中尾H遺跡（1・2区）・門遺跡（5）^(註3)・荒横遺跡（60）^(註4)・高原遺跡（3）から弥生土器が出土しており、特に江谷川に面した荒横遺跡では弥生時代を通じた遺物が見られ、波根湖南岸に弥生集落が継続して営まれていたことがうかがわれる。



第2図 旭山遺跡・中尾H遺跡の位置と周辺の河川

古墳時代 旧波根湖の西岸には、この地域で唯一の前半期古墳とも推定される竹原古墳（54）がある。直径40m、高さ3m以上の円墳^(註5)と思われ、大田市域では最大級の規模を持つ。旧波根湖沿岸地域で竹原古墳の以外に墳丘を持つ古墳の存在は知られていなかったが、平成26年度には涼見E遺跡の発掘調査で、土師器小型丸底壺を伴う小規模な古墳が発見されている。

旧波根湖の南岸に続く丘陵部から西側にかけては、石見地方でも有数の横穴墓の密集地帯として知られている。現在、島根県立農林大学校の敷地になっている松田谷横穴群（23）は、少なくとも4支群15穴が確認されており、耳環や玉類が出土している。諸友大師山横穴群（67）でも3支群15穴が確認され、多量の土器類とともに、大刀などの鉄器類や玉類、石製紡錘車など豊富な副葬品が確認された。西迫横穴（26）は、大田市域では少ない四注式切妻正家形を呈し、整った2基の屍床を備えた大型の横穴墓である。平成26年度には大西大師山横穴群に続く丘陵部で大西大師山遺跡の西半部で10基の横穴墓を調査し、石製紡錘車を始め耳環や大刀などが出土した。平成27年度にも東半部の調査を行った。

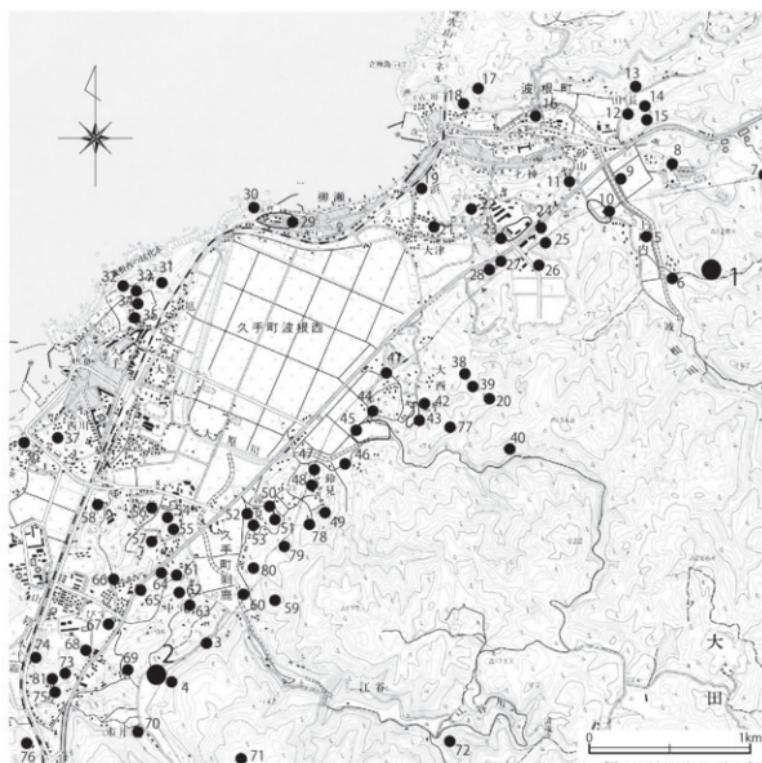
集落跡については、古くから上川内遺跡（高原地区）（4）^(註6)を始め、柳瀬西遺跡（29）、大西C遺跡（45）などで古墳時代の遺物の出土が知られていたが、朝山大田道路関係の発掘調査によって遺跡が急増している。久手町波根西の鈴見B遺跡では鍛冶炉を伴う可能性の高い集落跡^(註7)が調査され注目された。また、高原遺跡（1・2区）（5）では、大量の古墳時代の土器が出土^(註8)しており、近接して古墳時代の集落があったことが推定される。

古代 大田市東部は『和名類從抄』に安濃郡波幅郷・刺鹿郷と見える。また、石見国には波祢、詣濃、楠道、江東、江西、伊甘の6郷家があったとされている。古代山陰道の位置は判明していないが、出雲との境である仙山峠を越えることが可能な場所は多くなく、旭山遺跡からそう遠くない場所に波祢郷家があった可能性もある。旧波根湖は、古代には内湾だったと考えられることから、この付近は、水上交通でも交通の要衝であったと想像される。この旧波根湖を見下ろす位置に天王平廃寺（24）があり、塔を含む2基の乱石積み基壇が発見されている。出土遺物には多量の瓦の他、銅製の水煙が含まれており、大型の塔が建っていた^(註9)ことが判る。出土遺物には「大」をヘラ書きした瓦などが含まれている。

古墳時代後期～古代の集落遺跡である市井深田遺跡（3）^(註10)や平成26年に発掘調査を行った城ヶ谷遺跡（83）^(註11)では、造り付け竈を持つ加工段が発見されており、移動式竈や土製支脚と同時に造り付け竈を使用していた可能性がある。一方、同時代の集落と考えられる鈴見B遺跡（79）では造り付け竈が無く、近接する集落であってもその様相は一様ではない。また、中尾H遺跡（1・2区）では「二斗一升二合」「石□（花力）」と読める031形式の木簡の出土が注目される。この木簡に記された「石花」とは、石華=カメノテと考えられる事から、海産物のカメノテを貢納する際の荷札木簡^(註12)と思われることから、近隣に波幅駅や末端官衙などが存在した可能性がある。

平成26年度に発掘調査が行われた神谷遺跡（80）では、4基の横口付炭窯^(註13)が発見され、出土した遺物から奈良時代頃に操業していたと考えられる。通称ヤツメウナギとも言われる横口付炭窯は、出雲部では4遺跡が知られているが、石見部では初の発見である。横口付炭窯は、製鉄との関係が指摘されており、旧波根湖周辺での製鉄遺跡の発見が期待される。

中世・近世 現在までに大田市東部で中世前半の遺跡は多くは知られていない。三瓶ダム建設工事に伴って調査された円城寺前遺跡（大田市野城町）では僧坊跡などが発見され、鍛冶炉や橋脚、



- 1 旭山遺跡
- 2 中尾H遺跡
- 3 門遺跡
- 4 市井深田遺跡
- 5 波根川遺跡
- 6 高原遺跡
- 7 大暮遺跡
- 8 田長横穴群
- 9 田長遺跡
- 10 上川内遺跡
- 11 砂口遺跡
- 12 前谷A遺跡
- 13 前谷B遺跡
- 14 前谷C遺跡
- 15 幸迫谷横穴群
- 16 江奥遺跡
- 17 金比羅山横穴群
- 18 東灘遺跡
- 19 中浜遺跡
- 20 近谷遺跡
- 21 大津遺跡
- 22 砂山遺跡
- 23 松谷田横穴群
- 24 天王平廃寺
- 25 高砂遺跡
- 26 西迫横穴
- 27 中山曾根横穴
- 28 熊屋谷横穴群
- 29 柳瀬西遺跡
- 30 鶴走城跡
- 31 旭遺跡
- 32 刈田神社裏山A遺跡
- 33 刈田神社裏山B遺跡
- 34 刈田神社裏山遺跡
- 35 刈田神社横穴跡
- 36 新田A遺跡
- 37 新田B遺跡
- 38 錢神山横穴群
- 39 暮石横穴群
- 40 六曾根遺跡
- 41 大西D遺跡
- 42 大西大師山横穴群
- 43 大西A遺跡
- 44 大西B遺跡
- 45 大西C遺跡
- 46 鈴見B遺跡
- 47 鈴見A遺跡
- 48 鈴見上ヶA遺跡
- 49 涼見上ヶB遺跡
- 50 涼見D遺跡
- 51 涼見B遺跡
- 52 涼見A遺跡
- 53 涼見C遺跡
- 54 竹原古墳
- 55 竹原B遺跡
- 56 竹原A遺跡
- 57 竹原C遺跡
- 58 市庭遺跡
- 59 岩山城跡
- 60 荒横遺跡
- 61 中尾C遺跡
- 62 中尾D遺跡
- 63 中尾E遺跡
- 64 森ノ上遺跡
- 65 辻遺跡
- 66 中尾B遺跡
- 67 諸友大師山横穴群
- 68 二中横穴群
- 69 中尾横穴
- 70 市井遺跡
- 71 段山城跡
- 72 江谷横穴
- 73 山田庵夫宅裏横穴群
- 74 烏越A遺跡
- 75 諸友西横穴群
- 76 栗林B遺跡
- 77 大西大師山遺跡
- 78 神谷遺跡
- 79 涼見E遺跡
- 80 城ヶ谷遺跡
- 81 烏越城跡

第3図 旭山遺跡・中尾H遺跡と周辺の遺跡

青磁・白磁などの貿易陶磁も出土している。古墳時代の横穴墓で知られる諸友大師山横穴群からは、一字一石経を埋納した経塚が発見されているほか、近くの高砂遺跡(25)では、瓦経が出土している。

16世紀になって石見銀山の開発が本格化すると、銀山の支配を巡って大内氏・毛利氏と尼子氏等が争うことになる。このため大田市東部でも今回調査した旭山遺跡の背後にそびえる上川内砦跡(旭山城跡)を始め、鰐走城跡(30)、岩山城跡(59)など多くの山城が造られる。

平成26年度に発掘調査を行った高原遺跡(3区)(5)では、16世紀代と考えられる福光石製の石塔類^(註14)が発見されている。

仙山峠を越えた出雲市側では、田儀桜井家が購入した浜砂鉄を主原料に銑鉄を生産した越堂たたら跡(出雲市多伎町口田儀)が知られているが、石見地方でも同様に、水運を利用して砂鉄・木炭を購入して海岸部でたたらを操業する例が知られており、大田市東部でも同様の遺跡が発見される可能性がある。

〈註〉

- (1) 『島根県教育庁埋蔵文化財調査センター年報』23 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター 2015年
- (2) 渡辺聰・糸川寿幸『波根川遺跡出土の縄文土器』『島根考古学会誌』第29集 島根考古学会 2012年
- (3) 『門遺跡・高原遺跡I区・中尾H』島根県教育委員会 2013年
- (4) 『市井深田遺跡・荒棚遺跡・鈴見B遺跡』島根県教育委員会 2014年
- (5) 『島根県埋蔵文化財調査報告』第2集 島根県教育委員会 1970年
- (6) 『大田市埋蔵文化財調査報告1 上川内遺跡―田長・高原地区―』大田市教育委員会 1981年
- (7) 『鈴見B遺跡』島根県教育委員会 2015年
- (8) 註3文献及び『高原遺跡(2区)』島根県教育委員会 2015年
- (9) 註5と同じ
- (10) 註4と同じ
- (11) 註1と同じ
- (12) 註4と同じ
- (13) 註1と同じ
- (14) 註1と同じ

〈参考文献〉

- 『増補改訂島根県遺跡地図Ⅱ(石見編)』島根県教育委員会 2002年
- 『島根県生産遺跡分布調査報告書Ⅱ 石見郡製鉄遺跡』島根県教育委員会 1984年
- 『島根県中近世城館分布調査報告書〈第1集〉石見の城館』島根県教育委員会 1997年
- 『三瓶川流域遺跡他詳細分布調査Ⅱ』大田市教育委員会 1984年
- 『日本歴史地名体系第33巻 島根県の地名』平凡社 1995年
- 『角川日本地名大辞典32 島根県』角川書店 1991年

第3章 旭山遺跡の発掘調査

1. 調査の概要

旭山遺跡は大田市波根町上川内に所在する。調査地は、石見國の東端である仙山峠・朝山町付近から西に下る小河川に面した南向きの緩斜面となっており、付近の標高は約12mである。遺跡の南面には小河川に沿って古道が続いており、朝山方面と波根地区を結んでいる。この道は、道幅が狭く、車は通行できないが、調査当時も市道の扱いとなっており、近世には山陰道のバイパス的な使われ方をしたことが想像される。古道に平行して西に流れる小河川は、遺跡の西約500mで波根川に合流し、その北西約1kmで日本海に注いでいる。

遺跡の背後は標高128mの独立丘陵となっており、中世後半には山城（上川内砦跡・旭山城跡）が築かれたとされている。また、遺跡の南から西側の谷部には古墳時代を中心とした大量の遺物や、16世紀後半の石塔類を出土した高原遺跡が広がっている。

調査地は宅地や水田に使用されていたと思われ、数段に渡る広い平坦面に造成されていたほか、周辺には小さな祠の基礎、堤の石垣、石で組まれた井戸、水田の畦や法面を固めた石垣などが残されていた。平成24年度に行なった試掘調査で調査地を絞り、約700m²について調査を行った。

遺跡の大半は、近世以降の烟地や水田耕作で破壊されていたが、調査区東側を中心に遺構が見られ、古代末～中世の加工段2面、近世の建物跡、柱穴・土坑を検出した他、古代・中世・近世の土器・陶器・石製品などが出土した。

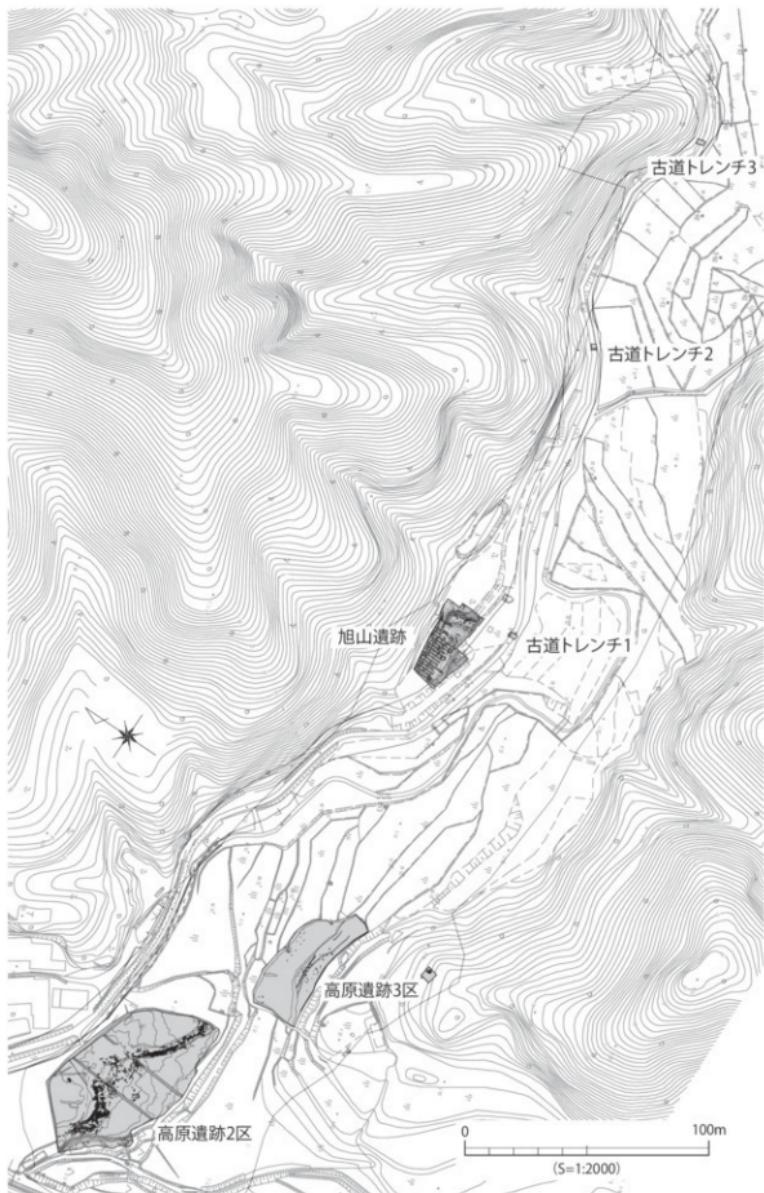
調査に際しては、調査対象範囲の北西外、X=-84666.04、Y=34711.11を基準に斜面の傾斜に沿った1辺5mのグリッドを設定し、東西方向をA～H、南北方向を0～4として、それぞれのグリッドを、A1・B1～H3などと呼んだ（第4図）。なお、当初の調査計画では、東側の調査をG区までとしていたが、後述する加工段1が、調査区東側に続くことが確認されたため、H部分について調査区を拡張した。

表土をはがすと、調査区の中程から北西側、A1～E2付近で、近代以降に畑として使われた際の畝と思われる幅約40cm、深さ約20cmの溝が15条連続して見られた。溝の埋土は非常に柔らかく、遺物は含んでいない。溝の間にも柱坑、土坑と見られる落ち込みが残されていたが、遺物が入っている遺構は少なく、所属時期はほとんどわからない。一段上がった東側G2付近には厚い造成土が見られ、造成土内には巨石が埋められていた。後方の水田や堤を造る際に埋められたものと思われる。巨石の下方からは土師器類が出土しており、古代末～中世と考えられる加工段が残存していた。

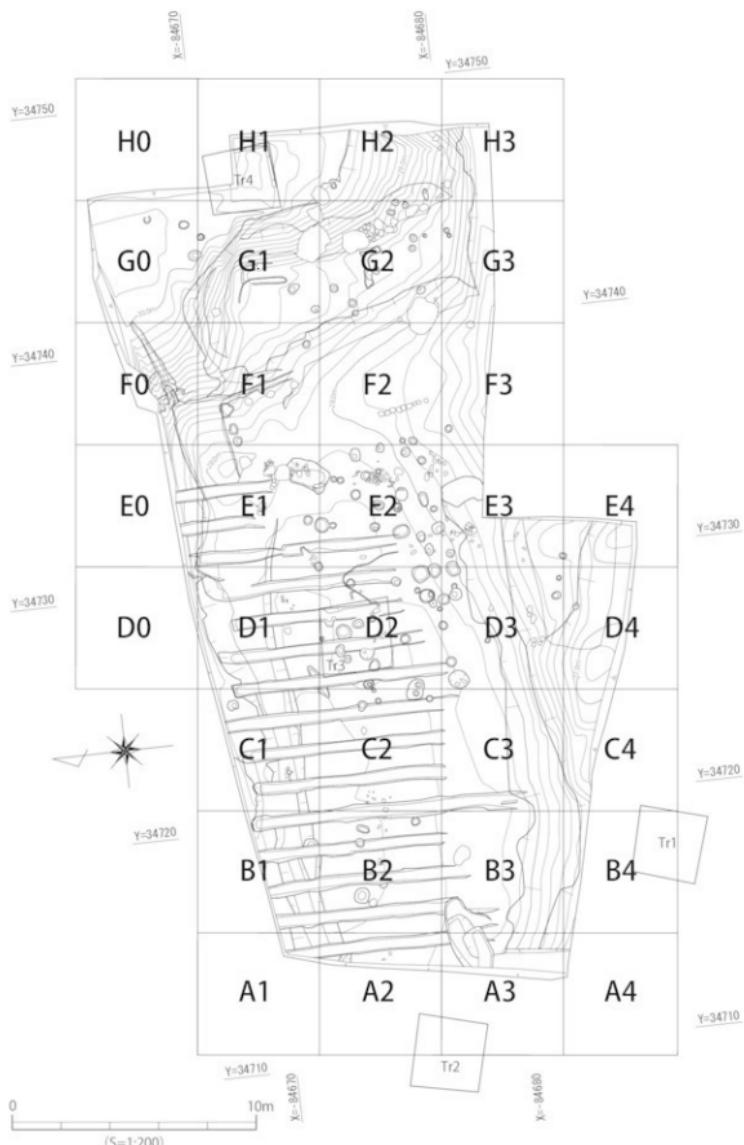
2. 遺構

調査区西側では後世の削平により遺構・遺物は少なかったが、中程のD1～E2にかけては多数の時期不明のビットがみられた。F1・F2付近では礎石や土坑があり、これらの周辺からは、近世の遺物が出土している。また、前述したG1～G3、D3・E3付近には、古代末～中世の加工段も残存していた（第5図）。

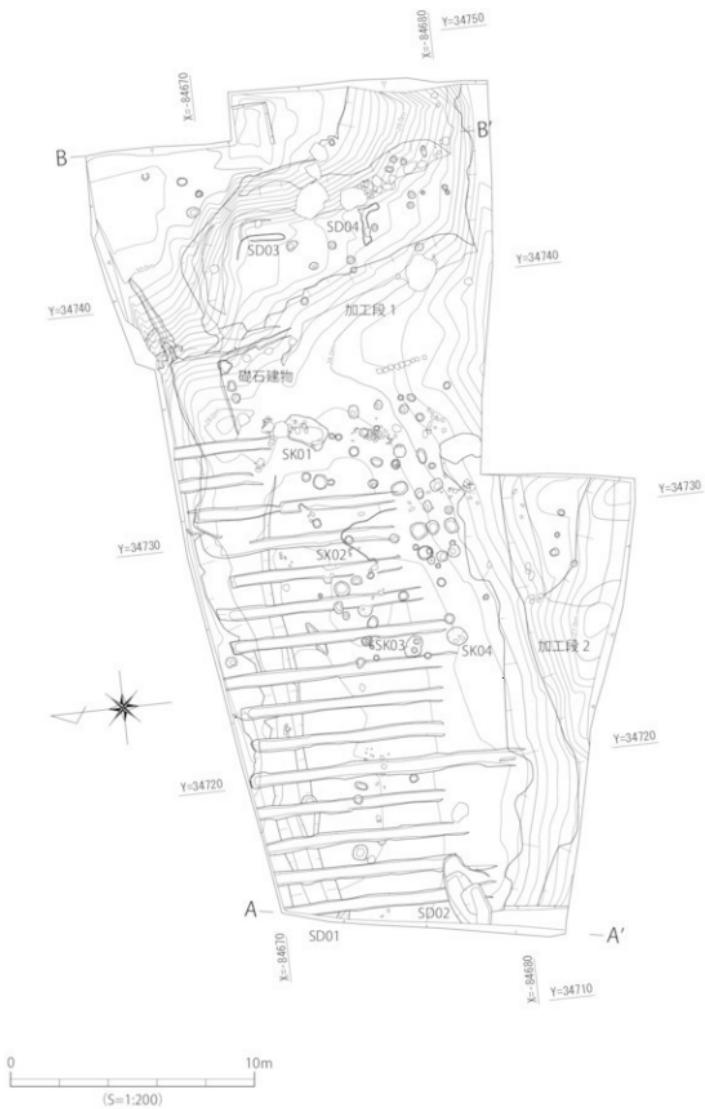
基本的な土層の堆積状況（第6図）は、遺跡全体を10～20cm程の厚さの耕作土が覆っており、その下に橙褐色の造成土が見られる。調査区北側の1ラインでは造成土直下に黄橙色の硬い地山



第4図 旭山遺跡調査区配置図（1：2,000）

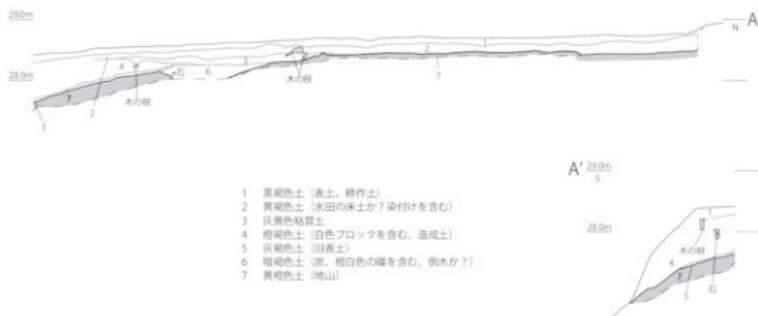


第5図 旭山遺跡グリッド配置図 (1:200)

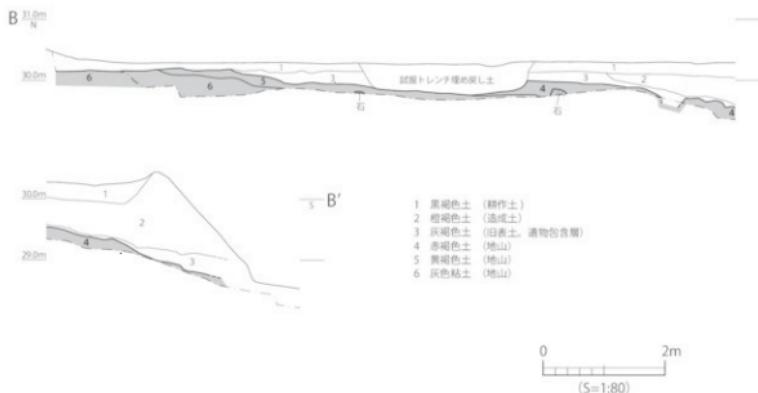


第6図 旭山遺跡遺構配置図（1:200）

旭山遺跡西壁



旭山遺跡東壁

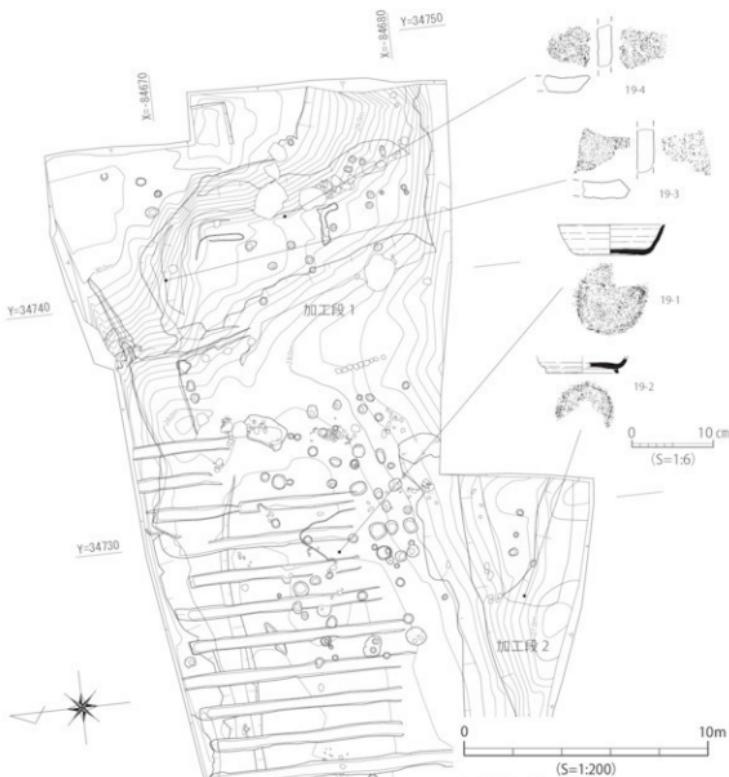


第7図 土層堆積状況 (1:80)

が現れるが、2ライン以南では灰褐色土の堆積が見られ、この土には遺物を含んでいる。この灰褐色土は、造成土で覆われる以前の旧表土と思われる。谷に面した調査区南側の3・4ラインでは山側を削って谷側に盛土を行った様子が確認できる。このため、南側には厚い造成土が見られるが、山側である0・1ライン付近については削られ、表土直下に地山が現れる。A3～B3付近に大きな落ち込みが見られるが、倒木の可能性が高い。

D3・D4からは黒曜石で作られたスクレーパーと思われる石器（18-1）と、欠損の多い磨製石斧（18-2）が出土しているが、他に弥生時代以前に遡る遺物は見られない。同様に古墳時代の遺物も見られず、古墳時代以前の遺構は存在しないようである。

D3・D4からは須恵器壺（19-1・2）が出土している。いずれも奈良時代の遺物と思われる。

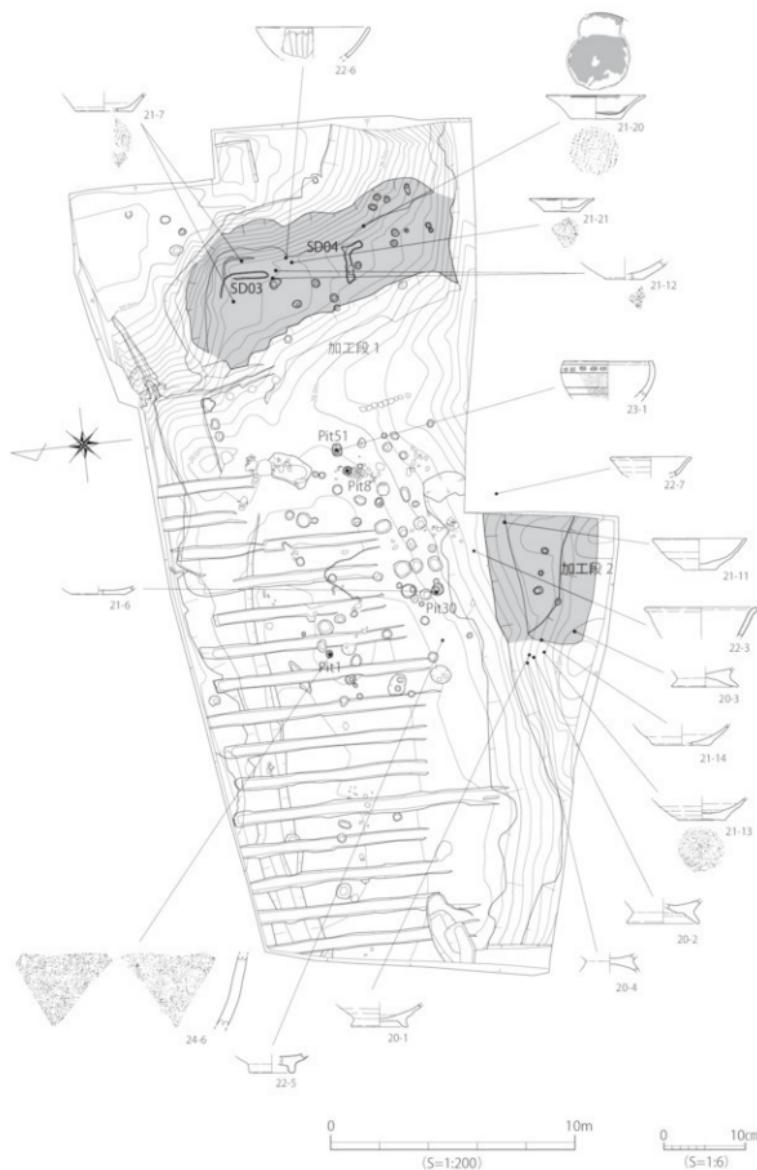


第8図 須恵器・瓦出土状況 (1:200 遺物は1:6)

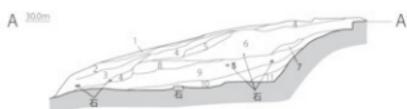
19-1は完形近くまで復元できることから、その出土場所周辺のピット・土抗には奈良時代に遡るもののが含まれている可能性もあるが、特定できない。須恵器以外に奈良時代に遡る可能性のある遺物としては平瓦2点(19-3・4)があるが、いずれも小片である。

平安時代～中世の遺構 旭山遺跡で古代以前の確実な遺構は確認できないが、平安時代～中世については、いくつかの遺構が見られる。調査区東側では、加工段2面を確認し、いずれも平安時代に機能したと考えられる。また、ピット1・8・30からは中世に遡る遺物が出土しており、ピット51からも、瓦質土器の香炉(23-1)が出土している。

加工段1(第9図)は、調査区東側のG1～G3付近にある。検出当初は東の肩が調査区外へ続き、調査区を拡張して調査した。検出した加工段1は、幅約10m、奥行き2.4mの広い平坦面である。背後の斜面は高さ1.2mある。調査前の水田は、この付近で1.5m程の段差があり、その段のほとんどが造成土であった。造成土には2m近い巨石も埋め込まれていた。この造成土からは、土師器灯明皿(21-20・21・25)などが出土しており、造成は近世に行われたものか。この造成土よ



第9図 平安時代～中世の遺構・遺物検出状況（1：200 遺物は1：6）

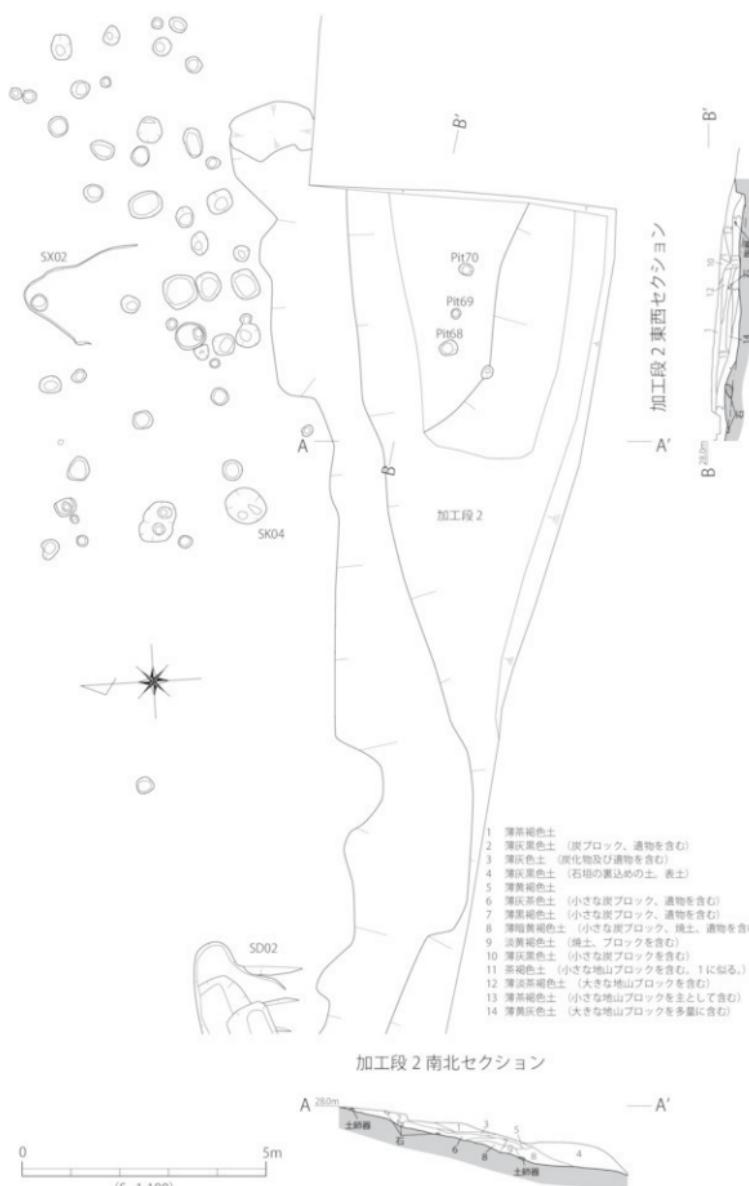


- | | |
|---------------------|------------------------|
| 1 青灰色粘土 | 7 棕色土 |
| 2 稚青褐色土 | 8 暗灰色土 (炭を含む) |
| 3 稚褐色土 (白色の小石を多く含む) | 9 暗褐色土 (遺物包含層) |
| 4 稚褐色土 | 10 深褐色土 (土師器を含む。遺物包含層) |
| 5 黑色土 | 11 棕灰色土 |
| 6 明灰褐色土 | |

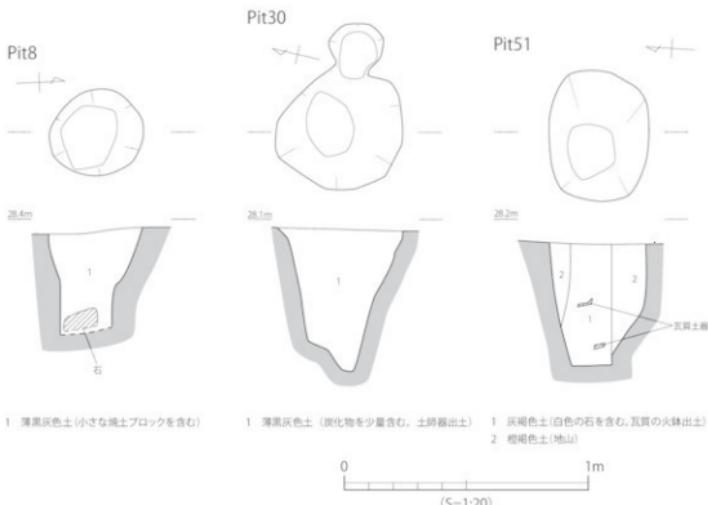
※1～8は造成土。6の土に目石が伴うか？



第10図 加工段1 実測図 (1:100)



第11図 加工段2実測図 (1:100)



第12図 ピット8・30・51実測図(1:20)

り下層には、加工段1の直接の埋土と考えられる暗褐色土・灰褐色土が堆積している。

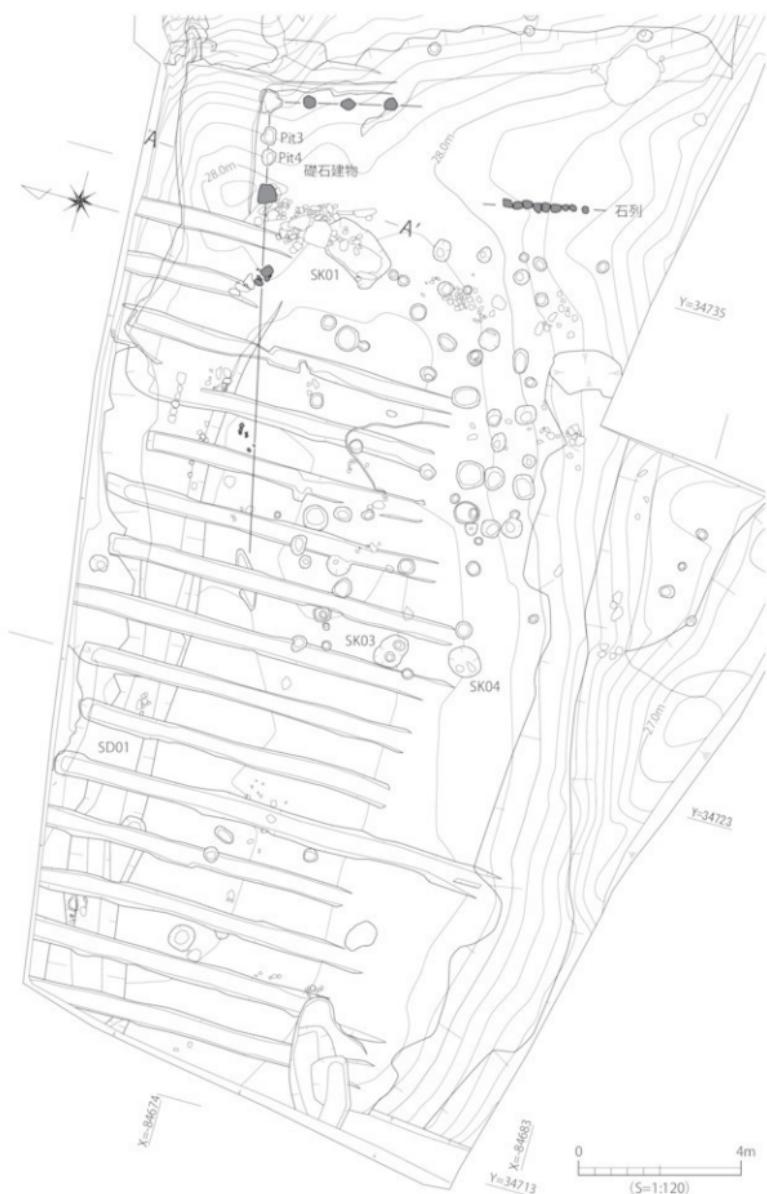
この加工段では16基のピット状の落ち込みを確認したが、遺物を伴うものは無く、加工段に直接接するかどうかは判らない。また、建物となるようなピットの並びは見られなかった。加工段北隅と中程に直角に折れ曲がる溝(SDO3・04)があり、こうした溝が加工段の機能(建物か)に関連するかもしれない。加工段1からは土師器環(21-7・12)が出土している。

加工段2(第10図)は、D3～E4付近に見られる加工段で奥行きは約1m、残存幅は約2mで、さらに東に延びているが、東側は現代の宅地により削平され、消滅している。加工段2には3基のピットが見られ、1直線に並んでいるように見えるが、中央のピット69はやや小さく、直径12cm、深さ10cm程しかない。東西のピット68・70は、直径27～37cm、深さ30～34cmで両者の間隔は1.7mである。加工段2の周辺から多くの上器類が出土しており、須恵器環(19-1・2)、土師器環(20-1～4、21-5・8・9・11・13～16)が出土している。

ピット1(第9図)は調査区中程のD2で検出した浅い落ち込みと認識したが、後世の畑作による畦によって破壊されており、埋土も十分把握できなかつたが、備前と思われる壺(24-6)を含んでいた。

ピット8はE2で検出した落ち込みで、直径約40cm、深さ20cm以上で、検出面から19cm下方に礎盤状に平たい石が詰められていた。石より下層の様子はわからない。埋土はわずかに焼土ブロックを含む淡黒灰色土で、土師器の小片を含んでいた。この土師器は体部の小片であったため図示していない。

ピット8の東側にはピット51がある。直径約25cm、深さ約50cmで、底は平らである。白色の小石を含む灰褐色土が詰まっており、瓦質土器(23-1)が入っていた。

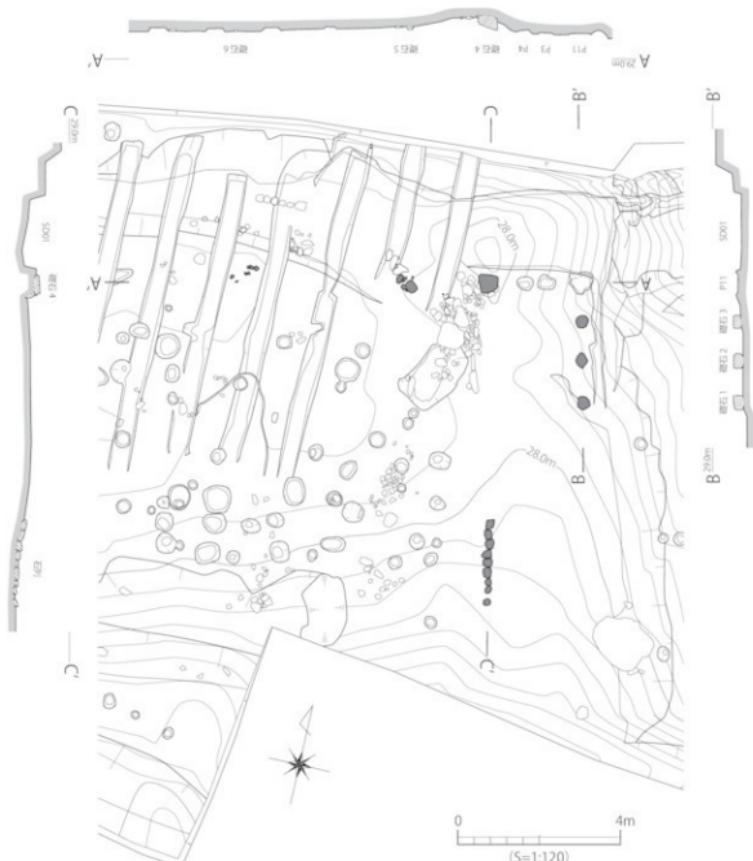


第13図 中世末～近世の遺構配置図（1：120）

ピット30はD3で検出した落ち込みで、加工段2のすぐ上に当たる。直径約42cm、深さ約55cmだが、底は不整形。埋土は淡黒褐色土で、内部には土師器壊(21-6)を含んでいる。このピットの周辺は遺物の集中する場所で、周囲からは須恵器(19-1・2)、土師器、青磁(22-3・5)などが出土している。

中世末から近世の遺構 調査区東側のFOからH3にかけては、一段高くなっているが、高い部分では中世以降の明確な遺構はない。Fライン西にかけて、標高約28.5mの平坦面が広がっており、平坦面上に多くの溝やピットが見られる。それらの多くは近世のものであろう。

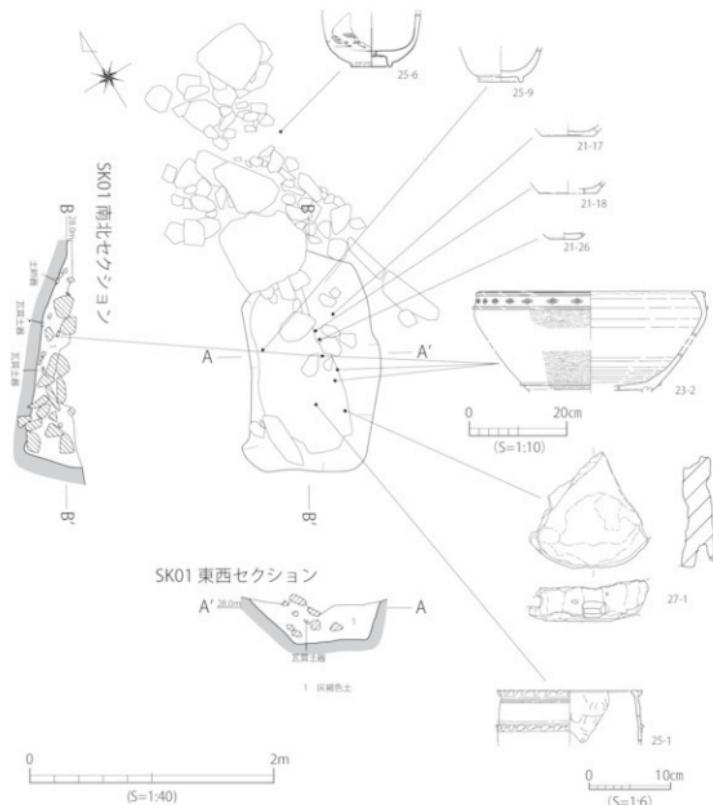
主な遺構としては、調査区中程で礎石建物と土抗(SK01)を検出している他、調査区北縁に沿つて溝(SD01)を検出している。



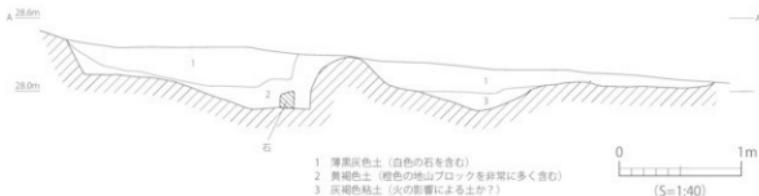
第14図 磚石建物実測図(1:120)

礎石建物 F1付近には礎石と考えられる人頭大の石（礎石1・2・3・4）や地山に穿った柱穴（P11・3・4）が見られ、それらは、直角に折れ曲がって並んでいるように見える。F2中央では石を9個、直線的に並べた様子（石列）も見られ、その並びの延長線は礎石4に一致する。また、調査区北側にはSD01が延びており、F1付近で南に直角に折れ曲がって細く延びている。この溝は、礎石・柱穴列に平行していることから、それらに関連する遺構と考えられる。SD01の東西方向は、FO付近から西に23m延びることを確認し、調査区の外へさらに続いている。SD01は、北側で幅は約1.4～2m、深さ約15cmで、後世の畑作により約70cm毎に約40cm幅で切断されている。東西方向は、FO～F1中程で止まるが、そこから南へほぼ直角に折れ曲がり、幅25cmに狭めて南へ延びている。この南北方向の細い溝は、深さ約15cmで、底が平らに近い断面箱形となっている。岩盤を削て約3.3m延びて消滅している。

F1中程で南北に並ぶP11～礎石1間は、ほぼ1m間隔となっており半間に近い。直交する東西



第15図 SK01 実測図 (1:40 遺物は 1:6)



第16図 SD01 土層堆積状況 (1:40)

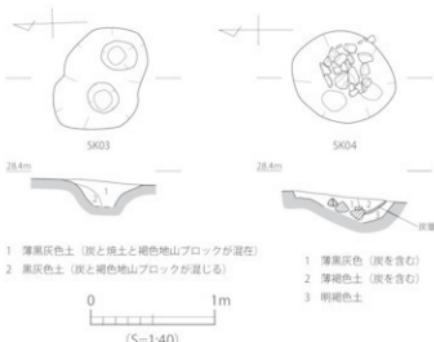
方向のP11・P3・P4の間隔はそれぞれ約60～80cmで不均等であるが、その延長線上E1中程にも小石の集積（礎石6）が見られ、礎石の根石の可能性がある。この付近に礎石を想定すると、P11からの距離は約8mとなり、4箇所の間隔が想定される。F1から東西に続く礎石・柱穴の内、不均等な位置にある柱穴P3・4の機能としては床東や縁東が想定されるのではないかろうか。

F2で南北に続く石列は、南に向けて緩やかに傾斜していることから、建物の仕切りなどではない。東側の面を揃えているように見える事から、石列の西側にあった通路の縁石や土間の際などが想像される。礎石建物としては北東の一部しか残存していないため、建物全体の規模は判らない。

SK01 F1には、長さ約1.7m、幅約1.1m、深さ約46cmの土坑がある。前述の礎石建物と重なる位置にあり、礎石建物廃絶後から耕作を始めるまでの間に埋め戻されたと思われる。土坑の埋土は非常に柔らかい灰褐色土で、土坑床面は大きく南に傾斜している。内部には、上部器環皿(21-17・18・26)、瓦質土器火鉢(23-2)、陶磁器類(25-1・6・9)、火を受けた石臼の破片(27-1)の他、こぶし大からそれ以上の大きさの石が入っていた。土坑周囲にも大きな石が散在しており、耕作時に不要な石を落とし込んでいるように見える。出土遺物の様相から、礎石建物の廃絶に伴う廃棄土抗であろうか。

その他の遺構 SD01は礎石建物北側を通る溝で、近代の耕作による歓で寸断されているが、幅2～3.4m、長さ24mに渡って検出した。第16図の内、左部分がSD01の堆積で、深さは40cm。右側は礎石建物の下面にあたる。1薄黒灰色土は後の耕作土で、2黄褐色土も地山ブロックを含んでいることから、上面の削平に伴う土と考えられる。一方、礎石建物側の埋土には火を受けたと思われる3灰褐色粘土で、礎石建物が焼失した可能性を示している。

この他、D2・E2付近を中心多くビット、土抗が見られるが、遺物の入っているものはほとんどなく、建物になるような並びも見られなかった。この内SK03は、二つのビットが重なった状態で、C2・D2境付近で検出した。いずれも直徑約50cm、深さ約25cmで、埋土には焼土ブロックを含んでいることから、火災に伴って放棄された可能性



第17図 SK03・04 土層堆積状況 (1:40)



第18図 石器実測図 (1:3)

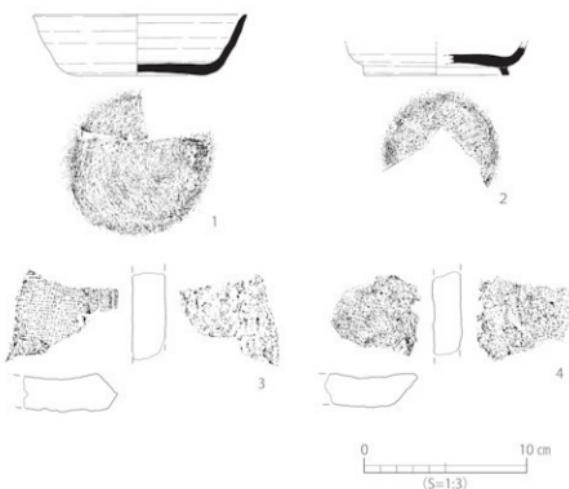
面を造成したと思われる。SK01 もこの亀裂の延長線上にあり、こうした窪みを利用して掘られたものかもしれない。

3. 出土遺物

石器 第18図には旭山遺跡で出土した石器を図示した。18-1は断面三角形を呈する縦長の薄片である。黒曜石製で、残存長56mm。一側辺に小さな剝離が連続する。スクレーパーか。

18-2は塩基性片岩の磨製石斧である。刃部と基部を大きく欠き、全体に摩滅が進んでいる。残存長91mmで、重さは201gである。

旭山遺跡では、縄文・弥生時代の土器類は出土していないが、近隣の高原遺跡では縄文・弥生土器や石器類も出土しており、旭山遺跡が位置する谷で、古くから人々が活動していたことがうかがわれる。



第19図 須恵器・瓦実測図 (1:3)

がある。SK04は、D3付近で検出した小さな土坑で、直径約70cm、深さは20cm程度である。埋土には炭層を挟んでおり、土坑の内部には石が詰まっていた。

SK01南側で、礎石建物の下に当たるE3付近は、元々は西側の平坦面と東側の高まりの間の深い谷地形となっていたよう、堆積土を除去すると南北方向に深さ1m以上の亀裂が入った。現在でも山から流れる水路が通っており、礎石建物を建てる際に、この溝を埋め、平坦

須恵器

第19図
1・2は、旭山遺跡で出土した須恵器である。19-1はD3で出土した須恵器壺である。復元口径13.2cmで、器高は3.7cmを測る。全体に摩滅しているが、底部の切り離しは回転糸切りであろうか。明灰白色を呈し、軟質に焼成される。胎土中に5mm近い灰色の砂粒をやや多く含んでいる。19-2はD4で出土した須

恵器坏底部である。高台付きの坏で、底部の切り離しは静止糸切り。暗青灰色を呈し、硬質に焼成される。胎土には白色のやや大きな砂粒が目立つ。いずれも奈良時代後半頃のものか。

平瓦 旭山遺跡からは古代の平瓦2点が出土している。19-3は灰白色を呈し硬質に焼成された平瓦の小片で、凸面は繩目の叩き痕に離れ砂を残している。側面調整は2面取りし、強い削りによる砂粒の移動を残している。凹面は布目圧痕を残し、糸切り痕は見えない。19-4は、摩滅の進んだ平瓦の小片で、橙色を呈す。摩滅により叩き痕は見えない。側面は斜めに削り、凹面側の側部を整えているようである。

土師器 土師器は加工段1や加工段2に近いD3グリッド周辺から多く出土している。出土した土師器はすべて坏・皿類で、甕などの煮炊具は含まれていない。

第20図には土師器坏の内、高台の付くものを図示した。20-1は、加工段2近くから出土した坏底部で、太い高台を持つ。底面は摩滅しているが、回転糸切りか。20-2も加工段2の西側で出土した坏底部で、斜めに張り出す高い高台を持つ。摩滅しており調整は不明。20-3は、加工段2の下側から出土した坏底部で、薄い高台を横方向に開く形状である。20-4も20-2と接して出土している。いずれもやや軟質で、黄橙色を呈している。いずれも平安時代前半頃のものか。

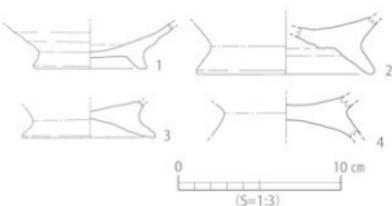
第21図には土師器坏・皿類の内、無高台のものを図示した。21-1～6底部から体部が緩やかに内湾しながら立ち上がる坏である。21-1は復元口径12.5cmの坏で、底径がやや小さく、体部は大きく開く。赤橙色を呈している。21-2の底部は摩滅して判別しがたいが、回転糸切りか。橙色を呈している。21-3も同様のものだが、底径が5.8cmと小さい。21-4は、ピットが集中するE2付近から出土した坏底部である。橙色を呈し、復元底径は8cmである。21-5は、加工段2の下方から出土した。底部がやや厚い。21-6はD3にあるピット30から出土した。これらは、奈良～平安時代前半頃のものであろう。

21-7～9は、底部と体部の境が明瞭で、直線的に伸びる体部を持つ坏である。21-7は加工段1から出土した坏で、底部に回転糸切り痕を明瞭に残している。黄橙色を呈し、比較的良好に残存している。21-8・9は、20-3と共に加工段2の下側から出土した。21-9は、内面が黒褐色を呈しており、灯明皿か。21-10は試掘調査のTr3で出土した小片で、皿か。摩滅しており、底部調整は見えない。

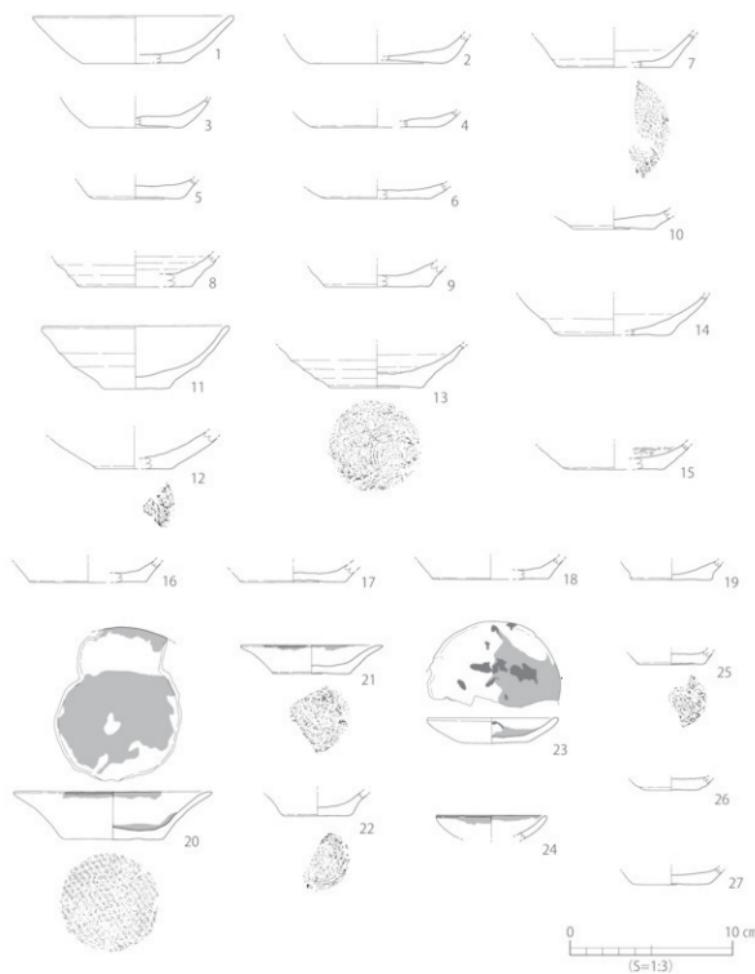
21-11～14は、底部が小さめで、わずかに内湾する体部を持つ坏である。底部の切り離しは、確認できるものは回転糸切りである。21-11・13・14は、加工段2の下側から出土した。21-11は、外側が灰白色を呈している。21-12は加工段1から出土している。21-11～14は12世紀頃のものであろうか。21-15は、加工段2の下側から出土した皿で、内面にタール状の付着物が見られる。灯明皿か。21-16も同様のものか。加工段2の埋土から出土している。

21-17～18は、SK01から出土した坏底部。いずれも摩滅により調整不明。21-19は底部に段を持つ小型の皿で、底径は5cmである。

21-20～22は、体部がわずかに外反する皿である。いずれも底部には回転糸切り痕を残している。灯明皿と思われ、見込み部と口縁部にタール状の付着物が見られ



第20図 土師器実測図(1) (1:3)

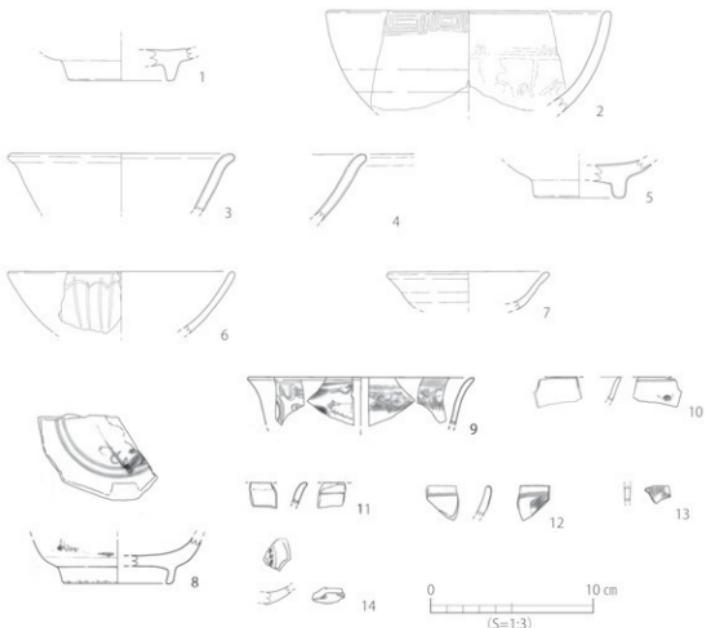


第21図 土師器実測図(2) (1:3)

る。21-21は、21-20と同様の器形だが、器高が低く小型の灯明皿である。21-20・21は、調査区東側を造成し、加工段1を埋めた埋土から出土している。21-22は、D3から出土した。タール痕等は見えないが、21-21と同様のものか。

21-23・24は、灯明皿として使用された小皿で、口縁部にタール状の付着物が残る。器壁がやや厚く、体部を内湾させる。21-23はピット3から出土した。

21-25～27も小皿である。いずれも底部が厚く作られており、器高の低いものか。21-26はSK01から出土している。21-20～27は、近世のものか。



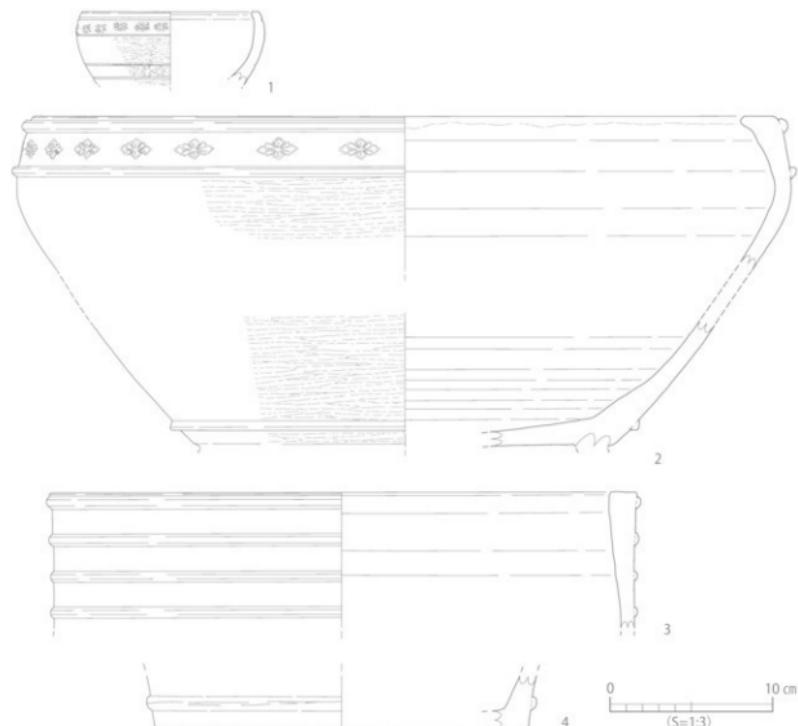
第22図 白磁・青磁・灰青釉陶器・青花磁器実測図（1：3）

白磁・青磁・灰青釉陶器・青花磁器 22-1は、白磁碗の底部で、高い高台を持つ。高台から底部にかけては無釉で見込みに段がある。釉はやや薄い。横田森田分類のV類^(註1)で、12世紀後半頃のもの。

22-2～6は青磁である。22-2は口縁部外面に雷文を巡らす碗で、見込みには花形のスタンプ文を押す。復元口径は17.6cmである。上田分類のC-II-b^(註2)か。22-3・4は無文で端反りの碗口縁部である。22-3の復元口径は17.4cmで、上田分類のD-II-a。22-5は、その底部と考えられる破片で、高台内面まで施釉される。22-6は、外面に線描きの蓮弁文を施す碗の口縁部で、復元口径は14cm。上田分類のB-IV類か。いずれも15～16世紀頃のものと考えられる。

22-7は朝鮮半島産と思われる灰青釉陶器の小碗である。灰色がかった釉を全面にかけ、無文である。

22-8～14は青花磁器である。22-8は碗底部、22-9・10・12は碗口縁部である。22-14は皿か。瓦質土器 23-1は、ピット51から出土した瓦質土器香炉である。復元口径11.0cm、高さ4.5cmの小型のもので、緩やかに内湾する体部は丁寧に磨かれ、口縁部外面に花菱のスタンプ文を巡らせ、体部下半に花文のスタンプを押している体部下半のスタンプは、2カ所に連続して押されているのが確認できるが、その左、少なくとも3cm間には押されていない。底部の形状は判らないが、3足が付くか。同様の瓦質土器香炉は雲南省加茂町の湯後遺跡^(註3)で出土している。湯後遺跡の瓦質土器は遺構に伴っていないが、他の遺物には京都系土師器皿など16世紀頃の遺物が含まれてい



第23図 瓦質土器実測図(1:3)

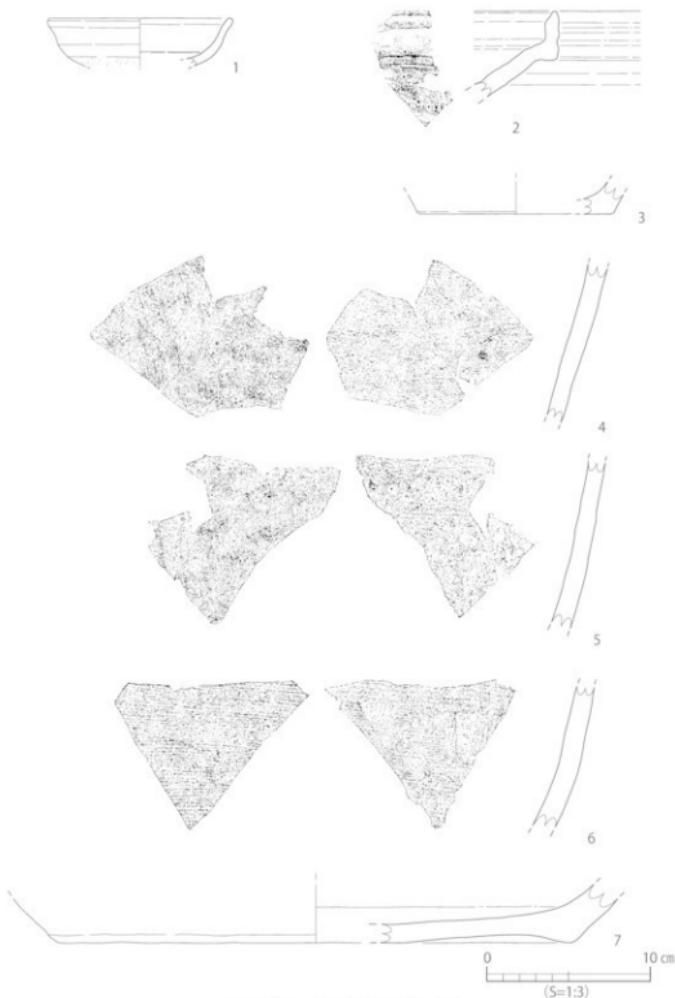
る。また、湯後遺跡は、曹洞宗登安寺の隣接地にあり、寺院との関係がうかがわれる。

23-2・3は大型の火鉢で、同一個体と思われる。多くの破片がSK01内から出土した。口縁部外面に2条の突帯を巡らせ、その間に花菱のスタンプ文を押す。突帯間はミガキか。底部近くにも突帯を巡らせ、底面には脚が剥離した痕跡を残している。SK01等から出土しており、礎石建物の廃絶と一緒に廃棄されたものであろう。

23-4も瓦質土器火鉢である。復元口径は36.4cmを測る。SK01から出土した23-5も、焼成や突帯が似ており、同一個体の可能性があるが、復元底径は23cmと小さい。口縁部外面に突帯が4条以上あり、全面に2cm間隔程度で突帯を巡らすものか。在地産であろう。外面に白色の付着物が見られる。

中世の陶器 24-1は瀬戸美濃系の丸皿である。外面にも回転ケズリが見られ、全面に灰釉をかける。下半には荒いケズリを残している。大窓期。

24-2は備前擂鉢の口縁部の小片である。口縁部を直立させ、外面に凹線を巡らすもので、内面側にはスリ目が見える。時期は、15世紀中頃から16世紀初頭。24-3は小型の壺底部の小片である。23-2～5は焼締め陶器の壺である、同一個体と思われるが接合しない。大型品。内外面とも横

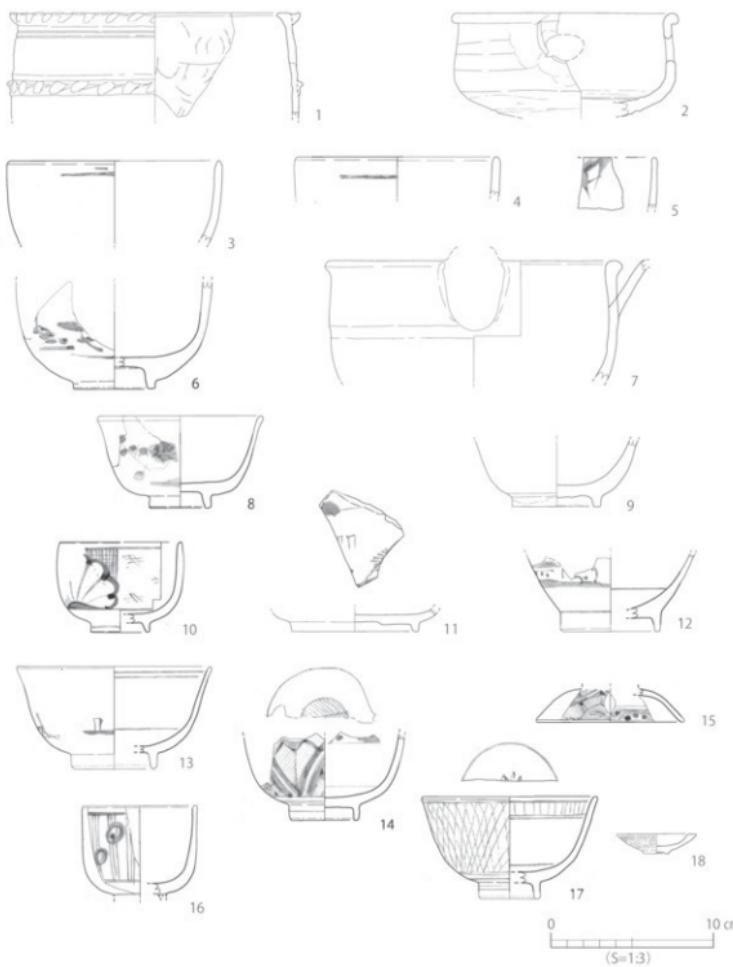


第24図 陶器実測図 (1:3)

方向を中心としたカキメが残る。24-4は外面調整がケズリとなっており、底部に近い部位かもしれない。24-7は内外面ともナデ。いずれも器壁が厚く、胎土は密。非常に硬く焼しめられている。口縁部、肩部などの特徴ある部位の破片は見られないが、備前か。

近世以降の陶磁器類 第25・26図には、近世以降と考えられる陶磁器類を図示した。

25-1は、SK01から出土した肥前系陶器の壺である。口縁と胴部に縄状突帯を貼り付け、全面に鉄軸をかけたもの。内面調整はナデで、同心円の押さえ具痕を残す。17世紀前半葉か。25-2は、

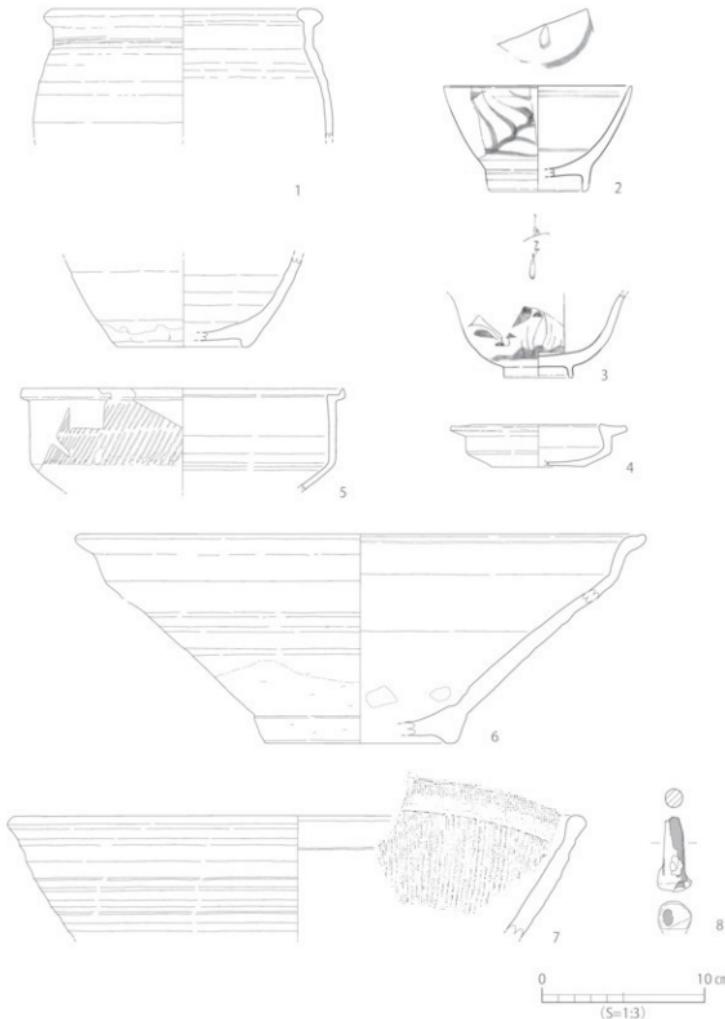


第25図 陶磁器実測図(1) (1:3)

肥前系陶器の片口。灰釉をかけ、注口の痕跡を残す。17世紀中頃か。25-3・4は、試掘時に出土した陶胎染付である。肥前系と思われ、17世後半から18世紀のものか。

25-5は京・信楽系の半球碗。25-6はSK01から出土した陶胎染付の丸形碗で平戸・波佐見産か。25-7は瀬戸美濃系の陶器片口で灰釉をかける。これらは18世紀中頃と思われる。

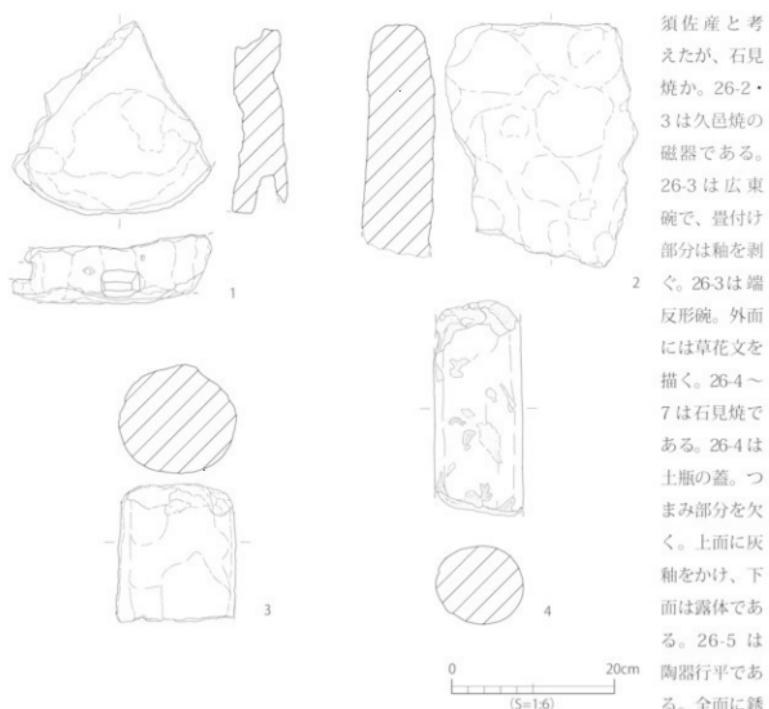
25-8～18、26-1～7は19世紀代と考えられる陶磁器である。25-8は瀬戸美濃系の磁器端反形碗で、外面にコバルト釉による梅花文がある。25-9はSK01に入っていた萩の碗。25-10～18は肥前系の磁器である。25-10は分布調査時に採取した小丸碗。25-11は、SD01内から出土した



第26図 陶磁器実測図(2) (1:3)

皿で輸花皿か。25-12は広東碗。25-13・14は端反形碗で、25-13外面には帆掛船などが描かれる。25-15は端反形碗の蓋である。25-16は筒丸形碗で、外面には縞目文を描く。25-17は外面に格子文を描く端反形碗で、縦付けは釉を剥ぐ。見込みにも文様があるが、不明。25-18は貝殻文を彫り込んだ紅皿である。

26-1は、小型の陶器甕である。頸部に2～3条の沈線を浅く入れ、底部を除き誘釉を薄くかける。



第27図 石製品実測図（1：6）
面は2段に飛びガナを巡らす。26-6は灰釉をかけた捏ね鉢。内面は摩滅している。26-7は、来待釉の拂り鉢である。

旭山遺跡での近世の陶磁器は、概ね18世紀中頃以降から増え始め、17世紀代のものをほとんど含んでいない。

26-8は、窯道具のハリである。来待釉が付着しており、石州瓦の生産に関わるものか。

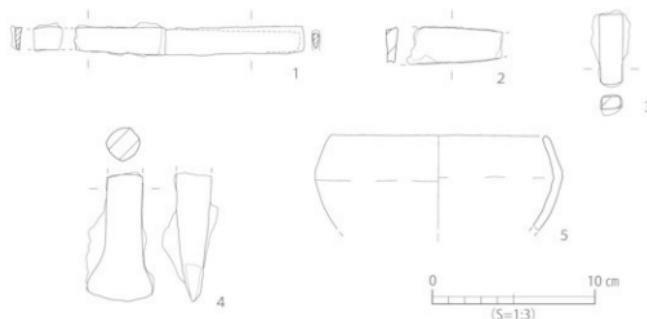
石製品 第27図には、旭山遺跡で出土した石製品を示した。

27-1は、SK01から出土した石臼の破片である。復元直径は約37cm。上臼の破片で、上面のくぼみを残すが、下面の溝部分は全く残存していない。側面に幅48mm、高さ34mm、奥行き46mmの横打ち込み穴を残している。下面を中心的に割れが目立ち、上面は赤く焼けているように見えるほか、煤が付着している。

27-2は礎石建物やSK01に近いE1グリッドで出土した円筒形の石製品の一部である。残存高30cm、厚さ約8cmで、復元すると内径約44cmとなる。端部には幅5cm程度の面を持つようであるが、角は摩滅している。外面は摩滅し、内面には煤が付着している。凝灰岩製を見た目よりも軽く、5.6kg程しかない。内面側に火を受けていることから竈や煙突のようなものであろうか。

27-3・4は石塔残欠だろうか。いずれも凝灰岩質の石材を使用し、円柱形を呈している。

須佐産と考えたが、石見焼か。26-2・3は久邑焼の磁器である。26-3は廣東碗で、疊付け部分は釉を剥ぐ。26-4は端反形碗。外面には草花文を描く。26-4～7は石見焼である。26-4は土瓶の蓋。つまり部分を欠く。上面に灰釉をかけ、下面是露地である。26-5は陶器行平である。全面に鉄釉をかけ、外



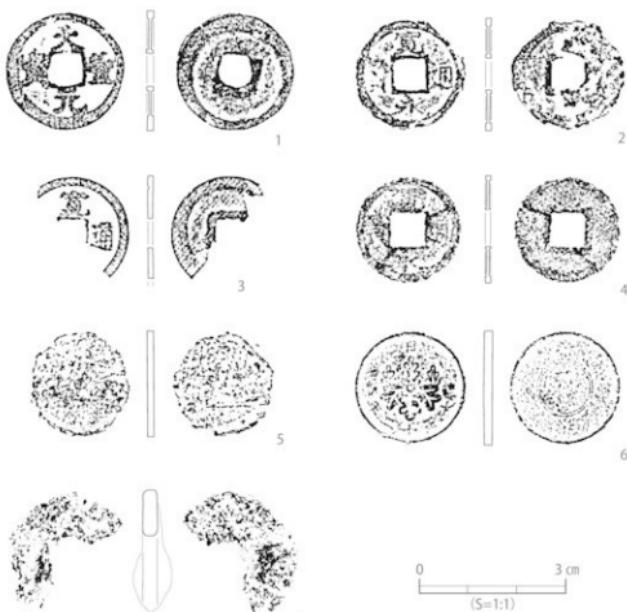
第28図 金属器実測図（1:3）

金属器 28-1は小柄である。接触面が小さく不確かだが、すべての破片が接合する可能性が高い。長さ8.4cmの銅板製の柄に鉄製の中子が収まっている。銅製の一枚板を折り曲げた柄は、鎧び膨れにより、刃側で開いている。文様等は見えない。G2グリッドで出土している。

28-2は幅22mm、厚さ7mmの板状を呈し、残存長は56mmである。片側に向かい細くなる。刀の中子だろうか。28-3は幅15mm、厚さ7mmの棒状のもので、残存長は45mmである。用途は判らない。G1グリッドで出土しており、28-1に関係するか。

28-4はノミである。残存長71mmで、大きく開く刃部の幅は40mmである。太さ21mmの軸部分は中が詰まっており、重さは157gである。

28-5は、鉄製鉢と考えられる。口縁から25mm下で大きく屈曲する。ゆがみがあり、本来の大きさは判らない。



第29図 古銭実測図（1:1）

古銭 第29図には古銭を示した。29-1は、天元通寶と読める。初鑄年は1360年。29-2～4は寛永通宝である。この内、29-3は試掘調査時に出土した。29-4は二つに割れている。29-5は文様がつぶれていて判読できないが、近代の銅銭。29-6は、試掘調査時に出土した大正十二年製の十銭銅貨。29-7は方形孔を持つ鉄製のもので、全面を赤さびに覆われている。偽銭か。復元径約25mm、厚さは3mmで、全体の半分近くを欠く。

〈註〉

- (1) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集 4』九州歴史資料館 1978年
- (2) 上田秀夫「14-16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究2』貿易陶磁研究会 1982年
- (3) 『湯の奥遺跡 登安寺遺跡 湯後遺跡 土井・砂遺跡』島根県教育委員会 2001年

4. 古道の発掘調査

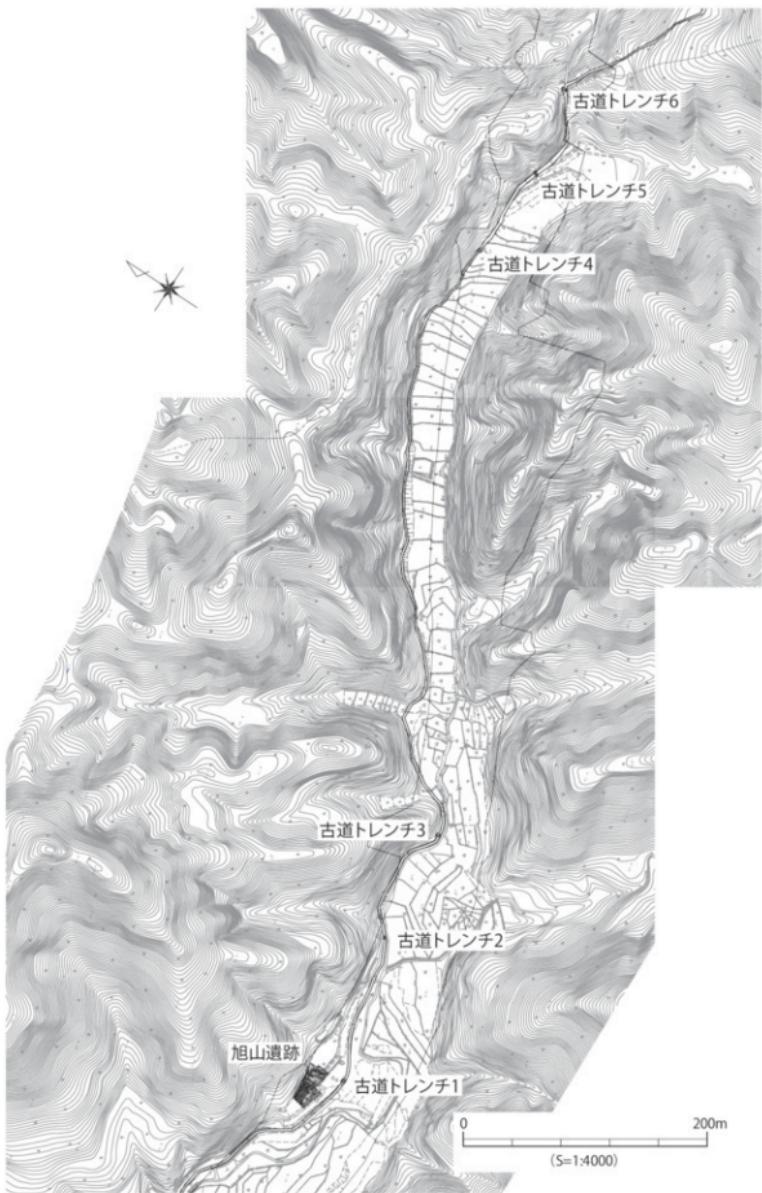
旭山遺跡の南面には、仙山町から朝山を経て波根川右岸まで続く古道が通じている。この古道の西端にあたる波根川右岸から、小さな川沿いを岩版を削って延び、狭い谷筋を上り、朝山町で朝山大田道路予定地を南に外れるまでの間は約2kmある。西端の波根川から旭山遺跡近くまでの間や途中の一部区間が工事予定地から外れており、工事予定地内に含まれる旭山遺跡付近から朝山町までの約1.2kmについて、平成24年度の旭山遺跡範囲確認調査に合わせて調査を実施した。調査は、波根町側で3カ所（トレンチ1～3）、朝山町側で3カ所（トレンチ4～6）のトレンチを設定し、古道を切断する方向で土層堆積状況を確認した。なお、この古道は、波根町側では路面がコンクリート舗装されており、路面のコンクリートを除去した後に掘削を行った。古道の沿線には、水田・畠の跡と思われる平坦面や、宅地に伴う川の護岸が点在する。工事用地外の西側、高原遺跡隣接地付近では浅い岩窟が彫られ、地蔵が祀られていた。

トレンチ1は、旭山遺跡に隣接する標高25.5mの位置に設定した。コンクリート舗装の下には黄色の石を多量に含む造成土がある。トレンチの北側では旭山遺跡付近に最後まで建っていた家の地覆石が見られ、古道との間は杭などが入る黒色粘土が見られる。古道の側溝を埋めた上でであろう。南側には石垣の痕跡があり、石垣の面と北側の溝の肩との間の距離は1.9mあり、1間に近い。

トレンチ2は旭山遺跡から約120m東に向かった標高28mの位置に設定した。この付近は、北側は上川内背筋から続く斜面に接し、南側は川に接している。コンクリート舗装とその下の砂層の下には石州瓦を敷き詰めた面が見られる。山側からの水が流れ込みやすい場所であるため、近代以降は廃材を敷き詰めて道を維持していたことが判る。山側には砂を含んだ暗灰色土が見られ、側溝だろうか。石州瓦を敷いた褐色土面の下には黄色の石を含んだ造成土があり、ある時期の古道と考えられる。川側には黒色土が部分的に見られ、調査時にはすでに失われていたが、トレンチ1と同様に石垣があったと思われる。石垣があったであろう場所から山側の側溝の肩付近までは約1.6mあり、石垣の厚みを考えると、トレンチ1と同様に2m近い路面幅が想像される。

トレンチ2の南側の水路中は一枚岩の岩盤が露出しており、人工的に溝を切ったり、方形に切り出した痕跡が多く見られる。また、トレンチ2の北西側には凝灰岩の岩盤が露出しており、削岩機を使用した痕跡が残されている。

トレンチ2付近を過ぎると、コンクリート舗装は見られなくなり、東に向かって土の道が続く。



第30図 古道トレンチ配置図（1：4,000）



第31図 古道トレーンチ1～3配置図(1:1,000)

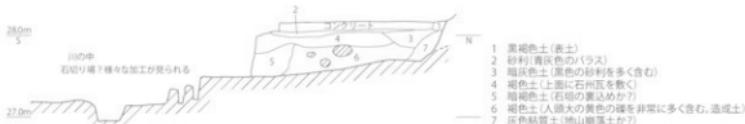


第32図 古道トレーンチ4～6配置図(1:1,000)

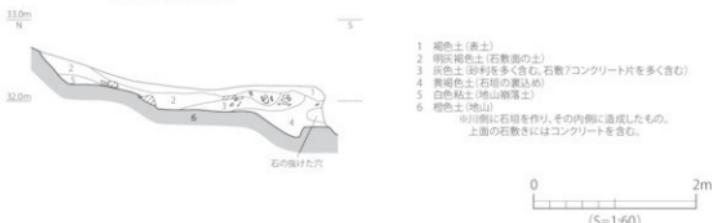
トレンチ 1 西壁



トレンチ 2 西壁



トレンチ 3 東壁

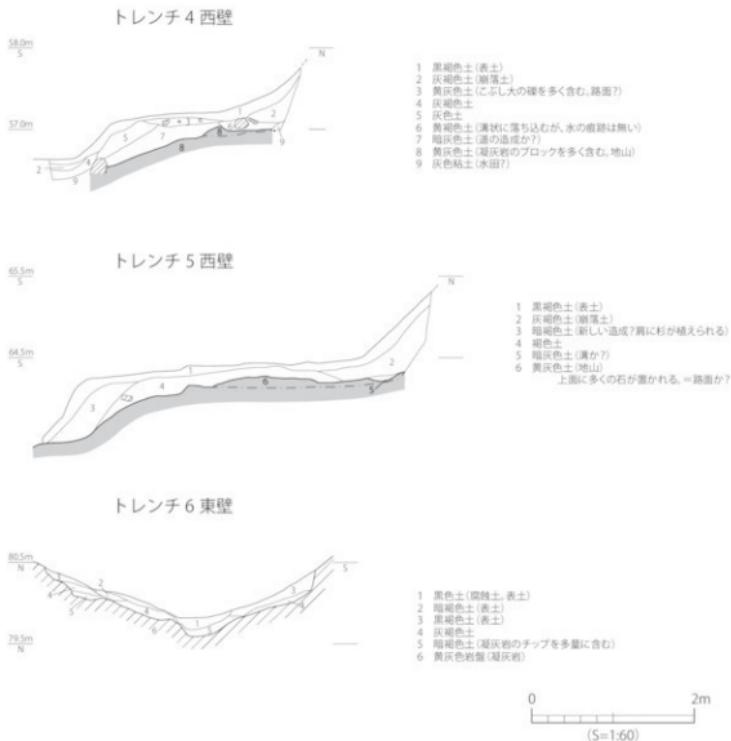


第33図 古道トレンチ 1～3 土断面図 (1:60)

トレンチ 3 は、旭山遺跡から約 220m 東に進んだ、標高約 32m の土の道の部分に設定した。表土の下には、トレンチ 2 と同様に、こぶし大以上の大きさの板状の石を敷き詰めた面が見られる。この石敷きにはコンクリート片も含まれており、トレンチ 1・2 付近がコンクリート舗装される頃にも、土の道の部分の補修が続いていることが判る。

北側は山からの斜面が緩やかに続いており、側溝の痕跡は判らない。南側は、川に向かって石の抜けた痕跡があり、トレンチ 1・2 と同様に石垣が組まれていたようである。地山面は、幅 1.2m に渡って水平に削れており、石垣が想定される位置から約 2.1m の幅を取ることができる。

旭山遺跡付近から東へ 300m 程のところで、古道は工事予定地から北へ外れるが、650m 付近で再び工事予定地内に入る。この付近にトレンチ 4 を設定した。周囲の標高は約 57m である。トレンチ 3 付近より西側は谷の北側を川が流れしており、古道は川に接していたが、トレンチ 3 より東では谷の南側を川が流れおり、トレンチ 4 付近では、古道の下側は休耕田を利用した杉の植林地が広がっている。表土の下には、こぶし大の礫を含む黄灰色土があり、路面であろうか。山側の側溝があるべき位置には、礫を含んだ黄褐色土が見られるが、水が流れたような痕跡は見られない。谷側は何層か重なった堆積が見られ、補修の痕跡と思われる。路面と思われる黄灰色土の北端

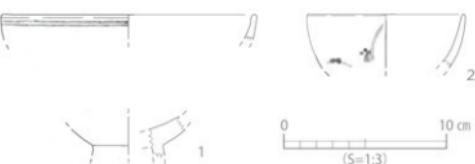


第34図 古道トレンチ4～6 上層断面図(1:60)

から灰色土の肩までの幅は約1.4m、山側の傾斜変換点からの幅は約2.0mである。

旭山遺跡から約780m東の標高約64.4mの位置にトレンチ5を設定した。この付近は、南側の50cm下から杉の植林地が続いている、道幅も広い。山側の崩落土を取り除くと、わずかに溝状のくぼみが見える。褐色土面が広く見られるが、その下の黄褐色の地山の直上にはこぶし大の石が敷かれており、この面がある時期の路面だったと思われる。古道の全面に見える褐色土面で見ると、その幅は約2.8mとなるが、その下の地山部分の傾斜変換点で見ると約2.2mとなり1間に近い。

古道は旭山遺跡から約840m東で尾根にさしかかり、尾根上で十字路となる。そのまま東進する道と北へ折れる道は細く、いずれも消えかかりながら尾根を降り、現市道に繋がる。十字路から南へ折れる道は、現市道と並行するように富山方面へ延び、工事予定地を外していく。工事予定地を出た南側では石段も残



第35図 古道出土遺物実測図(1:3)

されている。トレンチ6は、この十字路にさしかかる小さな尾根の途中、標高約80mの位置に設定した。現地は急な坂道で、雨水による浸食が激しく、両側が切り立ったV字形を呈している。浸食と崩落を繰り返しているように見え、路面を認識できない。

古道出土の遺物 トレンチ1・5から少量の磁器が出土しているが、トレンチ5出土の磁器は近代以降のものと思われる。35-1はトレンチ1から出土した陶胎染付である。破片は3片あり、同一個体と思われる。全面に暗緑色がかった透明釉がかけられ、口縁部外面に緑色の釉で2条の線が引かれている。35-2は肥前系と思われる染付の小碗である。外面に梅花文が描かれている。

いずれも18世紀代と思われ、旭山遺跡の近世遺構に関わるものであろうか。他のトレンチからは時期を示すような遺物は見られなかったが、トレンチ1の出土遺物や補修の状況などから、少なくとも近世には機能していたと思われる。

5. 小結

旭山遺跡では古代～中世、中世末、幕末～近代の遺構面が確認できた。

調査区中央南側の加工段2や、その周囲に見られるピット群は、その周辺に集中的に見られる須恵器・土師器から、奈良時代に遡る可能性がある。加工段2は、残存幅約2m、奥行き1mの南向きで、東側は近代以降の宅地によって破壊されている。また、東側の加工段1は幅約10m、奥行き約2.4mの西向き加工段で、出土した土師器から平安時代に機能したものであろう。

中世末と考えられる時期には、礎石建ちで石列を作う建物跡が見られる。この建物は周囲に雨落ち溝を備え、縁を巡らす可能性もある。その建物の廃絶後には、廐棄土坑(SK01)があり、内部には、瓦質土器火鉢(23-2)の他、火を受けた痕跡のある石臼(27-1)が含まれる。周辺で採集された石塔類(27-3・4)も、この時期に含まれるものだろうか。

遺物では、前述の須恵器2点に近い遺物としては少量の土師器の他、平瓦片がある。近隣の高原遺跡でも平瓦片が出土しており、北西約1kmに位置する天王平廐寺との関係がうかがわれる。

土師器には、ハの字に高台が開くものと無高台で底部の小さいもの、硬質に焼成された小型のものがあり、それぞれおおよそ10～12世紀頃、16～17世紀頃の年代が推定される。陶磁器で見ると白磁・青磁・青灰釉陶器・青花が15世紀後半から16世紀前半を前後する時期と思われる他、備前壺・擂鉢も同様の時期と思われ、瓦質土器香炉も同じ時期の可能性がある。これらがすべて礎石建物に伴うものであれば、一般家屋とは思えない。この建物の撤去に伴う廐棄土坑(SK01)には、19世紀代の陶磁器類や在地産の瓦質土器が含まれており、建物自体は長く存続したか。

礎石建物が撤去された後は、畠地となり、遺跡西半に南北方向に伸びる歓が作られ、その後、水田化されている。出土遺物では近世初頭の遺物は非常に少なく、次に増加するのは18世紀後半以降となる。これらの遺物は肥前系の陶磁器や石見焼が大半を占め、一般集落の様相となる。

第4章 中尾H遺跡（3区）の発掘調査

1. 調査の概要

中尾H遺跡は大田市久手町刺鹿に所在する。久手町刺鹿は旧波根湖の南西岸にあたり、南へ向けて江谷川とその支流が作り出したいいくつかの谷があり込んでいる。南西方向から流れてきて江谷川に繋がる小河川沿いは、旧波根湖南岸と大田町方面を結ぶ古い街道となっており、その谷間の出口に近い標高約18m付近に中尾H遺跡がある。中尾H遺跡の位置する谷の南側に面した斜面には、古墳時代から古代まで続く集落跡である市井深田遺跡が、谷の下流側、標高10m付近には縄文・古墳時代～古代の遺物が多く出土した門遺跡がある。また、遺跡を見下ろす北側の丘陵上には刺鹿神社が置かれている。

中尾H遺跡については、平成22年に朝山大田道路本線上の約4,230m²（1・2区）について発掘調査を行い、縄文時代と奈良時代を中心とした遺物を検出しているが、本線内に位置することになる送電線鉄塔の移設が必要になり、平成25年度に移設先（3区）約250m²の、平成26年度には移設後の鉄塔跡地（4区）約300m²の発掘調査を行なう事になった。本章は、平成25年度に行なった送電線鉄塔移設先（3区）の発掘調査についての報告である。

中尾H遺跡（3区）は、東西に延びる谷の左岸側に位置している。周辺は、昭和52年に行われた圃場整備に供って河川の付け替えが行われており、調査時に遺跡の南側を流れている河川は、昭和52年以前は、谷の中央近くを流れていたはずである。調査時には、遺跡周辺は整備された水田となり、谷の南側を流れる河川はコンクリートで護岸されていた。

中尾H遺跡（3区）の調査に際しては、測量法第III座標系X=-87076.398、Y=31387.258を基点に、周囲の地形に合わせてX軸方向から東へ72.846度振った軸を基準に3mのグリッドを設定した。グリッド名は南北をA～Fに、東西を1～6とし、北西隅からA1・A2・・・F6と呼び、包含層出土遺物は、このグリッド毎に取り上げを行った。

表土・耕作土は重機を使用して除去し、地表下約30cm以下は人力で掘削した。調査区の下流側にあたる東端に排水をかねて幅約60cmのトレンチを設定し、土層を観察した。

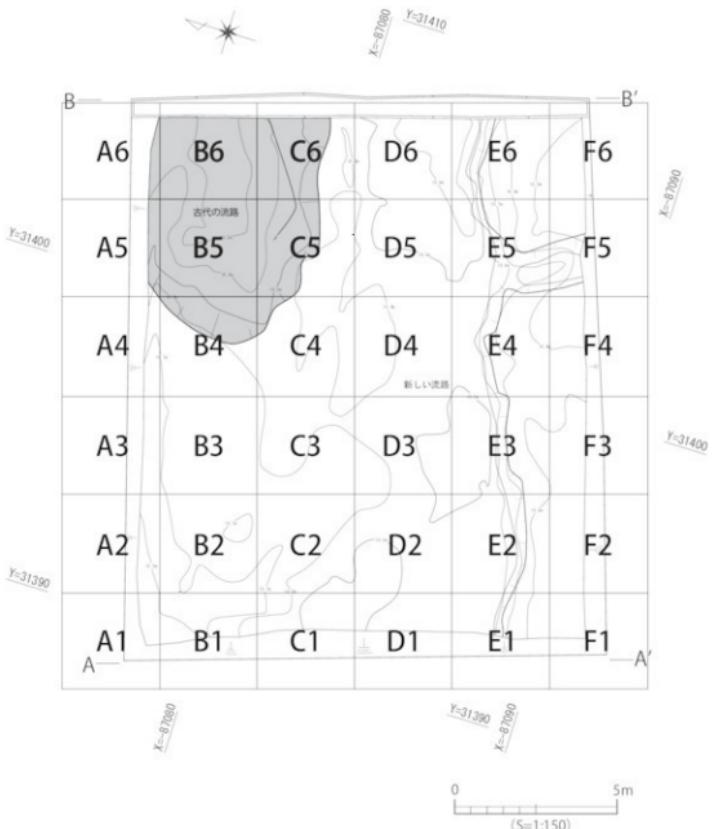
中尾H遺跡（3区）の耕作土からその直下の堆積は、昭和52年の河川の付け替えによって破壊されたと考えられるが、標高16.5m付近より下層には古代の面が残されており、当時の流路跡を検出した。表土掘削時に古銭（寛永通宝）1点を表採した他、少量の縄文・弥生土器、磨製石斧1点等も出土したが、出土遺物の大半は古墳時代から古代の須恵器・土師器であった。

2. 遺構

第39図には東西両壁の土層堆積状況を示したが、遺跡中央に新しい流路があることから、東西両壁の土層は連続していないため、土色を合わせることができなかった。地表から20cm程の厚さで耕作土があり、その下に水田床土が見える。これらの土にも少量の摩滅した土器片などが含まれている。耕作土直下にも柱穴など（第39図西壁のa・b、東壁の黄色粘質土など）が見えるが、いずれも新しい。それらを除去すると、F3付近から北へ延び、B3付近で直交して東へ向かう暗渠が入っており、その断面が東壁に見えている。暗渠は耕作土直下から掘り込まれており、幅約30cm、深さ約70cmの断面箱形で、内部にはもみがらを詰め、塩化ビニール製の透水パイプが入



第36図 中尾H遺跡調査区配置図（1：1,000）



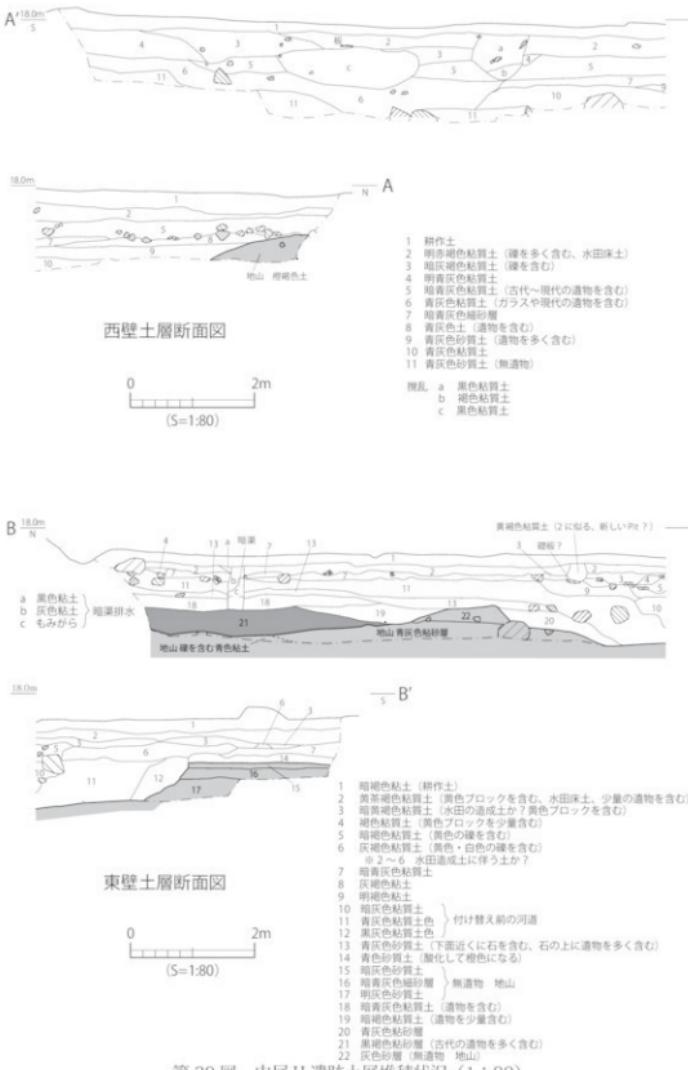
第37図 中尾H遺跡（3区）グリッド配置図（1:150）

れられている。この透水パイプからは調査中にも水が流れ出していた。暗渠の周囲の土は、60cm程度の厚みで粘質土の堆積となっているが、これらは昭和52年の川の付け替えによる造成と考えられ、その下面近くにはビニール片やガラス瓶など現代のものを含んでいる。暗渠の周囲にもゴミを埋め込んだと思われるようないくつかの窪み（第39図西壁のcなど）が見られた。それらを取り去ると、調査区中央が窪み、東西方向に続く流路となっている。この流路は、西から東へ傾斜しており、調査区南東のE5付近で南から流れてくると思われる幅の狭い支流の流路と繋がり、T字形となる。前出の暗渠は、南から流れてくる支流の西側と東に流れる流路の北側に平行しており、それぞれの流路方向に一致している。これらの流路は、昭和52年の河川の付け替え直前に流れていった川と思われ、調査地の大半はその川底と考えられる。この流路の周囲には、人頭大から一抱え以上もある石が落ちている（図版30）。この流路内で最も深いDライン上には大きな石が見られないことから、Dライン付近が流路の中心で流速が早く、その周囲に石が残されていると思われる。

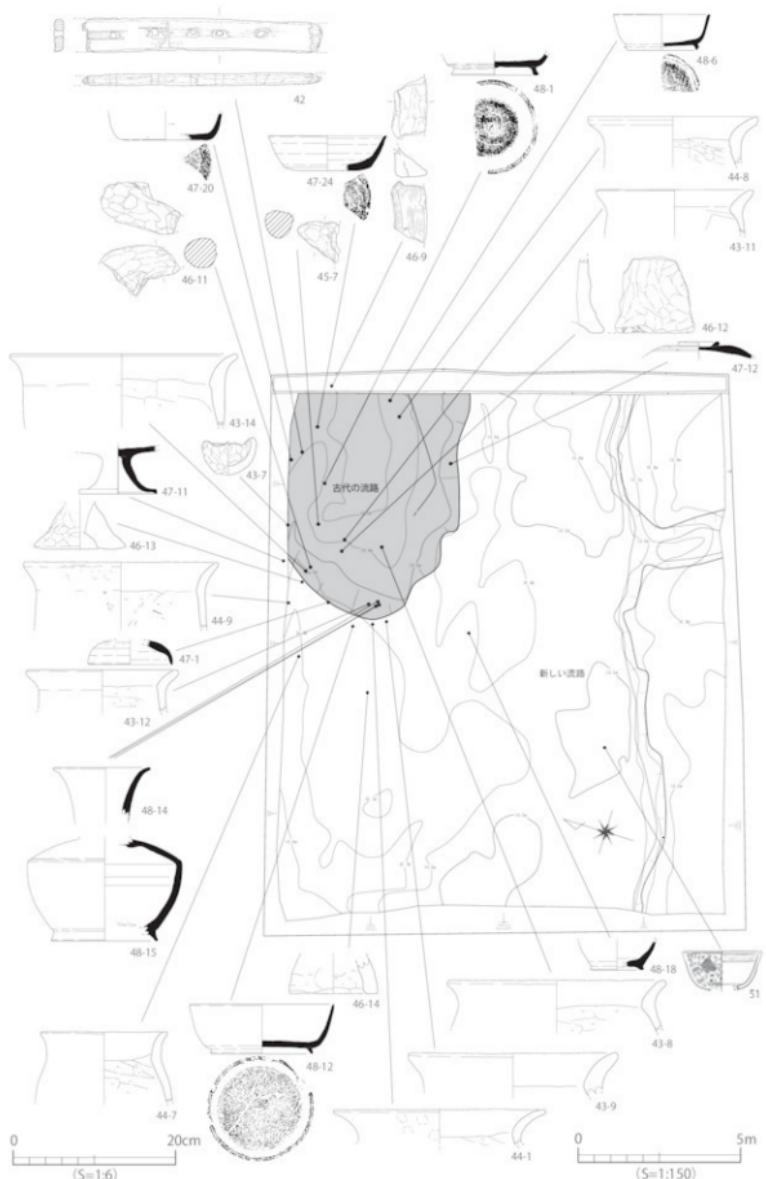


第38図 中尾H遺跡（3区）遺溝配置図（1：100）

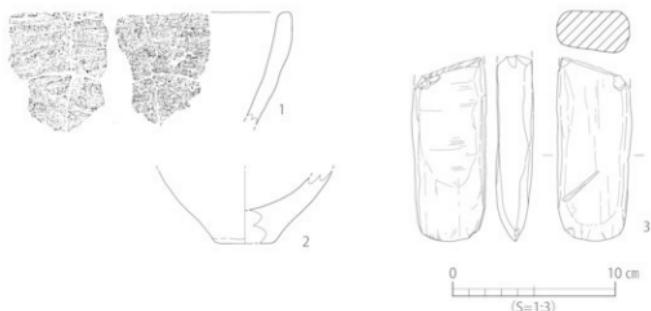
また、B3付近には太さ30cm程、長さ約60cmのノコギリによって切断された木が残されていた。この流路の周囲には磨製石斧（41-3）を始め、摩滅した遺物を少量含んでいたが、遺構は見られなかった。流路の南よりに位置するE3付近では、近世末の染付（第51図）なども出土したが、標高の高くなるFライン付近では遺物の出土も少なかった。



新しい流路に伴う土砂を除去すると、調査区北東側のC4～B6付近で、幅約5m、長さ約8mに渡つて黒褐色粘砂が堆積する堆みが見られた。この黒褐色粘砂層には非常に多くの遺物が含まれており(第40図)、その出土遺物の時期も、古墳時代から古代に限られることから、古墳時代から古代に流れ、古代の内に埋没した川の一部だったと思われる。その上層の東壁13・18・19にも多くの



第40図 中尾H遺跡（3区）遺物出土状況（1:150）



第41図 繩文土器・弥生土器・石器実測図(1:3)

遺物が含まれており、これらの土層も新しい流路に切られている。東壁の13層は、西壁の9層に続くと思われ、この9青灰色砂質土からは多くの遺物が出土している。遺跡の北東側の古代の流路とした部分からは、須恵器環類や土師器甕・移動式竈・土製支脚などの煮炊具が出土したほか、手づくね土器(43-7)や、木製品(第42図)が含まれている。

東壁に接して設定したトレンチで、古代の流路より下層を掘り下げたが、遺物は含まれていなかった。また、遺跡全体を通して、平成22年度の1・2区の調査で大量に見られた縄文土器は、ほとんど含まれていなかった。

3. 出土遺物

縄文土器・弥生土器・石器 第41図には、中尾H遺跡(3区)から出土した縄文土器・弥生土器・石器を示した。

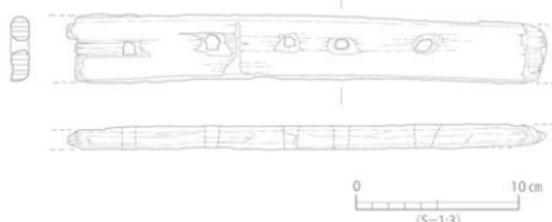
41-1は縄文土器である。粗製の深鉢で内面は荒く、外面はやや丁寧な横方向の条痕を残す。中尾H遺跡(1・2区)からは、後期を中心に多くの縄文土器が出土したが、3区から出土した確実な縄文土器は、この1点のみである。

41-2は、弥生土器の底部である。復元底径は3.4cmで、底部の器壁は約2.0cmと厚い。胎土中に2mm以下の砂粒を多く含んでいる。内外面ともナデか。

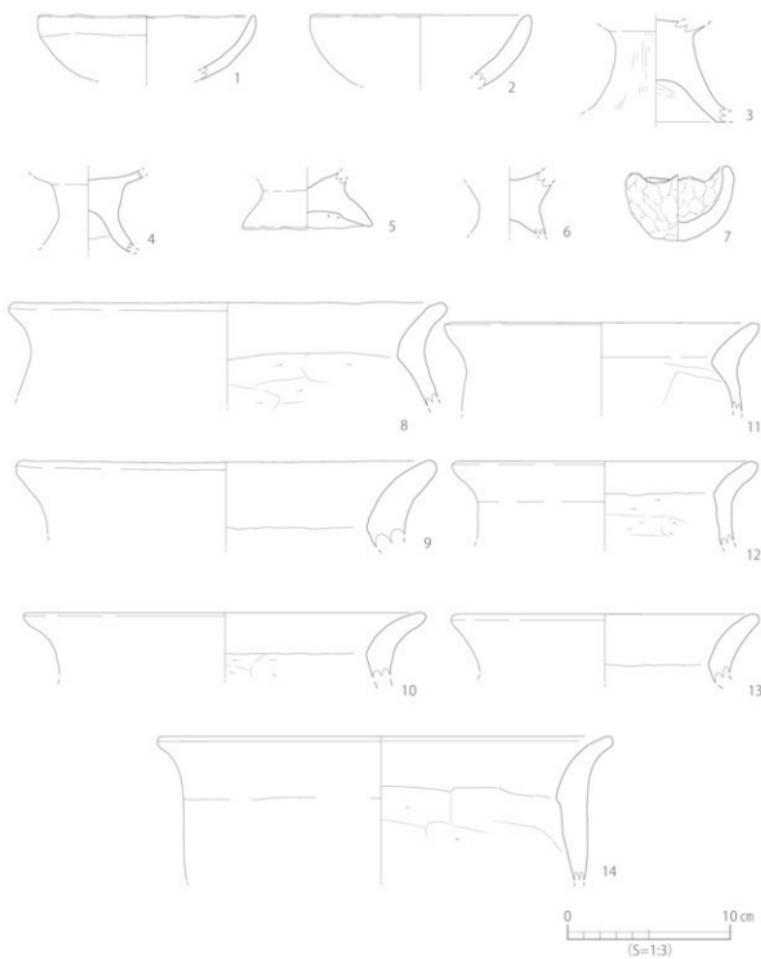
41-3は磨製石斧である。黒灰色の石材を使用し、基部を欠く。残存長10.7cm、幅4.4cm、厚さ2.2cmである。刃部は片刃気味に作られ、刃部幅は3.7cmである。

木製品 木製品(第

42図)は、古代の流路内から1点が出土した。針葉樹を使用し、方形穴を5穴以上連続させる棒状製品で、残存長29.6cm、厚さ1.3cm、幅3.9cmを



第42図 木製品実測図(1:3)



第43図 土師器実測図(1) (1:3)

測る。9×7mm 程の穴が約5cm 間隔（1力所のみ3.2cm 間隔）で開けられている。馬鍬か大足の部材と考えられるが、すべての穴が同方向に開けられており、厚みのない板状を呈することから大足だろうか。時期は判らない。

土師器 第43～46図には土師器を示した。

43-1・2は、环である。いずれも復元口径13cm程で、ナデ調整される。

43-3・4は高环の脚部である。43-3は、外面に縦方向のハケメを残しており、赤彩があるか。43-5は台付鉢の脚部であろうか。器壁が厚く、内外面とも荒くナデされる。43-6も高环か。



第44図 土師器実測図(2)(1:3)

43-7は手づくね土器の鉢である。全面に指頭圧痕を残し、口縁部も波打っている。器壁が非常に厚い。祭祀具だろうか。

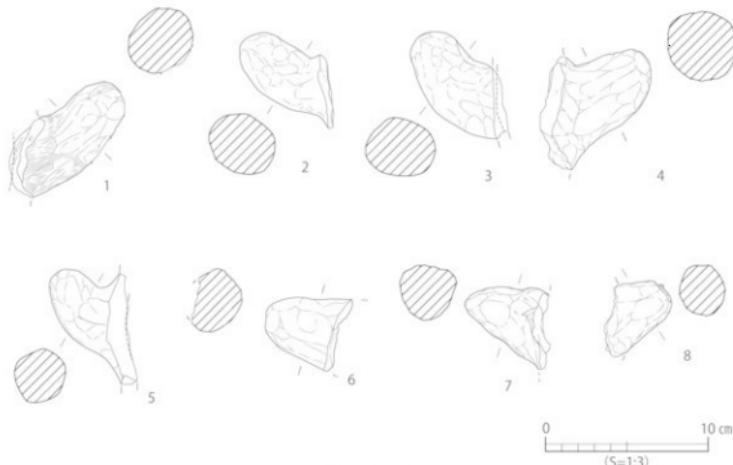
43-8～13は甕か移動式竈の口縁部で、頸部内面を強く屈曲させ、くの字状の頸部を持つものである。43-8は、体部の器壁がやや厚く、胎土中に砂粒が多く含んでいることから移動式竈か。

43-14は口縁を緩やかに外反させるもので、体部の器壁が薄く、内面に強いケズリを残している。外面に強い被熱痕があり移動式竈か。

44-1～10は口縁部を緩やかに外反させる甕か移動式竈の口縁部である。内面の頸部以下は横方向のケズリである。44-2・10は、外面に縦方向のハケメを残している。

44-11は、口縁部を強く短く屈曲させる甕。内外面ともナデに見える。

第45図は瓶の把手である。45-1にはハケメ状の調整を残している。



第45図 土師器実測図(3)(1:3)

46-1・2は口縁が短く直立するもので、盤の口縁部か。器壁が厚く、頸部以下の内面調整はケズリ。46-2の外面には指頭圧痕を残している。

46-3～9は移動式竈と考えられるものである。46-3～5は口縁部、46-6・7は基部、46-8・9は剥離痕が見え、底部分である。46-3の頸部外面には強い指頭圧痕が連続して見られる。46-5の外面には煤が付着している。46-9はハケメ調整が強く残る。

46-10～19は土製支脚である。46-10・11は腕部で、被熱している部位を下面と考えた。

46-12～19は基部。46-14は底面のくぼみが極端に深い。46-15は、底面が平底で、繊維状の圧痕が残されている。

須恵器 第47～49図には須恵器を示した。須恵器の多くは、古代の流路や、それに延長するBライン周辺を中心に出土している。

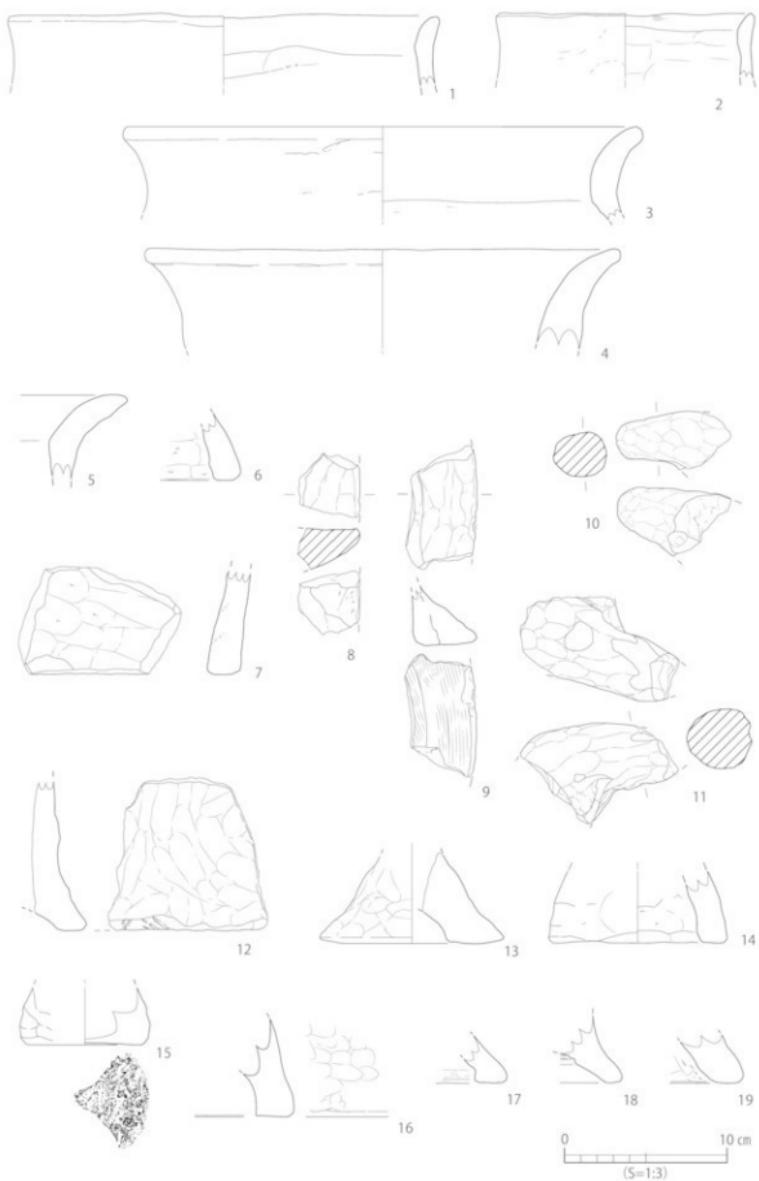
47-1～4は壺である。47-2は、カエリの付くもので、器高が無いことから蓋と判断した。47-3の外面にはわずかに自然釉が付着している。47-3・4は壺身である。47-1・3は小型化したもので、7世紀前半台のものか。

47-5～11は高壺である。47-5は、脚部の2方向に台形のスカシがある。47-6は壺部内面が研磨されたように摩滅している。47-11は、壺部が平らなものである。

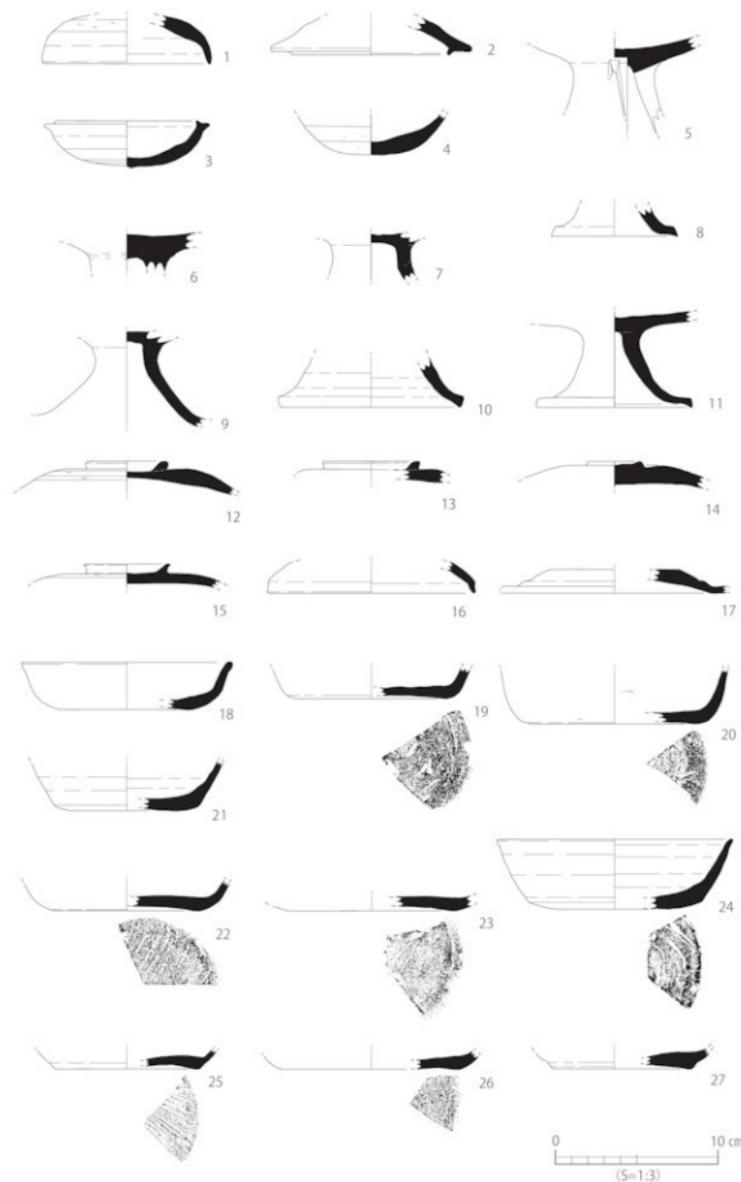
47-12～17はつまみの付く蓋である。確認できるものは輪状つまみ。47-14はつまみの低いもので、外側に自然釉がかかる。

47-18～27は、わずかに外傾する体部が直線的に延びる無高台の壺で、わずかに外傾する体部が直線的に延びる。底部の切り離しは、47-19・24が回転ヘラ切り、47-22・23・25・26は静止系切り。47-12は回転系切り後にナデられているように見えるが、摩滅のため断定できない。47-20は回転系切りか。

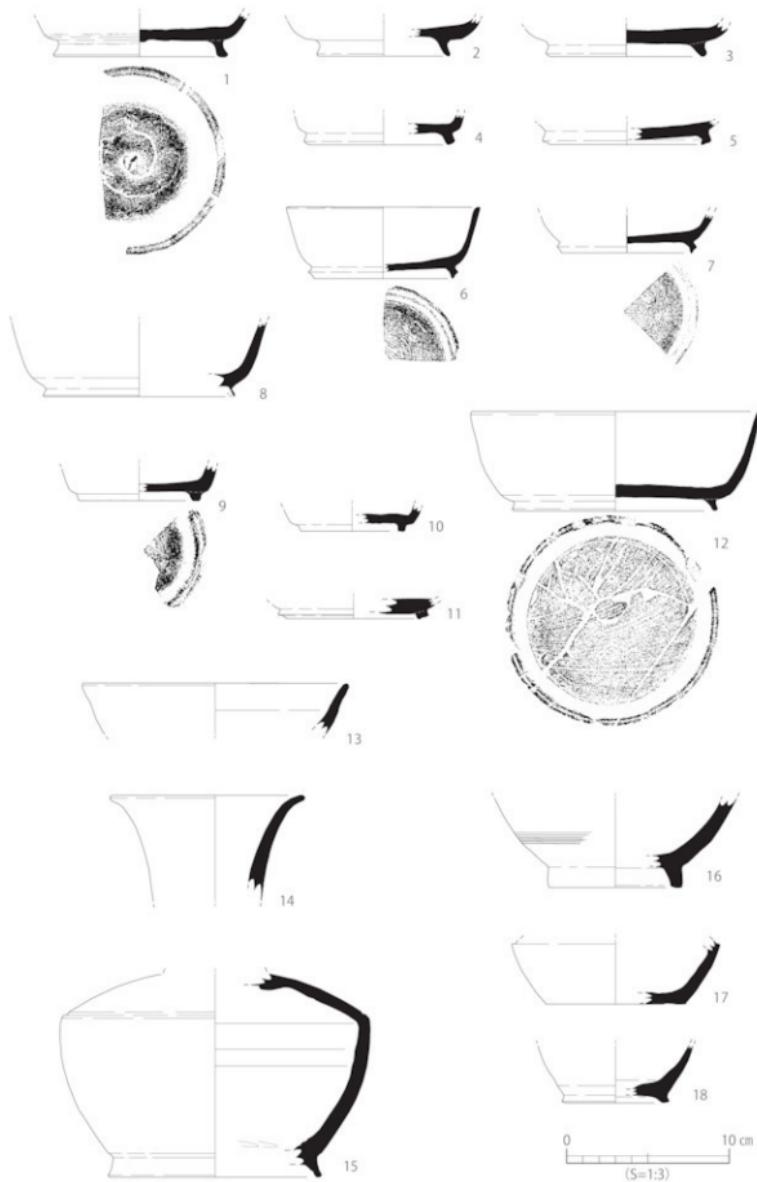
48-1～12は、外傾する体部が直線的に延びる壺のうち、高台の付くものである。いずれも底



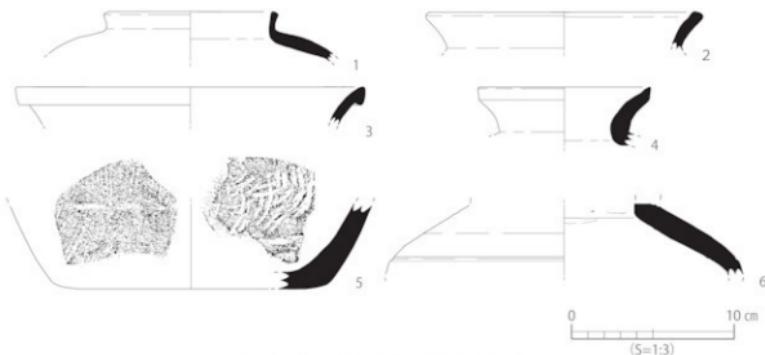
第46図 土師器実測図(4) (1:3)



第47図 須恵器実測図(1) (1:3)



第48図 須恵器実測図(2)(1:3)



第49図 須恵器実測図（3）（1:3）

部以外は回転ナデ調整される。底部の切り離しは、48-1が回転ヘラ切り、48-6・7・12は静止糸切り。48-9は回転糸切りで、48-10も回転糸切りの可能性がある。48-12は口径17.8cm、高さ6.2cmの大型品で、48-8も同様のものか。

48-13は器壁が厚く、口縁部をつまみ出すもので、皿の口縁部だろうか。復元口径は16.2cm。

48-14・15は、長頸瓶である。48-14は、隣接して出土した2点の破片が接合したもので、48-14もすぐ近くから出土したことから、同一個体であろう。

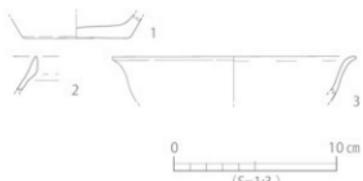
48-16～18は壺と考えられる。48-16は厚い高台を持つ壺の底部で、外面にはカキメが見える。内面調整はナデ。48-17は、小型の平瓶のような器形で、底部は、糸切り後ナデしているようである。体部は回転ナデで、肩部で上半部と接合しているように見える。文房具の水差しだろうか。48-18は、低い高台の付く小型の壺底部。底部の切り離しは見えない。

49-1は短頸壺である。頸部は薄く、口縁部に向かって直立し、口縁部上面に小さな面を持つ。49-2～4は大型の壺の口縁部で、49-3は口縁端部を玉縁状にし、49-4は外面側に面を作るものである。49-4は内面側に自然釉が付着している。

49-5は大型の壺の底部である。底部はほぼ平らで、ナデ調整。外面には平行叩き、内面には同心円文の押さえ具痕を残す。器壁が厚く大型品か。

49-6は壺の肩部で、内外面ともに回転ナデで仕上げている。頸部との接合には回転を利用して2条の沈線状のくぼみが入れられている。外面に少量の自然釉が付着している。

小型の环や高环の一部に、わずかに古墳時代のものを含むが、須恵器のほとんどは奈良時代のものであろう。



第50図 中世の土師器・白磁実測図（1:3）

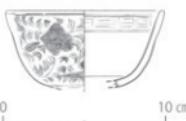
中世の土師器・白磁 50-1は、古代の流路の上面を覆う砂から出土した土師器环底部である。復元底径は6.2cm。切り離しは回転糸切りに見えるが、摩滅しており不明。外傾する体部は直線的に延びる。中世にかかる時期のものか。

50-2は、50-1の近くから出土した白磁の小片。口縁部外面に大きな玉縁を持つ碗の口縁部で、

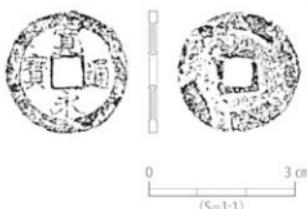
白磁IV類碗^(註1)。50-3は、古代の流路から南に外れたE2から出土した白磁。口縁端部を外側に折り曲げる。砂粒を含まない灰白色の胎土で、全面に透明釉をかける。白磁V類碗^(註2)か。いずれも12世紀代のものと思われる。

染付 第51図は、肥前系の染付端反形碗である。昭和59年に付け替えられた流路から出土した。復元口径は9.8cmで、外面には桔梗を配した草花文を、内面には雷文を描く。破面には、ガラス接ぎの痕跡が残っている。19世紀前半代。

古銭 第52図は、耕作土中から出土した寛永通宝である。中尾H遺跡（3区）からは、この他に金属製品は出土しなかった。



第51図 染付実測図（1:3）



第52図 古銭実測図（1:1）

〈註〉

- (1) 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集 4』九州歴史資料館 1978年
 (2) 註1と同じ。

4. 小結

中尾H遺跡（3区）は、調査区中央を昭和59年の圃場整備による付け替え直前の河川が流れしており、遺跡の残存状況はきわめて悪かったが、調査区北東側で、古代の河川流路を確認することができた。古代の流路からは須恵器を中心に多くの遺物が出土した。

一方、今回の調査では、縄文土器がほとんど見られなかった点が注意される。これは、南側に隣接し、縄文後期を中心とする多量の土器・石器を出土した中尾H遺跡（1・2区）の様相とは大きく異なっている。

出土遺物の多くは、古墳時代から古代の土師器煮炊具と須恵器供膳具であった。中尾H遺跡（3区）の遺物の構成は、南側斜面に位置する市井深田遺跡に似ている。

第5章 総 括

1. 旭山遺跡

旭山遺跡では古代～古代末、中世末、近世～近代の遺構・遺物が見られた。

古代～中世前半の遺構は、2面の加工段で、須恵器・土師器を出土しており、この場所に、8世紀後半から集落が営まれた様子がうかがわれる。旭山遺跡の西に隣接する高原遺跡でも少量の瓦片があり、大田地域で唯一知られる古代寺院、天王平廃寺との関係が課題となる。また、少量ではあるが、中世前半の白磁も出土しており、付近では、平安時代末期頃まで集落が存続している。

中世末頃と考えられる遺物は比較的多く、瓦質土器の香炉や青磁、青花磁器などが見られる。いくつかの土坑の他、礎石建物もこの時期に始まった可能性がある。

近世初頭の遺物は非常に少なく、再び見られるようになるのは、18世紀後半以降、近代にかけてとなる。幕末以降の遺物相に特殊なものは見られず、周辺は畑や水田に利用され、近代に入ると、この場所に在った家屋は、古道に接する南側に移動したようである。

旭山遺跡の眼前を通る古道は、波根川付近から出雲との国境である仙山峠方面を結んでいる。発掘調査では、近代以降の遺物しか確認できなかったが、古くから利用されていた可能性もあり、こうした交通路の存在が、古くから集落を営ませたのではないだろうか。

ところで、旭山遺跡や近隣の高原遺跡（3区）^(註1)からは石塔が発見されている。旭山遺跡の礎石建物には縁が巡ることも想像されことから、中世末頃に寺が存在した可能性はないだろうか。旭山遺跡から北西へ約1km、大田市波根町の国道9号線沿いには、浄土宗長福寺がある。この寺について『石見六郡社寺誌』^(註2)は、以下のように記している。

64 長福寺（浄土宗） 波根東村大字波根東字砂口

本尊 阿弥陀如来 本堂七間四方 境内二千百九十坪

檀徒二〇六九人

天文二年京都大本山第二十八世住職三休上人隠遁し、父母の旧里である当地に歸り、念佛の道場として一字を建立して満蓮社と名づけた。三休上人はもと旭山の城主富永山城守元保の三男であった。元亀二年、当村旭山の東谷に破壊していた長福寺の名を取り満蓮社を長福寺と改称した。寛文六年に八代念誉がこれを再建した。文化六年六月十五代臨誉がまた再建した。境内仏堂二字があり、一は靈堂で本尊を毛利元就靈牌を置いた。毛利元就是夥多の寺領等を寄附したので、十五代臨誉がこれを建立した。もう一字は觀音堂である。本尊は聖觀世音菩薩で、もとは當寺と上川内との間にあり、妙泉庵と称した。創立は寛永年中であり、六代檀譽が慶安年中に現今地に移した。

これによれば、「旭山の東谷」と呼ばれる場所に「長福寺」と呼ばれる寺があったが、元亀二（1571）年段階にはすでに「破壊」していたとされる。「旭山」は旭山城跡（上川内砦跡）の事と思われることから、その東の谷を指すのであれば、旭山遺跡や、そのさらに東奥の谷に元の「長福寺」があつたことになる。富永元保は山中要害山城主とされ、1556年に毛利元就に降伏したと言われている。永祿五（1562）年頃には、毛利元就が石見を制圧していることから、「東谷」の「長福寺」はそれを契機に廃寺となった可能性も考えられる。旭山遺跡出土遺物は、16世紀末以降しばらく断絶があり、17世紀の遺物がほとんど見られないことから、「東谷」の「長福寺」が旭山遺跡の礎石建物

であった可能性はないだろうか。

旭山遺跡で再び遺物が見え始めるのは幕末～近代にかかる頃となるが、この時期の遺物は、生活雑器が中心で畠や水田を伴う一般的な家屋となったと思われる。

2. 中尾H遺跡（3区）

平成22年度に行った中尾H遺跡（1・2区）の調査では、縄文後期を中心に多くの縄文土器・石器が出土したが、中尾H遺跡（3区）の調査では、縄文時代の遺物はほとんど出土しなかった。今回の調査では、調査区北東側で古代の流路を検出しているが、それ以前の流路はより南側を流れていた可能性が高い。縄文時代の遺物を多く出土した中尾H遺跡（1・2区）が、南側に位置している事から、流路の右岸側（南側）に縄文時代の遺跡が位置し、左岸側（北側）までは広がっていなかったことが考えられる。

平成22年度の中尾H遺跡（1区）からは「石花」などと記された木簡が出土^(註3)し注目されている。「石花」は海産物のカメノテの事と考えられており、奈良時代の貢納物に付けられた荷札木簡と思われたことから、中尾H遺跡（3区）近隣で、そうした貢納物の集積を行なうような施設の発見が期待されたが、確認できなかった。

中尾H遺跡（3区）出土遺物の中心は、古墳時代後期から古代の須恵器・土師器で、須恵器环類や土師器甕、土製支脚や移動式竈などの供膳具・煮炊具が多く、手づくね土器が含まれている。こうした遺物相は、南側に隣接し、多数の加工段・建物跡を検出した市井深田遺跡^(註4)と同様であり、市井深田遺跡から流れ込んだ遺物が、相当量含まれていると考えられる。

ところで、古代の流路に遺跡南側に位置する市井深田遺跡からの遺物が流入しているとすると、その間にある中尾H遺跡（1・2区）で多量に見られた縄文土器が含まれていないのはどうしたことだろうか。今回の調査状況からは、古墳時代から古代には中尾H遺跡（3区）北側を川が流れていることが判った。この時、南側の市井深田遺跡の斜面が中尾H遺跡（3区）まで続いていた可能性があるが、それ以前の川は、より南側の中尾H遺跡（1・2区）近くを流れていた可能性がある。縄文時代の遺物包含層が埋められた後に中尾H遺跡（3区）付近に流路が移動したため、中尾H遺跡（3区）では縄文時代の遺物を含まないのではないか。

中尾H遺跡の北側は、中世以前は海が入り込んでいたと考えられる旧波根湖が広がっており、また、旧波根湖南岸から西岸にかけては石見東部有数の横穴墓密集地帯である。旧波根湖周辺には、それらに関わった人々の集落が展開していたはずで、中尾H遺跡周辺は、湾入していた旧波根湖や、大田町方面に繋がる古道などを背景に栄えていたことがうかがわれる。

〈註〉

- (1) 「2.一般国道9号（朝山大田道路）改築工事に伴う発掘調査」『島根県教育厅埋蔵文化財調査センター年報23』島根県教育厅埋蔵文化財調査センター 2015年
- (2) 小林俊二『石見六郡寺誌』石見地方未刊資料刊行会 2000年
- (3) 『門遺跡・高原遺跡I区・中尾H遺跡』島根県教育委員会 2013年
- (4) 『市井深田遺跡・荒槻遺跡・鈴見B遺跡1区』島根県教育委員会 2014年

第1表 旭山遺跡出土石器観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	計測値				石材
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
18 - 1	13	D3	灰褐色土	石製品	スクレイパー	残存 5.6	2.4	1.1	12.0	黒曜石
18 - 2	13	D4	灰褐色土	石製品	磨製石斧	残存 9.05	2.4	2.85	201.0	

第2表 旭山遺跡出土土器・陶磁器観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等	胎土(砂粒)	色調
19 - 13	1	D2	灰褐色土	須恵器	壺	(13.2)	8.0	(外)回転ナデ、回転糸切り? (内)回転ナデ、ナデ	1.5mm以下 (外) (内)	灰白 2.5Y 8/1 灰白 2.5Y 8/1
19 - 13	2	D3	灰褐色土	須恵器	高台付壺		(9.0)	(外)回転ナデ、静止糸切り (内)回転ナデ	1mm以下 (外) (内)	青灰 5B 6/1 青灰 5B 6/1
19 - 13	3	F1	灰褐色土	瓦	平瓦			(外)布目、ケズリ (内)罈目タタキ、離れ砂、ケズリ	1mm以下 (外) (内)	灰白 3Y 7/1 灰 7.5Y 6/1
19 - 13	4	G2	灰褐色土	瓦	平瓦			(外)磨滅のため不明 (内)磨滅のため不明	3mm以下 (外) (内)	橙 5YR 7/6 橙 5YR 7/6
20 - 14	1	D3	灰褐色土	土師器	高台付壺	7.0		(外)回転ナデ、回転糸切り? (内)回転ナデ	2mm以下 (外) (内)	浅黄褐 10YR 8/4 浅黄褐 10YR 8/4
20 - 14	2	D3	灰褐色土	土師器	高台付壺		(9.0)	(外)磨滅のため不明 (内)磨滅のため不明	2mm以下 (外) (内)	浅黄褐 10YR 8/3 浅黄褐 10YR 8/3
20 - 14	3	D4	灰褐色土	土師器	高台付壺		(8.2)	(外)磨滅のため不明 (内)磨滅のため不明	2mm以下 (外) (内)	浅黄褐 10YR 8/4 浅黄褐 10YR 8/4
20 - 14	4	D3	灰褐色土	土師器	高台付壺			(外)磨滅のため不明、赤色顔料 (内)磨滅のため不明	1.5mm以下 (外) (内)	浅黄褐 7.5YR 8/4 に赤い黄緑 10YR 7/3
21 - 15	1	D2	灰褐色土	土師器	かわらけ	(12.5)	6.3	(外)回転ナデ、糸切り? (内)回転ナデ	2mm以下 (外) (内)	淡黄 2.5Y 7/4 に赤い橙 5YR 7/4
21 - 16	2	D1	灰褐色土	土師器	皿		8.2	(外)ナデ、回転糸切り? (内)ナデ	2mm以下 (外) (内)	橙 7.5YR 7/6 橙 7.5YR 7/6
21 - 16	3	D3	灰褐色土	土師器	壺		5.8	(外)ナデ、回転糸切り? (内)ナデ	2.5mm以下 (外) (内)	橙 7.5YR 7/6 橙 7.5YR 7/6
21 - 16	4	E2	灰褐色土	土師器	皿		(8.0)	(外)磨滅のため不明 (内)磨滅のため不明	1mm以下 (外) (内)	橙 5YR 7/6 橙 5YR 7/6
21 - 16	5	D4	灰褐色土	土師器	皿		5.8	(外)磨滅のため不明 (内)磨滅のため不明	2mm以下 (外) (内)	浅黄褐 10YR 8/3 浅黄褐 10YR 8/3
21 - 16	6	Pit30		土師器	皿		(6.6)	(外)磨滅のため不明 (内)磨滅のため不明	1mm以下 (外) (内)	浅黄褐 10YR 8/3 浅黄褐 10YR 8/3
21 - 16	7	G1	灰褐色土	土師器	壺		(7.0)	(外)回転ナデ、回転糸切り (内)回転ナデ	密 (外) (内)	浅黄褐 10YR 8/3 浅黄褐 7.5YR 8/4
21 - 16	8	D4	灰褐色土	土師器	壺		(7.0)	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	1.5mm以下 (外) (内)	浅黄褐 10YR 8/3 灰白 10YR 8/2
21 - 16	9	D4	灰褐色土	土師器	皿		(6.4)	(外)磨滅のため不明 (内)磨滅のため不明	1mm以下 (外) (内)	灰黄 2.5Y 7/2 黒褐 2.5Y 3/1
21 - 16	10	Tr3	橙褐色土	土師器	壺 or 皿		(5.0)	(外)ナデ (内)ナデ	1mm以下 (外) (内)	浅黄褐 10YR 8/4 浅黄褐 10YR 8/4
21 - 15	11	D4	灰褐色土	土師器	かわらけ	(11.6)	4.2	(外)磨滅のため不明 (内)磨滅のため不明	1mm以下 (外) (内)	灰白 2.5Y 8/2 淡黄 2.5Y 8/3
21 - 17	12	G1	灰褐色土	土師器	壺		(4.8)	(外)回転糸切り (内)磨滅のため不明	密 (外) (内)	浅黄褐 10YR 8/4 浅黄褐 10YR 8/4
21 - 15	13	D4	灰褐色土	土師器	壺		5.8	(外)回転ナデ、回転糸切り、赤色顔料 (内)回転ナデ、赤色顔料	1mm以下 (外) (内)	浅黄褐 10YR 8/4 浅黄褐 7.5YR 8/6

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等	胎土(砂粒)	色調	
21 - 14	17	D3	灰褐色土	土師器	壺	(6.8)	(外) (内)	磨滅のため不明 磨滅のため不明	2mm以下 (外) (内)	浅黄橙 7.5YR 8/6 浅黄橙 7.5YR 8/4	
21 - 15	17	D4	灰褐色土	土師器	皿	(6.0)	(外) (内)	磨滅のため不明、黒色物 付着	0.5mm以下 (外) (内)	浅黄橙 10YR 8/3	
21 - 16	17	E3	灰褐色土	土師器	皿	(7.0)	(外) (内)	磨滅のため不明、煤痕	1mm以下 (外) (内)	に赤い黄橙 10YR 7/3	
21 - 17	17	SK01		土師器	皿	(6.6)	(外) (内)	磨滅のため不明 磨滅のため不明	1mm以下 (外) (内)	に赤い黄橙 10YR 7/4	
21 - 18	17	SK01		土師器	壺	(6.0)	(外) (内)	磨滅のため不明 磨滅のため不明	0.5mm以下 (外) (内)	黄橙 7.5YR 8/6 黄橙 7.5YR 8/6	
21 - 19	17	F2	灰褐色土	土師器	壺	5.0	(外) (内)	磨滅のため不明 磨滅のため不明	1.5mm以下 (外) (内)	9.0G 10YR 8/2 浅黄橙 10YR 8/3	
21 - 20	15	G2	灰褐色土	土師器	かわらけ	(12.2)	6.2	(外) (内)	回転ナデ、回転糸切り、 煤痕 回転ナデ、煤痕	1mm以下 (外) (内)	浅黄橙 7.5YR 8/6 浅黄橙 7.5YR 8/6
21 - 21	17	G1	灰褐色土	土師器	皿	(8.0)	(4.4)	(外) (内)	回転ナデ、回転糸切り、 煤痕 回転ナデ、煤痕	0.5mm以下 (外) (内)	浅黄橙 10YR 8/3 浅黄橙 10YR 8/4
21 - 22	17	D3	灰褐色土	土師器	皿		(4.4)	(外) (内)	回転ナデ、回転糸切り	1mm以下 (外) (内)	浅黄橙 7.5YR 8/6 浅黄橙 7.5YR 8/6
21 - 23	15	D3	灰褐色土	土師器	かわらけ	8.1	4.1	(外) (内)	磨滅のため不明 回転ナデ、煤痕、油分付着	1mm以下 (外) (内)	に赤い黄橙 10YR 7/2 に赤い黄橙 10YR 7/2
21 - 24	15	E3	灰褐色土	土師器	皿	(6.8)	(外) (内)	回転ナデ、煤痕 回転ナデ、煤痕	密 (外) (内)	浅黄橙 10YR 8/4 浅黄橙 10YR 8/4	
21 - 25	15	G1	灰褐色土	土師器	皿		(4.0)	(外) (内)	回転ナデ、回転糸切り 回転ナデ	0.5mm以下 (外) (内)	9.0G 10YR 8/2 に赤い黄橙 10YR 7/3
21 - 26	15	SK01	灰褐色土	土師器	皿		(3.4)	(外) (内)	磨滅のため不明 磨滅のため不明	1mm以下 (外) (内)	浅黄橙 7.5YR 8/3 浅黄橙 7.5YR 8/3
21 - 27	15	D3	灰褐色土	土師器	皿		4.8	(外) (内)	回転糸切り? 磨滅のため不明	1mm以下 (外) (内)	浅黄橙 10YR 8/4 浅黄橙 10YR 8/4
22 - 18	1	H2	灰褐色土	白磁	碗		(6.6)	(外) (内)	施釉 施釉、沈線	密 (外) (内)	9.0W 7.5Y 7/1 9.0W 7.5Y 7/1
22 - 18	2	C2	灰褐色土	青磁	碗	(17.6)	(外) (内)	施釉、雷文 施釉、花形のスタンプ文	密 (外) (内)	オリーブ黄 7.5Y 6/3 オリーブ黄 7.5Y 6/3	
22 - 18	3	E3・ G1	灰褐色土 檀褐色土	青磁	碗	(17.4)	(外) (内)	施釉 施釉	1mm以下 (外) (内)	オリーブ灰 10Y 5/2 オリーブ灰 10Y 5/2	
22 - 18	4	C3	明黄褐色土	青磁	碗		(外) (内)	施釉 施釉	密 (外) (内)	オリーブ灰 10Y 5/2 オリーブ灰 10Y 5/2	
22 - 18	5	D3	灰褐色土	青磁	碗		(5.6)	(外) (内)	施釉 施釉	密 (外) (内)	オリーブ灰 10Y 6/2 オリーブ灰 10Y 6/2
22 - 18	6	G1	灰褐色土	青磁	碗	(14.0)	(外) (内)	施釉、線描きの蓮弁文 施釉	密 (外) (内)	オリーブ灰 10Y 6/2 オリーブ灰 10Y 6/2	
22 - 18	7	E3	灰褐色土	灰青釉 陶器	小壺	(10.0)	(外) (内)	施釉 施釉	1mm以下 (外) (内)	灰7.5Y 6/1 灰7.5Y 6/1	
22 - 18	8	E2	灰褐色土	磁器	碗	(12.4)	(外) (内)	回青、透明釉、草花文 回青、透明釉、梅月文	密 (外) (内)	明暦灰 10GY 8/1 明暦灰 10GY 8/1	
22 - 18	9	D2	灰褐色土	磁器	碗	(14.0)	(外) (内)	回青、透明釉、蓮弁文 回青、透明釉、四方櫛文	密 (外) (内)	明暦灰 10GY 8/1 明暦灰 10GY 8/1	
22 - 18	10	D3	灰褐色土	磁器	皿?		(外) (内)	回青、透明釉、團線 回青、透明釉、團線	密 (外) (内)	9.0G 5GY 8/1 灰白 5GY 8/1	
22 - 18	11	C1	灰褐色土	磁器	皿?		(外) (内)	回青、透明釉、團線 回青、透明釉、團線	密 (外) (内)	9.0W 7.5Y 7/2 灰白 7.5Y 7/2	

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等		胎土(砂粒)	色調	
								(外)	(内)		(外)	(内)
22	18・12	D2	灰褐色土	磁器	碗			回青、透明釉、團線 回青、透明釉、團線	密 密	(外) (内)	明オリーブ灰 5GY 7/1 明オリーブ灰 5GY 7/1	
22	18・13	D2	灰褐色土	磁器	皿?			(外)回青、透明釉 (内)回青、透明釉	密 密	(外) (内)	灰白 5Y 8/2 灰白 5Y 8/2	
22	18・14	D3	灰褐色土	磁器	皿?			(外)回青、透明釉 (内)回青、透明釉	密 密	(外) (内)	明緑灰 7.5GY 3/1 明緑灰 7.5GY 3/1	
23	19	Pit51		瓦質土器	火鉢	(11.0)		(外)回転ナデ、ミガキ、沈線文、花形のスタンプ文 (内)回転ナデ	1mm以下	(外) (内)	灰 N 5/ 灰 N 5/	
23	20	SK01		瓦質土器	火鉢	(45.6)	(47.4)	(外)突帯文、花形のスタンプ文、ミガキ、ナデ (内)回転ナデ	1mm以下	(外) (内)	黄灰 2.5Y 4/1 黄灰 2.5Y 4/1	
23	19	D2・D4	灰褐色土 明黄色土	瓦質土器	火鉢	(36.4)		(外)突帯文、回転ナデ (内)回転ナデ	1mm以下	(外) (内)	灰 N 4/ 灰 5Y 4/1	
23	19	SK01		瓦質土器	火鉢	(23.0)		(外)突帯文、ナデ (内)ナデ	0.5mm以下	(外) (内)	灰 5Y 5/1 灰 5Y 5/1	
24	21	G1・H2	灰褐色土	陶器	丸皿	(11.2)		(外)灰釉 (内)灰釉	密	(外) (内)	灰白 7.5Y 8/2 灰白 7.5Y 8/2	
24	21	E2	灰褐色土	陶器	拙鉢			(外)2条の凹線文、回転ナデ (内)回転ナデ、描り目	0.5mm以下	(外) (内)	暗緑灰 SYR 4/2 暗緑灰 SYR 4/2	
24	21	E2	灰褐色土	陶器	底部		(12.0)	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	1mm以下	(外) (内)	暗緑灰 SYR 5/3 暗緑灰 SYR 6/1	
24	22	G1	灰褐色土	陶器	甕 or 盆			(外)カキメ、ナデ (内)ナデ	0.5mm以下	(外) (内)	オリーブ黒 7.5Y 3/1 暗オリーブ黒 2.5Y 3/3	
24	22	G1	灰褐色土	陶器	甕 or 盆			(外)ナデ (内)ナデ	1mm以下	(外) (内)	暗オリーブ黒 2.5Y 5/2	
24	22	Pit1		陶器	甕 or 盆			(外)カキメ (内)カキメ	1mm以下	(外) (内)	暗灰 N 3/ 黄灰 2.5Y 4/1	
24	22	E3	灰褐色土	陶器	甕 or 盆			(外)回転ナデ、ナデ? (内)回転ナデ	1mm以下	(外) (内)	暗灰黄 2.5Y 5/2 黄灰 2.5Y 4/1	
25	23	SK01		陶器	甕	(18.0)		(外)鉄釉、突帯文、タタキのちナデ (内)同心円の押えのちナデ	密	(外) (内)	黒褐 7.5YR 3/2 黒褐 7.5YR 3/2	
25	23	F2	灰褐色土	陶器	片口	(14.0)		(外)灰釉、ナデ、回転ナデ、ケズリ (内)灰釉、回転ナデ、ケズリ	密	(外) (内)	灰黄 2.5Y 6/2 灰黄 2.5Y 6/2	
25	23	Tr8		陶器	丸形 碗	(12.8)		(外)呉須、透明釉、團線 (内)透明釉	密	(外) (内)	灰白 10Y 7/1 灰白 10Y 7/1	
25	23	Tr6	灰黄色土	陶器	丸形 碗	(12.2)		(外)呉須、透明釉、團線 (内)透明釉	密	(外) (内)	灰オリーブ 7.5Y 6/2 灰オリーブ 7.5Y 6/2	
25	23	D1	灰褐色土	陶器	半球 碗			(外)透明釉 (内)透明釉、色絵(緑) 笹文	密	(外) (内)	灰白 10Y 9/1 灰白 10Y 9/1	
25	23	SK01		陶器	丸形 碗		(5.8)	(外)呉須、透明釉、釉剥ぎ (内)透明釉、山水文	密	(外) (内)	灰白 7.5Y 7/2 灰白 7.5Y 7/2	
25	23	F2	明黄色土	陶器	片口	(14.4)		(外)灰釉、回転ナデ (内)灰釉、回転ナデ	密	(外) (内)	浅黄 5Y 7/3 浅黄 5Y 7/3	
25	23	G3	明黄色土	磁器	端反 形碗	(10.2)	(3.8)	(外)透明釉、梅花文(化学コバルト)、釉剥ぎ (内)透明釉	密	(外) (内)	灰白 7.5Y 8/1 灰白 7.5Y 8/1	
25	23	SK01		陶器	鉢?		5.4	(外)薺灰釉、釉剥ぎ (内)薺灰釉	密	(外) (内)	灰白 10Y 7/1 灰白 10Y 7/1	
25	24	表採		磁器	小丸 碗	(7.4)	(3.6)	(外)呉須、透明釉、区別菊花文 (内)透明釉	密	(外) (内)	灰白 10Y 9/1 灰白 10Y 9/1	

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等	胎土(砂粒)	色調
25 - 11	24	SD01		磁器	皿		(7.8)	(外) (内) 吳須、透明釉、山水文	密 (外) (内)	灰白 N 8/ (内) 灰白 N 8/
25 - 12	24	F2	灰褐色土	磁器	広東碗		(5.8)	(外) (内) 吳須、透明釉、團線、山	密 (外) (内)	灰白 10Y 9/1 (内) 灰白 10Y 9/1
25 - 13	24	F2	灰褐色土	磁器	端反形碗	(12.0)	(4.8)	(外) (内) 吳須、透明釉、團線、海	密 (外) (内)	灰白 N 8/ (内) 灰白 N 8/
25 - 14	24	F1	明黄褐色土	磁器	端反形碗		4.2	(外) (内) 吳須、透明釉、團線、唐 花文、釉剥ぎ	密 (外) (内)	明暦灰 7.5GY 8/1 (内) 明暦灰 7.5GY 8/1
25 - 15	24	G1	灰褐色土	磁器	端反形碗蓋	(9.0)		(外) (内) 吳須、透明釉、唐花文、 吳須、透明釉、雪輪崩し 文	密 (外) (内)	灰白 10Y 9/1 (内) 灰白 10Y 9/1
25 - 16	24	F3	明黄褐色土	磁器	筒丸形碗	(7.0)		(外) (内) 吳須、透明釉、繩目文、 透明釉	密 (外) (内)	明暦灰 7.5GY 8/1 (内) 明暦灰 7.5GY 8/1
25 - 17	24	E3	灰褐色土	磁器	端反形碗	(10.8)	(2.6)	(外) (内) 吳須、透明釉、格子文、 吳須、透明釉、團線	密 (外) (内)	灰白 2.5GY 8/1 (内) 灰白 2.5GY 8/1
25 - 18	24	H2	灰褐色土	磁器	紅皿	(4.8)	(1.6)	(外) (内) 透明釉、貝殻文 透明釉	密 (外) (内)	灰白 N 8/ (内) 灰白 N 8/
26 - 1	25	F2	灰褐色土	陶器	壺	(19.2)	8.0	(外) (内) 鉄釉、沈線文、ケズリ 鉄釉	密 (外) (内)	にぶい赤褐 5YR 5/3 にぶい赤褐 5YR 5/3
26 - 2	25	F2	灰褐色土	磁器	広東碗	(11.6)	(5.6)	(外) (内) 吳須、透明釉、團線、葉 文、釉剥ぎ	密 (外) (内)	灰白 N 8/ (内) 灰白 N 8/
26 - 3	25	E1	灰褐色土	磁器	端反形碗		4.2	(外) (内) 吳須、透明釉、草花文、 釉剥ぎ 透明釉	密 (外) (内)	灰白 N 8/ (内) 灰白 N 8/
26 - 4	25	E4	明黄褐色土	陶器	土瓶蓋	(10.8)	(5.6)	(外) (内) 灰釉 露胎	密 (外) (内)	オリーブ質 7.5Y 6/3 灰白 5Y 7/2
26 - 5	26	F2	灰褐色土	陶器	行平	(19.8)		(外) (内) 鉄釉、飛びカンナ 鉄釉	密 (外) (内)	灰青 2.5Y 8/3 灰青 2.5YR 4/2 (内) 灰青 2.5YR 4/2
26 - 6	26	E1	灰褐色土	陶器	捏鉢	(35.2)	(11.6)	(外) (内) 灰釉、ケズリ 灰釉、沈線	密 (外) (内)	灰白 2.5Y 7/2 灰オリーブ 5Y 6/2 (内) 灰白 2.5Y 7/2 灰オリーブ 5Y 6/2
26 - 7	26	東 Tr		陶器	擂鉢	(35.6)		(外) (内) 来待釉 来待釉、拂り目	密 (外) (内)	灰褐 5YR 5/2 (内) 灰褐 5YR 5/2
26 - 8	26	E1	明黄褐色土	窯道具	ハリ	長さ 4.6	最大幅 2.0	(外) 手捏ね？来待釉付着	密	にぶい赤褐 5YR 5/3

第3表 旭山遺跡出土石製品観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	計測値				石材
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
27 1 27	SKO1			石製品	石臼			(7.5)	3460.0	
27 2 27	E1	灰褐色土	石製品	甌					5640.0	
27 3 27	G2	灰褐色土	石製品	石塔宝瓶印塔相輪部?		残存(17.1)	14.5	(13.3)	2800.0	凝灰岩
27 4 27		表採	石製品	石塔		残存(26.4)	10.8		3389.0	

第4表 旭山遺跡出土金属器観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	計測値				重さ(g)
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
28 1 28	G2	灰褐色土	鉄・銅製品	小柄?		残存 14.2 + 1.7	1.7	0.6		
28 2 28	E2	灰褐色土	鉄製品	刀子(中子)		残存 5.6	2.2	0.7	18.9	
28 3 28	G1	灰褐色土	鉄製品	小柄?		残存 4.5	1.5	0.7	24.0	
28 4 28	B2	黄褐色土	鉄製品	盤?		残存 7.8	4.0	2.1	157.3	
28 5 28	D1	灰褐色土	鉄製品	小型の鋼		14.0(13.2)			47.3	

第5表 旭山遺跡出土古錢観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	名称	寸法(cm)						重さ(g)	
						a	b	c	d	e	f		
29 1 28	E2	灰褐色土	古錢	天元通寶	2.44	2.44	2.02	2.01	0.825	0.825	0.105	1.9	
29 2 28	G3	灰褐色土	古錢	寛永通寶	2.28	2.32	1.9	1.9	0.79	0.79	0.1	1.9	
29 3 28	Tr7	稻褐色土	古錢	寛永通寶							0.51	0.1	
29 4 28	E3	灰褐色土	古錢	寛永通寶	2.2	2.2	1.84	1.84	0.78	0.8	0.1	1.2	
29 5 28	F2	灰褐色土	古錢	銅錢	(2.14)	(2.04)						0.145	2.3
29 6 28	Tr8	表土	古錢	十錢銅貨	2.25	2.25	2.2	2.15				0.1	3.6
29 7 28	G3	明黃褐色土	古錢	銅錢									2.6

第6表 旭山遺跡(古道)出土陶磁器観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等			胎土 (砂粒)	色調
								(外) (内)	施釉、陶体染付 施釉	密		
35 1 27	Tr1			陶器	碗	(15.4)					(外) (内)	オリーブ灰 10Y 6/2 オリーブ灰 10Y 6/2
35 2 27	Tr1			磁器	碗	(9.6)					(外) (内)	明暦灰 7.5GY 8/1 明暦灰 7.5GY 8/1

第7表 中尾H遺跡(3区)出土石器観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	取上No	種別	器種	計測値				石材
							長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	
41 3 33	B1	青灰色砂質土			磨製石器		(11.3)	(4.6)	(2.55)	(222.5)	

第8表 中尾H遺跡(3区)出土木製品観察表

Fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	計測値			木取り
					長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	
42 50	B6	青灰色砂質土	馬糞・田下駄?		29.6	3.9	1.3	柾目

第9表 中尾H遺跡(3区)出土土器・陶磁器観察表

Fig.	図版番号	出土場所	出土層位	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	調査及び文様等	胎土(砂粒)	色調
41-1	33	B6	青灰色砂質土	陶文器	深鉢			(外) 工具によるナデ (内) 二枚貝条痕	2mm以下	(外) にぶい黄粒 10YR 6/3 (内) にぶい黄粒 10YR 6/3
41-2	33	B4	暗青灰色粘質土	陶生土器	壺?	3.4		(外) ナデ (内) ナデ	2mm以下	(外) にぶい黄粒 10YR 7/4 (内) にぶい黄粒 10YR 7/4
43-1	34	B2	暗青灰色粘質土	土師器	壺	(13.2)		(外) ナデ (内) ナデ	3mm以下	(外) にぶい黄粒 10YR 6/6 (内) にぶい黄粒 10YR 6/4
43-2	34	B3	青灰色砂質土	土師器	鉢	(13.4)		(外) ナデ (内) ナデ	3mm以下	(外) にぶい橙 7.5YR 6/4 (内) にぶい橙 7.5YR 6/4
43-3	34	A6	青灰色砂質土	土師器	高环			(外) ナデ、ハケヌ、赤色顔料 (内) ナデ	6mm以下	(外) にぶい黄粒 10YR 6/4 (内) にぶい黄粒 10YR 6/4
43-4	34	B6	青灰色砂質土	土師器	高环			(外) ナデ (内) ナデ、ヘラケズリ	3mm以下	(外) にぶい黄粒 10YR 7/3 (内) にぶい黄粒 10YR 7/3
43-5	34	B2	青灰色砂質土	土師器	白付鉢?	8.0		(外) ナデ、赤色顔料? (内) ナデ	6mm以下	(外) 明黄褐 10YR 6/6 (内) 明黄褐 10YR 6/6
43-6	34	B3	青灰色砂質土	土師器	高环			(外) ナデ (内) ナデ	2mm以下	(外) にぶい黄 2.5Y (内) にぶい黄 2.5Y
43-7	49	A5	暗青灰色粘質土	土師器	手捏ね土 沿 跡	5.7	高径 4.6	(外) ナデ (内) ナデ	3mm以下	(外) にぶい黄粒 10YR 6/4 (内) にぶい黄粒 10YR 6/4
43-8	35	B5	青灰色砂質土	土師器	壺	(27.0)		(外) ナデ (内) ナデ、ケズリ	5mm以下	(外) にぶい黄粒 10YR 6/4 (内) にぶい橙 7.5YR 6/4
43-9	35	C4	青灰色砂質土	土師器	壺	(25.0)		(外) ナデ? (内) ナデ?、ケズリ?	5mm以下	(外) 浅黄 2.5Y 5/1 灰白 5Y 7/2
43-10	35	C4	青灰色砂質土	土師器	壺	(24.4)		(外) ヨコナデ (内) ヨコナデ、ケズリ	2mm以下	(外) にぶい黄 7.5YR (内) にぶい黄 7.5YR
43-11	35	B5	青灰色砂質土	土師器	壺	(18.4)		(外) ナデ (内) ナデ、ケズリ	密	(外) にぶい黄粒 10YR 7/2 (内) にぶい黄粒 10YR 7/3
43-12	35	B4	暗青灰色粘質土	土師器	壺	(18.0)		(外) ナデ? (内) ナデ?、ケズリ、保塗	3mm以下	(外) 浅黄 2.5Y 7/4 (内) 灰黄 2.5Y 7/2
43-13	35	B4	暗青灰色粘質土	土師器	壺	(18.0)		(外) ナデ? (内) ナデ?、ケズリ?	密	(外) にぶい黄粒 10YR 6/3 (内) にぶい橙 7.5YR 6/4
43-14	35	B5	青灰色砂質土	土師器	壺?	(27.6)		(外) ヨコナデ、保塗 (内) ナデ?、ケズリ?	5mm以下	(外) 暗 7.5YR 4/3 (内) 明赤褐 5YR 5/6
44-1	36	B4	青灰色粘質土	土師器	壺	(25.4)		(外) ヨコナデ、ナデ (内) ヨコナデ、ケズリ	4mm以下	(外) にぶい橙 7.5YR 6/4 (内) 浅黄 2.5Y 7/3
44-2	36	A6	青灰色砂質土	土師器	壺	(18.8)		(外) ヨコナデ、ハケヌ (内) ヨコナデ、ケズリ	密	(外) にぶい黄粒 10YR 5/3 (内) にぶい黄粒 10YR 5/3
44-3	36	C5	青灰色砂質土	土師器	壺	(17.6)		(外) ナデ? (内) ナデ?ケズリ?	密	(外) にぶい黄粒 10YR 7/4 (内) にぶい黄粒 10YR 5/3
44-4	36	A3	青灰色粘質土	土師器	壺	(18.2)		(外) ナデ、保塗? (内) ナデ?、ケズリ、黒変	密	(外) にぶい黄粒 10YR 6/4 (内) にぶい黄 7.5YR 6/4
44-5	36	A6	青灰色砂質土	土師器	壺	(23.0)		(外) 保塗のため不明 (内) ケズリ	4mm以下	(外) 浅黄褐 10YR 4/7 (内) にぶい黄褐 10YR 5/3
44-6	36	B5	青灰色砂質土	土師器	壺	(24.0)		(外) ヨコナデ (内) ヨコナデ	2mm以下	(外) 浅黄褐 10YR 6/2 (内) にぶい黄褐 10YR 6/3
44-7	37	B4	暗青灰色粘質土	土師器	壺	(15.0)		(外) ナデ、保塗? (内) ナデ、ケズリ	密	(外) にぶい黄褐 10YR 5/4 (内) にぶい橙 7.5YR 6/4
44-8	37	B6	青灰色砂質土	土師器	壺	(21.2)		(外) ヨコナデ、口縁部に保塗 (内) ヨコナデ、ケズリ	5mm以下	(外) にぶい黄粒 10YR 6/3 (内) にぶい黄粒 10YR 6/3
44-9	37	A5	暗青灰色粘質土	土師器	壺	(23.6)		(外) ナデ、脚部に赤色顔料? (内) ナデ、ケズリ	3mm以下	(外) 浅黄 2.5YR 6/2 (内) 明赤褐 5YR 5/6

Fig	国際番号	出土場所	出土層位	種別	断面	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等			胎土(砂粒)	色調
								(外)	(内)	(外)		
44 - 10	37	C5	青灰色砂質土	土師器	廣	(19.2)		(外) ナデ、ハケメ (内) ナデ、ケズリ	4mm以下	(外) にぶい黄橙 10YR 6/4 (内) にぶい黄橙 10YR 7/3		
44 - 11	37	C4	青灰色砂質土	土師器	廣	(23.2)		(外) ナデ (内) ナデ?	2mm以下	(外) にぶい黄 2.5Y 6/4 (内) にぶい黄 2.5Y 6/4		
45 - 1	50	A2	青灰色粘質土	土師器	撇・把手			(外) ナデ、ハケメのちナデ、保 留	1mm以下	(外) にぶい黄橙 10YR 6/3 (内) にぶい黄橙 10YR 6/3		
45 - 2	50	B2	青灰色砂質土	土師器	撇・把手			(外) ナデ (内) 剥離のため不明	1mm以下	(外) にぶい黄橙 10YR 6/3 (内) にぶい黄橙 10YR 6/3		
45 - 3	50	B4	青灰色砂質土	土師器	撇・把手			(外) ナデ (内) ケズリ?	2mm以下	(外) 淡黄 2.5Y 7/3 (内) にぶい黄橙 10YR 7/4		
45 - 4	50	A4	青灰色砂質土	土師器	撇・把手			(外) ナデ。燒熱を受ける?	5mm以下	(外) にぶい褐 7.5YR 5/4 (内) にぶい褐 7.5YR 5/4		
45 - 5	50	C2	青灰色砂質土	土師器	撇・把手			(外) ナデ、保 留	1mm以下	(外) 淡黄 2.5Y 7/4 (内) 保 7.5YR 7/6		
45 - 6	50	C2	青灰色砂質土	土師器	撇・把手			(外) ナデ (内) ハラケズリ	1mm以下	(外) 保 7.5YR 6/6		
45 - 7	50	A5	青灰色砂質土	土師器	撇・把手			(外) ナデ、保 留?	1mm以下	(外) にぶい褐 7.5YR 7/3 (内) にぶい褐 7.5YR 7/3		
45 - 8	50	A6	青灰色砂質土	土師器	撇・把手			(外) ナデ (内) ナデ	5mm以下	(外) 明暗 7.5YR 5/6 (内) にぶい褐 7.5YR 5/6		
46 - 1	38	A3	暗青灰色砂質 土	土師器	撇?	(26.0)		(外) 剥離のため不明 (内) ケズリ	3mm以下	(外) にぶい褐 7.5YR 7/4 (内) にぶい褐 7.5YR 7/4		
46 - 2	38	B6	青灰色砂質土	土師器	撇?	(15.4)		(外) ナデ。指頭圧痕 (内) ケズリ	3mm以下	(外) 暗灰黄 2.5Y 5/2 (内) にぶい黄橙 10YR 6/3		
46 - 3	38	C5	青灰色砂質土	土師器	移動式竪	(23.1)		(外) ナデ。指頭圧痕 (内) 日コナデ、ケズリ	3mm以下	(外) にぶい黄橙 10YR 7/2 (内) にぶい褐 7.5YR 6/4		
46 - 4	38	B5	青灰色粘質土	土師器	移動式竪	(29.0)		(外) ナデ (内) ナデ	5mm以下	(外) 保 7.5YR 6/6 (内) 明暗 5YR 5/6		
46 - 5	38	B6	青灰色砂質土	土師器	移動式竪			(外) ナデ?、保 留	1mm以下	(外) 黑褐 10YR 3/2 (内) にぶい黄橙 10YR 7/2		
46 - 6	39	A3	青灰色砂質土	土師器	移動式竪			(外) ナデ (内) ハラケズリ	4mm以下	(外) 保 2.5Y 6/6 (内) にぶい褐 5YR 6/4		
46 - 7	39	E1	暗青灰色粘質 土	土師器	移動式竪			(外) 縦方向のナデ (内) ケズリ	5mm以下	(外) にぶい黄橙 10YR 7/3 (内) 明暗 5YR 5/6		
46 - 8	39	B4	青灰色砂質土	土師器	移動式竪			(外) ナデ (内) ケズリ	4mm以下	(外) 保 5YR 6/6 (内) 保 5YR 6/6		
46 - 9	39	B6	青灰色砂質土	土師器	移動式竪			(外) ナデ、ハケメ (内) ケズリのちナデ	1mm以下	(外) にぶい褐 7.5YR 6/4 (内) にぶい黄橙 10YR 6/4		
46 - 10	40	D3	青灰色粘質土	土製品	土製支脚			(外) ナデ。指頭圧痕	2mm以下	(外) 明小褐 2.5YR 5%		
46 - 11	40	B5	青灰色砂質土	土製品	土製支脚			(外) ナデ。指頭圧痕	2mm以下	(外) にぶい褐 7.5YR 5/4 (内) にぶい褐 7.5YR 5/4		
46 - 12	40	B5	青灰色砂質土	土製品	土製支脚			(外) 指頭圧痕、ナデ (内) ケズリ、ナデ	4mm以下	(外) にぶい黄橙 10YR 6/4 (内) 保 7.5YR 7/6		
46 - 13	40	B4	青灰色砂質土	土製品	土製支脚			(外) ナデ、保 留	2mm以下	(外) 明暗 7.5YR 5/6 (内) 明暗 7.5YR 5/6		
46 - 14	40	B3	青灰色砂質土	土製品	土製支脚			(外) 保ナデ (内) ケズリ	2mm以下	(外) 明小褐 5/2 5/6 (内) にぶい褐 7.5YR 5/6		
46 - 15	41	C6	青灰色砂質土	土製品	土製支脚			(外) ナデ? (内) ナデ	1mm以下	(外) 明小褐 5YR 5/6 (内) にぶい褐 5YR 5/6		
46 - 16	41	A6	青灰色砂質土	土製品	土製支脚			(外) ナデ。指頭圧痕 (内) ナデ	3mm以下	(外) 保 5YR 6/6 (内) 保 7.5YR 7/6		
46 - 17	41	B4	青灰色砂質土	土製品	土製支脚			(外) ナデ (内) ケズリ?	1mm以下	(外) 淡黄 2.5Y 7/4 (内) 保 7.5YR 7/6		
46 - 18	41	B4	青灰色砂質土	土製品	土製支脚			(外) ナデ (内) ナデ	1mm以下	(外) にぶい褐 7.5YR 6/4 (内) にぶい褐 7.5YR 6/4		
46 - 19	41	A6	青灰色砂質土	土製品	土製支脚			(外) ナデ (内) ハラケズリ	2mm以下	(外) にぶい褐 7.5YR 6/4 (内) にぶい褐 7.5YR 6/4		

Fig	固地番号	土質	頂面層位	種別	基種	口徑(cm)	底径(cm)	調整及び文様等	粘土(砂粒)	色調
47- 1	42	B4	青灰色砂質土	調査器	蓋	(10.2)		(外) 回転ケズリ、回転ナデ (内) 回転ナデ	黒	(外) 黄 7.5Y 6/1 (内) 黄 7.5Y 6/1
47- 2	42	D5	暗青灰色粘質土	調査器	蓋	(9.6)		(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	黒	(外) 黄白 N 7/ (内) 黄白 N 7/
47- 3	42	B1	暗青灰色粘質土	調査器	环	8.8	高さ 2.8	(外) 回転ナデ、ヘラケズリ (内) 回転ナデ、ナデ	1mm以下	(外) 黄 N 6/ (内) 黄 N 6/
47- 4	42	B4	青灰色砂質土	調査器	环			(外) ヘラケズリ (内) 回転ナデ、ナデ	1mm以下	(外) 黄 5Y 6/1 (内) 黄 5Y 6/1
47- 5	42	C2	青灰色砂質土	調査器	高环			(外) 回転ナデ (内) ナデ、回転ナデ	2mm以下	(外) 黄白 N 7/ (内) 黄白 N 7/
47- 6	42	A5	青灰色砂質土	調査器	高环			(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ、ナデ	1mm以下	(外) 青灰 6/1 5B (内) 青灰 6/1 5B
47- 7	42	D2	青灰色砂質土	調査器	高环			(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	1mm以下	(外) オリーブ灰 黄灰 5/1 5B (内) 黄灰 5/1 5B
47- 8	42	C4	青灰色砂質土	調査器	高环	底径 (7.8)		(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	黒	(外) 黄 7.5Y 5/1 (内) 黄 7.5Y 5/1
47- 9	42	B6	青灰色砂質土	調査器	高环			(外) 回転ナデ (内) ナデ、回転ナデ	1mm以下	(外) 黄白 N 8/ (内) 黄白 N 8/
47- 10	43	B3	青灰色砂質土	調査器	高环	底径 (11.0)		(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	黒	(外) 黄白 N 7/ (内) 黄白 N 7/
47- 11	49	A5	暗青灰色粘質土	調査器	高环	底径 9.6		(外) ナデ (内) ナデ	2mm以下	(外) 黄白 5Y 7/1 (内) 黄白 5Y 7/1
47- 12	43	C6	青灰色砂質土	調査器	輪付つまみ付蓋			(外) 回転ヘラケズリ、回転ナデ (内) ナデ	1mm以下	(外) 青灰 5B 6/1 (内) 青灰 5B 6/1
47- 13	43	D6	黄茶褐色粘質土	調査器	輪付つまみ付蓋			(外) ナデ (内) ナデ	0.5mm以下	(外) 黄白 N 7/ (内) 黄白 N 7/
47- 14	43	B6	暗青灰褐色砂質土	調査器	輪付つまみ付蓋			(外) 回転ナデ、自然軸 (内) ナデ	1mm以下	(外) 黄白 7.5Y 7/1 (内) 黄白 7.5Y 7/1
47- 15	43	B4	暗青灰色粘質土	調査器	輪付つまみ付蓋			(外) 回転ケズリ、回転ナデ (内) 回転ナデ	1mm以下	(外) 黄 N 5/ (内) 黄 N 5/
47- 16	43	C6	青灰色砂質土	調査器	蓋	(12.6)		(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ	2mm以下	(外) 黄 N 5/ (内) 黄 N 5/
47- 17	43	E3	青灰色砂質土	調査器	蓋			(外) 回転ケズリのちナデ、回転ナデ (内) ナデ、回転ナデ	1mm以下	(外) 黄 N 6/ (内) にふく黄橙 10YR 6/3
47- 18	43	B4	青灰色砂質土	調査器	环	(12.8)	(7.9)	(外) 回転ナデ、手切りのちナデ (内) 回転ナデ	1mm以下	(外) 黄 N 6/ (内) 黄 N 6/
47- 19	44	C1	黄茶褐色粘質土	調査器	环	(9.2)		(外) 回転ナデ、回転ヘラ切りのちナデ (内) 回転ナデ	1mm以下	(外) オリーブ灰 黄 2.5Y 7/1 (内) オリーブ灰 2.5GY 7/1
47- 20	44	A6	青灰色砂質土	調査器	环	(10.0)		(外) 回転ナデ、回転系切りのちナデ (内) 回転ナデ、ナデ	1mm以下	(外) 黄 6/ N (内) 黄 N 6/
47- 21	44	B4	青灰色砂質土	調査器	环	(9.0)		(外) 回転ナデ、ナデ (内) 回転ナデ、ナデ	1mm以下	(外) 黄白 7.5Y 7/1 (内) 黄白 7.5Y 7/1
47- 22	44	C5	青灰色砂質土	調査器	环	(8.6)		(外) ナデ、静止系切り (内) ナデ	1mm以下	(外) 黄白 5Y 8/1 (内) 黄白 5Y 8/1
47- 23	44	A6	青灰色砂質土	調査器	环	(5.0)		(外) 回転ナデ、静止系切り (内) 回転ナデ	1mm以下	(外) 黄白 2.5Y 8/1 (内) 黄白 2.5Y 8/1
47- 24	44	B6	青灰色砂質土	調査器	环	(14.2)	(10.8)	(外) 回転ナデ、ヘラ切り (内) 回転ナデ	1mm以下	(外) 黄白 7.5Y 7/1 (内) 黄白 7.5Y 7/1
47- 25	44	C1	暗青灰色粘質土	調査器	环	(8.8)		(外) 回転ナデ、静止系切り (内) 回転ナデ	1mm以下	(外) 黄 N 5/ (内) 黄 N 5/
47- 26	44	B5	青灰色砂質土	調査器	环	(11.0)		(外) ナデ、手切り (内) ナデ	1mm以下	(外) 黄 N 5/ (内) にふく黄橙 10YR 5/1
47- 27	44	B5	青灰色砂質土	調査器	环	(9.4)		(外) ナデ、回転系切りのちナデ (内) ナデ	2mm以下	(外) 黄白 5Y 8/1 (内) 黄白 5Y 8/1
48- 1	45	B5	青灰色砂質土	調査器	高台付环	10.4		(外) 回転ナデ、ヘラ切りのち (内) 回転ナデ	4mm以下	(外) 黄白 N 8/ (内) 黄 N 6/
48- 2	45	A3	黄茶褐色粘質土	調査器	高台付环	(8.0)		(外) 回転ナデ (内) 回転ナデ、ナデ	1mm以下	(外) 黄 N 4/ 黄白 N 7/ (内) 黄白 N 7/
48- 3	45	E4	青灰色粘質土	調査器	高台付环	(9.4)		(外) ナデ (内) ナデ	2mm以下	(外) 黄白 10Y 9/1 (内) 黄白 10Y 9/1
48- 4	45	B5	青灰色砂質土	調査器	高台付环	(8.0)		(外) ナデ、回転系切りのちナデ (内) ナデ	1mm以下	(外) 黄 N 6/ 黄 N 5/ (内) 黄 N 6/
48- 5	45	B6	青灰色砂質土	調査器	?	(9.1)		(外) 回転ナデ、回転ヘラ切り (内) ナデ、自然軸	1mm以下	(外) 黄 N 6/1 (内) 黄 N 6/1
48- 6	45	B6	青灰色砂質土	調査器	高台付环	8.5		(外) 回転ナデ、静止系切り (内) 回転ナデ、ナデ	2mm以下	(外) 黄 N 5/ (内) 黄 N 6/
48- 7	45	C6	青灰色砂質土	調査器	高台付环	(8.0)		(外) ナデ、手切り (内) 回転ナデ、ナデ	1mm以下	(外) 黄 N 5/ (内) 黄 7.5Y 5/1

Fig	開版番号	出土地点	出土層位	種別	断面	口径(cm)	底径(cm)	調整及び文様等		胎土(砂粒)	色調	
								(外)	(内)			
48 - 8	45	F2	黄茶褐色粘質土	直底盤	高台付环		(11.6)	(95) (内)	ナデ ナデ	3mm以下	灰白 N 7/ (内)	灰白 N 7/
48 - 9	45	B3	耕作土	直底盤	高台付环		(7.4)	(95) (内)	ナデ ナデ、回転糸 ナデ	1mm以下	灰白 N 7/ (内)	灰白 N 7/
48 - 10	45	B4	青灰色砂質土	直底盤	高台付环		(6.9)	(95) (内)	ナデ ナデ、回転糸切りの ナデ	密	(外) 灰 N 5/ (内)	灰白 N 7/
48 - 11	46	B4	青灰色砂質土	直底盤	高台付环		(8.0)	(95) (内)	回転ナデ ナデ	1mm以下	(外) 灰 N 4/ (内)	灰白 N 8/1
48 - 12	49	B4	暗青灰色粘質土	直底盤	高台付环	17.8	12.5	(95) (内)	回転ナデ、ナデ、静止糸 ナデ	1mm以下	(外) 灰白 7.5Y 8/1 (内)	灰白 7.5Y 8/1
48 - 13	46	D6	青灰色砂質土	直底盤	环	(16.2)		(95) (内)	回転ナデ 回転ナデ	1mm以下	(外) 灰 N 6/ (内)	灰白 N 6/
48 - 14	47	B4	青灰色砂質土	直底盤	長頭瓶	11.0		(95) (内)	回転ナデ 回転ナデ	4mm以下	(外) 灰白 10R 5/1 (内)	灰白 N 6/
48 - 15	47	B4・ B5	青灰色砂質土	直底盤	長頭瓶		(12.8)	(95) (内)	回転ナデ	4mm以下	(外) 灰 5Y 5/1、灰白 10R 6/1 (内)	灰白 N 6/
48 - 16	45	C6	青灰色砂質土	直底盤	瓶		(8.1)	(95) (内)	ナデ、ハケメ ナデ	1mm以下	(外) 灰白 N 7/ (内)	灰白 N 7/
48 - 17	46	D6	暗青灰色粘質土	直底盤	瓶		(8.6)	(95) (内)	回転ナデ、糸切りのちナ ナデ	密	(外) 灰白 N 7/ (内)	灰白 N 7/
48 - 18	46	C4	暗茶褐色粘質土	直底盤	瓶		(6.6)	(95) (内)	ナデ ナデ	1mm以下	(外) 灰 N 6/1 (内)	灰白 N 6/1
49 - 1	48	B4	青灰色砂質土	直底盤	瓶	(10.0)		(95) (内)	回転ナデ 回転ナデ	5mm以下	(外) 灰 N 6/ (内)	灰白 N 6/
49 - 2	48	B4	青灰色砂質土	直底盤	瓶	(16.0)		(95) (内)	回転ナデ 回転ナデ	1mm以下	(外) 灰白 N 7/ (内)	灰白 N 7/
49 - 3	48	A4	青灰色砂質土	直底盤	瓶		(21.4)	(95) (内)	ナデ ナデ	1mm以下	(外) 灰白 5Y 8/1 (内)	灰白 5Y 8/1
49 - 4	48	C3	黄茶褐色粘質土	直底盤	短頭瓶	(10.4)		(95) (内)	回転ナデ 回転ナデ、自然輪	1mm以下	(外) 灰白 N 6/1 (内)	灰白 N 7/
49 - 5	48	C4	青灰色砂質土	直底盤	瓶		(16.6)	(95) (内)	回転タキ、ナデ 回転タキ	2mm以下	(外) 灰白 7.5Y 7/1 (内)	灰白 7.5Y 7/1
49 - 6	48	B5	青灰色砂質土	直底盤	瓶			(95) (内)	回転ナデ、自然輪 回転ナデ	1mm以下	(外) 灰白 N 7/1 オリーブ灰 2.5G Y 5/1	
50 - 1	50	C5	青灰色砂質土	土師瓶	环		(6.2)	(95) (内)	ナデ ナデ	2mm以下	(外) 灰黄褐 10YR 6/2 (内)	灰黄褐 10YR 6/2
50 - 2	50	C6	青灰色砂質土	磁瓶	白磁瓶			(95) (内)	輪輪	密	(外) 灰白 5Y 7/2 (内)	灰白 5Y 7/2
50 - 3	50	E2	暗青灰色粘質土	磁瓶	青磁瓶	(12.7)		(95) (内)	輪輪	密	(外) 灰白 7.5Y 7/1 (内)	灰白 7.5Y 7/1
51	49	D3	暗青灰褐色砂質土	磁瓶	端面彫	(9.8)		(95) (内)	透明輪、花透草文 透明輪、雷文	密	(外) 灰白 7.5Y 8/1 (内)	灰白 7.5Y 8/1

第10表 中尾H遺跡(3区)出土古錢觀察表

Fig	開版番号	出土地点	出土層位	種別	名称	口径(cm)	a	b	c	d	e	f	重積(g)	
													g	h
52	49	表土	古錢	唐水道質		2.5	2.54	1.94	1.94	0.71	0.71	0.15	2.8	

写 真 図 版



旭山遺跡調査前近景（西から）



旭山遺跡全景（東から）

図版2 旭山遺跡



旭山遺跡全景（西から）



旭山遺跡完掘状況（南から）



旭山遺跡作業風景（東から）



旭山遺跡西壁土層堆積状況（東から）



旭山遺跡東壁土層堆積状況（西から）



旭山遺跡東壁土層堆積状況（北西から）



加工段 1 土層堆積状況（南から）

図版4 旭山遺跡



加工段1 土層堆積状況・遺物出土状況（南から）



加工段1 完掘状況（南から）



加工段 2 完掘状況（北東から）



加工段 2 完掘状況（南東から）

図版 6 旭山遺跡



ピット 8 土層断面
(東から)



ピット 30 土層断面
(西から)



ピット 51 土層断面
(西から)



礎石建物完掘状況
(南から)



礎石建物北東側の状況
(東から)



SD01 土層断面
(西から)

図版8 旭山遺跡



SK01 検出状況（南東から）



SK01 完掘状況（南東から）



SKO3 土層断面
(西から)



SKO4 土層断面
(西から)



SKO4 完掘状況
(西から)

図版 10 旭山遺跡



古道トレンチ 1 完掘状況（東から）



古道トレンチ 3 完掘状況（西から）



古道トレンチ 4 完掘状況（東から）



古道トレンチ 5 完掘状況（東から）



古道トレンチ6完掘状況（南から）



旭山遺跡西側に続く古道の現状（西から）



古道トレンチ2付近の水路内の加工（北から）



旭山遺跡西側の古道に接する岩窟（南から）

図版 12 旭山遺跡



旭山遺跡全景（空撮 西から）



旭山遺跡全景（空撮 東から）



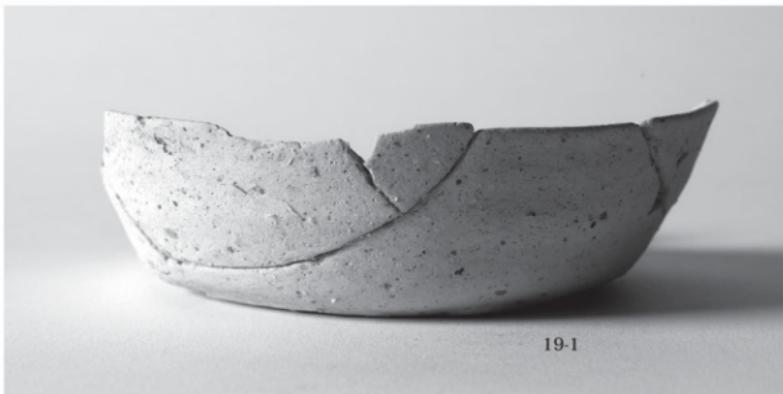
19-3



19-3

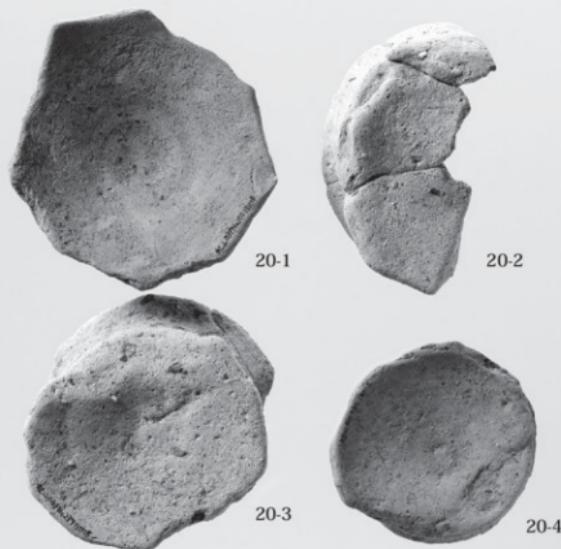
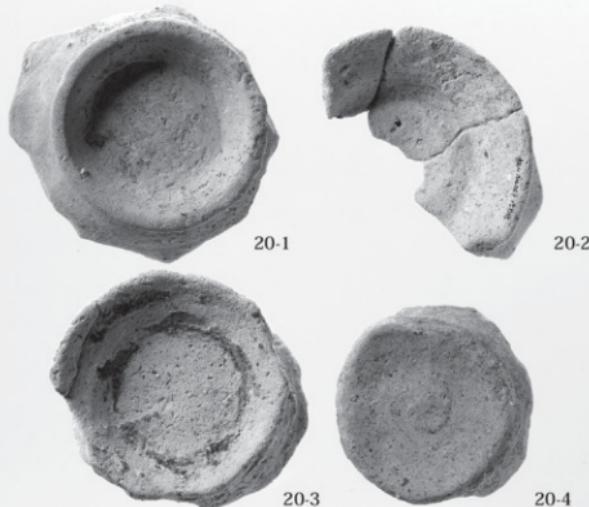


19-3

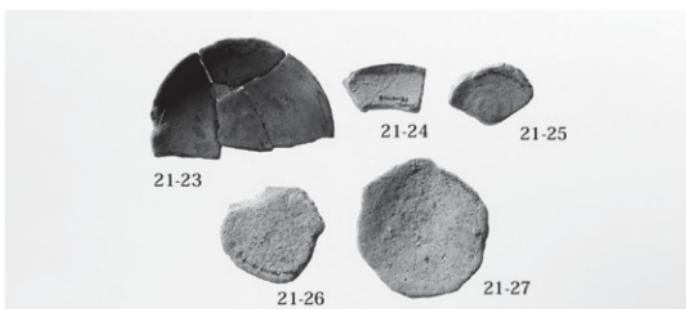
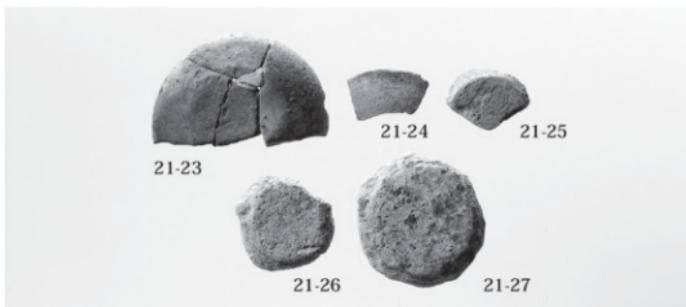


石器・瓦・須恵器

図版 14 旭山遺跡

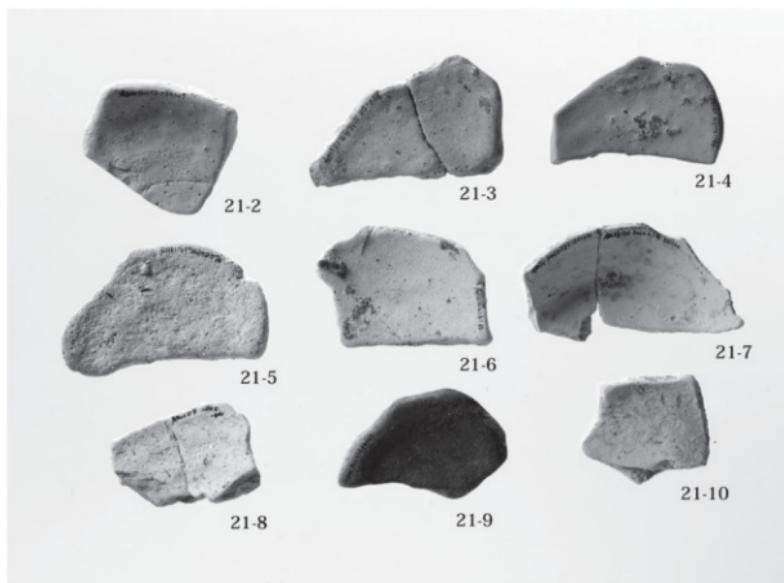
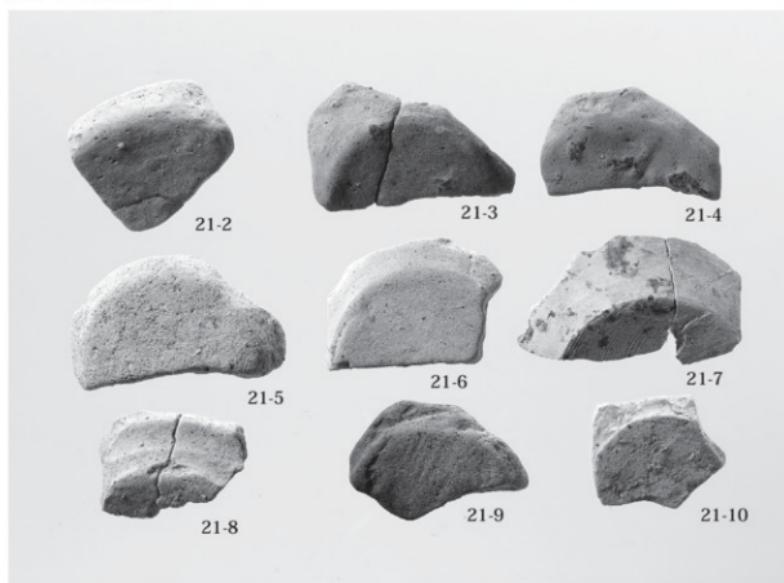


土器（1）

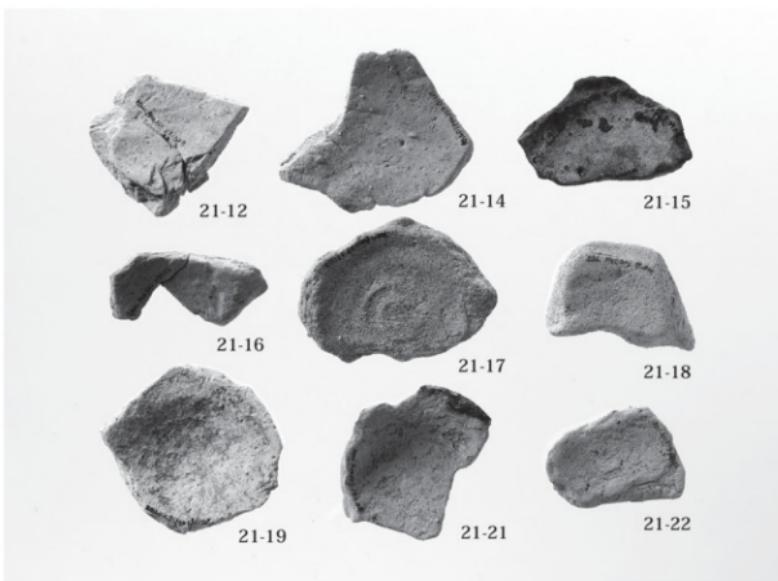
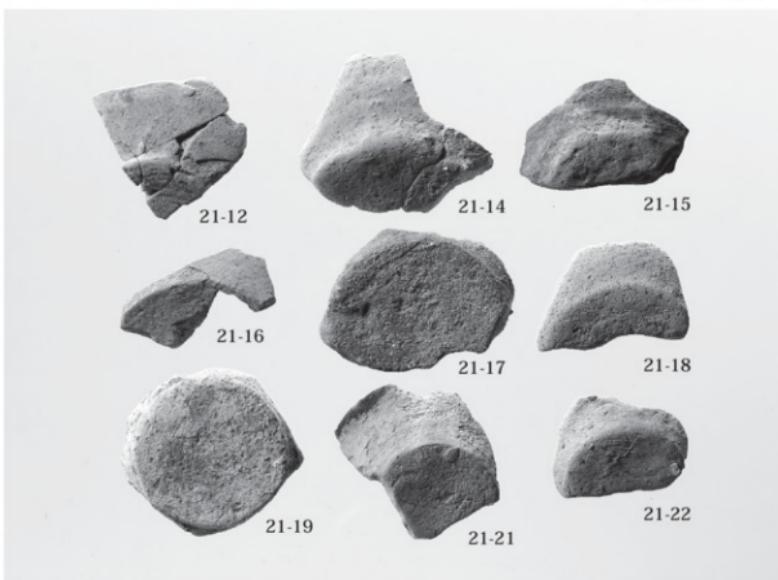


土師器（2）

図版 16 旭山遺跡

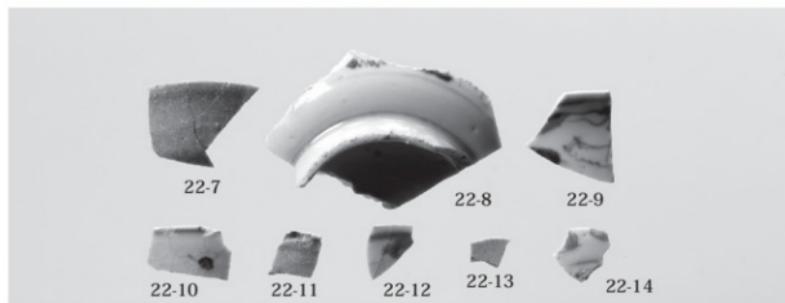
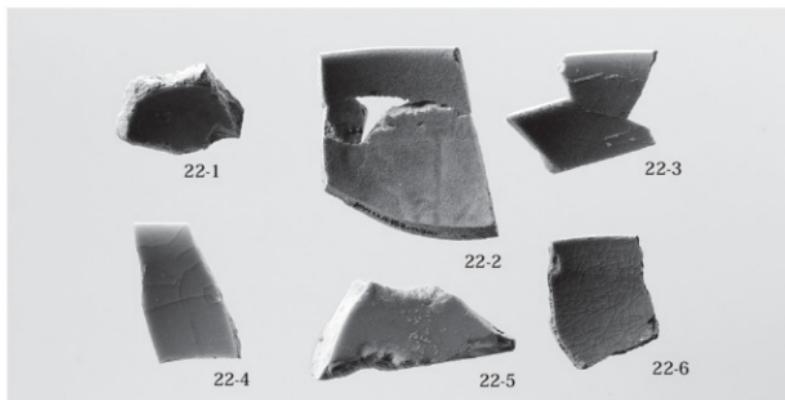
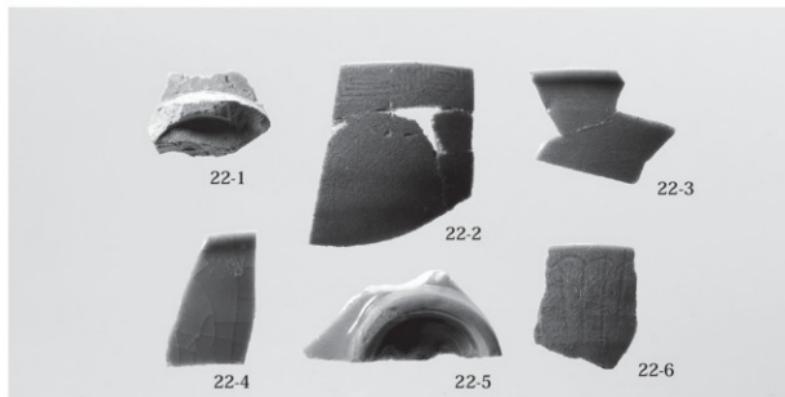


土師器（3）

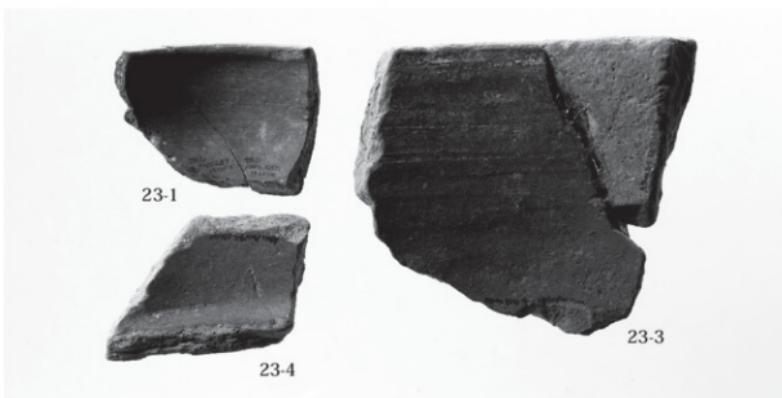
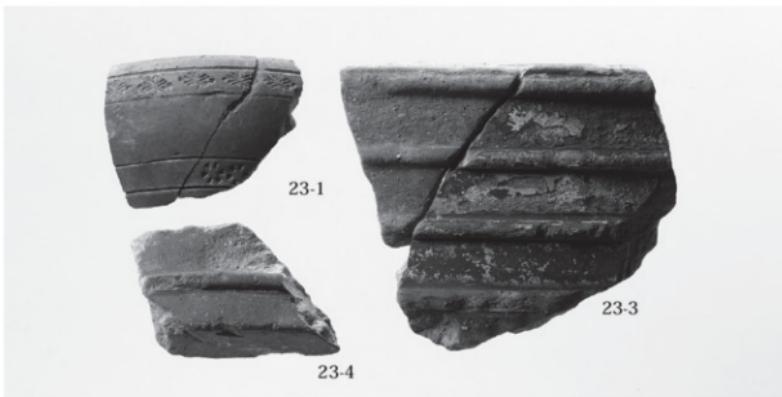
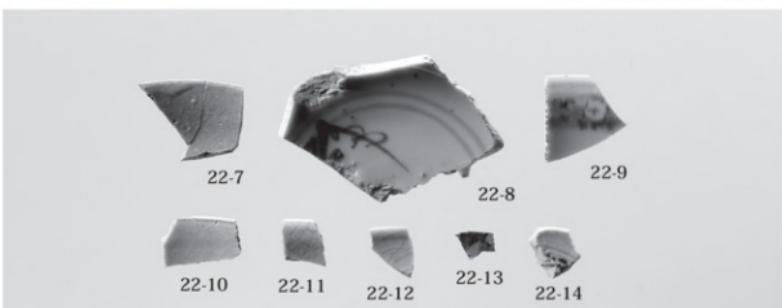


土師器（4）

図版 18 旭山遺跡



白磁・青磁・灰青釉陶器・青花磁器



青花磁器・瓦質土器（1）

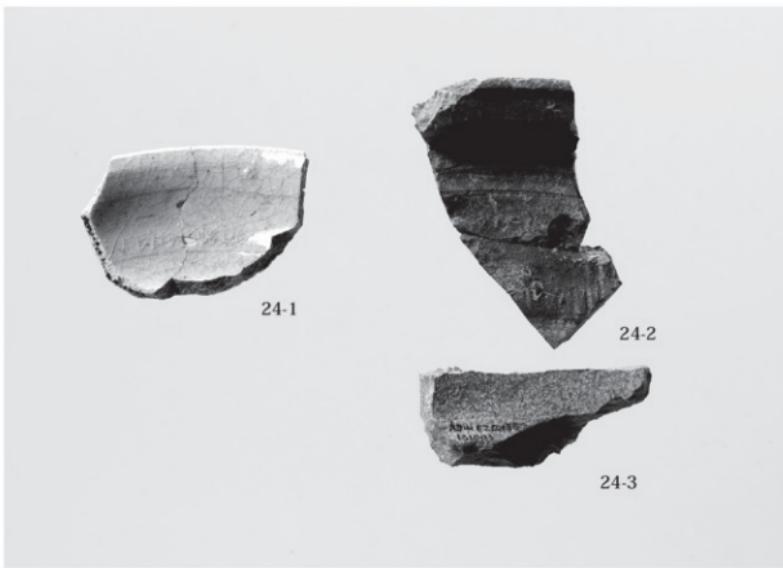


23-2



23-2

瓦質土器（2）



陶器 (1)